
雲と青と休日

仲村 歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雲と青と休日

【Nコード】

N5164U

【作者名】

仲村 歩

【あらすじ】

裏と表・光と影が交錯する

王道？ラブストーリー

朝

「パパ、起きてよ」

遙か天空から声がする。

「もう、パパ。起きないと遅刻しちゃうよ」

スカイツリーの天辺から声がする。

耳を塞ぐ様に頭から布団を被った。

「最終警告です。パパ、起きなさい」

「あと、10分」

「無理、強制執行します」

「ふあ？」

「突入！」

「みぎやあああああ…… はあ、はあ、はあ。強制わいせつ罪

で逮捕されちゃうよ、菜々海」

「だって、パパが起きないんだもん」

「ゴメン」

目の前には白いブラウスに青いチエツクのスカートを穿いて胸元に青いリボンをつけた制服姿の娘・皇^{すめじぎななみ} 菜々海が腰に手を当てて仁王立ちしていた。

危うく娘の菜々海に襲われる所だった。

親子とは言え無遠慮で搦るのはやめて欲しい。

もう少しでトランクスまで剥ぎとられる所だった。

慌ててパジャマと一緒に引き上げる。

伸び放題の癖毛で隠れている目を擦りながら枕元に置いてある垢抜けない黒縁メガネをかけて立ち上がった。

「もう、無精ひげも何とかして顔を洗ってきなさい」

「はいはい」

「返事は一回！」

「了承」

顎に手を当てて洗面所に向かい顔を洗い、ひげは……放置。
菜々海がアイロンをかけてくれた白いワイシャツに袖を通し濃紺の背広のズボンを穿き地味なネクタイを締めて階段を下りる。

キッチンに向かうとテーブルの上には既に食事が用意されていた。

「早く食べてね」

「いただきます」

菜々海の気分次第で和食と洋食の日がある。

今朝はトーストだった。

焼き立てのトーストにバターを塗り噛り付く。

目の前にはサラダやカフェオーレ、フルーツにヨーグルトが掛けられているガラスの器が目に入る。

「いただきます」

菜々海を見ると手を合わせ一礼している。それは妻の躰の賜物だった。

少しだけ慌ただしく朝食を済ませ菜々海は学校に僕は仕事に向かう。

「ママ、いつてきます」

玄関に置いてあるフォトスタンドに菜々海がキスをして飛び出していく。

僕もいつまでも変わらない笑顔の妻の空に向かい『いつてきます』

と言って濃紺の背広に袖を通して黒いブリーフケースを持って菜々海の後を追いかける。

スカイブルーのクロスバイクに乗りビルの谷間を駆け抜ける。

梅雨が明けた都内は朝から太陽が容赦なく照り付け体力を奪っている。

「ファイト！ パパ」

「了承」

クロスバイクの後ろに乗っている菜々海の黒い長い髪が揺れている。

父親の僕が言うのはなんだけれど菜々海の顔立ちは妻の空に似て綺麗に整っている方だと思う。

まだ、あどけなさが抜けないがそこが可愛らしい。

「パパ、変な事を考えてないでしょうね」

「べ、別に。菜々海は可愛いなって」

「馬鹿！」

菜々海が僕の肩甲骨の辺りに拳を叩き込んだ。

「うわぁ」

「危ないよ、パパ」

「危ないのは菜々海でしょ」

「もう、只でさえ二人乗りは交通違反なのに」

「2万円以下の罰金か科料だね」

「科料って何？」

「千円以上、1万円未満の財産を強制的に徴収する刑罰だよ。市町村の犯罪人名簿には記載されないけれど検察庁保管の前科調書には記載されて前科がついちやうんだよ」

「うわぁ、大変だ」

「だね」

大通りに出ると直ぐにバス停が見えてきた。

バス停では菜々海の友達が手を振っている。

「パパ。いつてきます」

「それじゃ、僕もいつてくるね」

「うん」

菜々海がいつもの様に後ろのキャリアから飛び降りて走り出す。

クロスバイクが軽くなり一気に加速する。

「菜々海、おはよう」

「可奈、おっはー」

菜々海に向かって手を振っていた背の高い女の子がにやけながら菜々海をからかう様に言った。

「今日もパパと一緒になんだね」

「うん、だつてパパに送つてもらつた方が楽じゃん」

「でも、あんな若いパパで良いな。うちの親父なんか信楽焼きの狸の置物みたいだからね」

「そうかなあ。パパだつて家じゃ置物みたいよ、置物と言うかぬいぐるみかな。ポケットとして何もしないしさ」

「でも、狸よりマシでしょ。菜々海のパパつて31歳だっけ」

「う、うん。ママが生きてたら36歳だよ」

「凄いな。菜々海のパパつて」

「でもさ、パパと一緒に」

「それは判つてる。でも親子なんですよ」

「うん」

そこに東都女子高校行のバスがやってきて二人は乗り込んだ。

クロスバイクを加速させると直ぐに内堀通りが見えてくる。

日本の中心と言えば良いような場所に僕の職場がある。

左手には江戸城跡つまり皇居があり、右手には開催時にはヤジが飛び交う国会議事堂が見えてくる。

そしてその先には幾つもの省庁が立ち並び、その一角にある一際目立つ建物が僕の職場だった。

泣く子も黙る桜田門なんて呼ばれている日本国首都特別警察の警視庁の中に僕の職場がある。

でも、僕は警官でも刑事でもない一般職員と呼ばれている公務員だ。通用門に向かっていると大きなサングラスをかけた栗毛色の長い髪の毛の女の子が何かを探るようにキョロキョロしている。

ふわっとした目の覚める様なブルーのチュニックワンピースに七分のジーンズを穿き足元はキャメル色のグラディエーターサンダルの彼女がいきなり僕の自転車の前に出てきた。

慌ててブレーキを掛ける。

「M i s c u s s i .」 (ごめんなさい)

「Non fan niente.」(大丈夫ですよ)

聞きなれないイタリア語だったけれど僕は咄嗟にイタリア語で返答していた。

すると彼女は驚いた顔をしてすぐに質問をしてきた。

「Dov'è l'ingresso?」(入口は何処なの?)

「polizia? E lì.」(警察? あそこだよ)

僕が指をさすと慌てるようにして正面玄関に向かっていく。

彼女を見送り通用門にクロスバイクを向ける。

今日は遅刻せずに来る事が出来たみたいだ。そう思った瞬間に後ろから悲鳴とも取れる声が聞こえてきた。

「Non mi toccare!」(触らないで!)

彼女の声だった。

振り向くとSSつまり要人警護官みたいな厳ついスーツ姿の男に追

シックレットサービス

いかけられるようにして彼女が僕に向かってきた。

そして事もあるつか僕のクロスバイクのキャリアに飛び乗って僕の背中を叩いた。

「Sbrigati!」(急いで!)

「ええ、何で?」

思考より早く体が動いていた。

振り返ると男達の横に黒いセダンが止まり車で追いかけてくるようだ。

それでも地の利はこちらにあるはずだ。細い裏路地を縫うように走り、追いかけてくる車を撒く。

気が付くと重要文化財に指定されている赤レンガ造りの東京駅丸の内口駅舎が見えてきて人の流れが多くなっている。

特にこの朝の朝の時間帯は東京駅前には人波が絶える事は無かった。すると急にバイクが軽くなった。

バイクを止めると後ろには彼女の姿はなかった。

この人ごみの中で探すのは不可能に近い、彼女も僕と同じ事を考えたのだろうか。

腕時計を見ると既に出勤時間は過ぎていた。

桜田門

恐る恐る職場である総務部情報管理課に顔を出すと課長はまだ現れていないようだった。

直ぐに末席にある自分のデスクに向いパソコンを立ち上げる。

僕の仕事は与えられた資料をパソコンに入力して仕分けするだけの単純で単調なもので、毎日絶えず資料が送られてくるので永遠に終わる事のない仕事だった。

「あれ？ 皇君。おはよう」

「おはようございます。花さん」

同僚で僕と同じ一般職員の橘 花さん。

髪を一つに纏めシンプルなメガネをかけ、白いブラウスに紺色のベストを着ている。

おそらくスカートも紺色だろう。

絵に描いた様な事務員さんだ。

「今日も遅刻なの？」

「すみません、ちょっとトラブルがありました」

「その巻き込まれ体質を何とかした方がいいわよ」

「あはは、できればしていますよ」

会話をしながらもキーボードを叩く手は止めない。

机の上に積み上げられた書類や資料を打ち込み仕分けしていく。しばらくすると声を掛けられた。

「皇、広報室に行つて来い。お呼びだ」

「は、はい」

不思議な事に情報管理課の一般職員なはずなのに総務部の至る所から呼び出しがかかる。

呼び出された先では大概データの修復やパソコンの修理が待ち構えている。

こんな事が度々あっても周りは何故か不審に思わなかった。

昼休み。

僕は庁内にある食堂や外に行かずに自分の机で弁当を広げた。

「皇君、今日も菜々ちゃんのお弁当なの？」

「はい？」

「菜々ちゃんも毎日大変ね。お父さんがもう少しシツカリしないと」

「反面教師ですかね。それに菜々海は自分の弁当を作るついでだつて」

「はあ、親が子どもに甘えてどうするの」

僕は反論をせずに菜々海が作ってくれたお弁当に箸を伸ばす。

朝がトーストの洋食系だったからお弁当は魚の照り焼きがメインの和食系だった。

「でも、いつ見ても美味しそうよね。まさか皇君が教えたなんて事は無いわよね」

「菜々海は勉強熱心ですからね」

「それでも、料理は難しいじゃない。センスと言っかな、こんな事を言っつていいのか判らないけれど母親の味を知らないと家庭科で作った料理みたいになるじゃない」

「そうですね。僕も少しは料理できますけれど教えるほどじゃないから」

「やっぱりお父さんに対する愛情の深さかしら」

花さんの言うとおり菜々海は母親の手料理の味を憶えていない。

厳密にいうと憶えているのかもしれないがそれは記憶の断片としてだろう、菜々美が母親の空と別れたのは物心が付くか付かないかの3歳の頃なのだから。

そんな事を話しながら食事をしていると苦々しい顔をしながら課長が顔を出した。

「八雲、お呼びだ」

「ふあ、い？」

咀嚼中の卵焼きを飲み込み慌てて返事をした。

「役立たずの八雲は物を食べながら喋るなど言われなかったのか？」
「すいません、突然だったので。それで何処からですか？」
すると課長が親指でサムズダウンした。

「下だ。資料室。美咲女史がお呼びだ」

「それじゃ、これを済ませてから」

「すぐに行け！ 俺だって食事中に抜けて来たんだ」

「でも……」

急いで菜々海が一生懸命に作ってくれたお弁当を味わうことなく申し訳なく思いながらかけこむ。

課長の顔は爆発寸前だった。

「課長、血圧が上がりますよ」

「全ての元凶はこのモズク頭の役立たずの皇 八雲なんだよ。橘君」

「あら、皇君は今日の打ち込みは殆ど終わっているのよね」

「はい、それじゃ行ってきます」

弁当箱を片付けて課長に頭を下げて情報処理課を後にする。

昼休みは半ばを過ぎたところでまだ終わってはななく時間外労働と言ったところだろうか。

「本当に可哀想に。またレンタルですか」

「あの役立たずの何が必要なのか、さっぱり判らんよ」

「うふふ、課長の評価が低すぎるんですよ。どこでも重宝がられるパシリ属性なんですよ。で、今回の貸出期間は？」

「未定だそうだ、美咲女史にも困ったものだ」

「そうですね」

「橘君は困っている様な顔には見えんが」

「課長、めったな事は言わない方がいいですよ。皇君がここに配属になったのも美咲さんの力添えで。私達だけじゃ追いつかない過去の書類の整理も殆ど皇君に任せているのは課長ですよ」

「あいつの唯一の取り柄だからな」

僕はエレベーターに駆け込んで最下層にある地下資料室に向かって

いた。

最下層にある通称・資料室は空調が常に一定にされ過去から現在までの全ての事件事故に関する資料がファイリングされ保存されている。

一見すると薄暗い図書室と言ったところだろうか可動式の書庫が整然と並んでいる。

だがそれはダミーに過ぎず全ての情報はメインコンピューターに記憶されている。

しかし、アクセスするにはそれなりの権限が必要で警視庁に勤務する警察官ですら見ることはできず。ましてや一般職員の僕なんか論外もいところだ。

「美咲。今度は何なんだ？ 昼休みに呼び出しやがって」

「こつちよ、八雲」

資料室の奥にある嚴重なセキュリティで保護されている最重要機密書類があると思われる部屋に入っていく。

ここは一言で言えば裏の世界の入り口で都警察の本部である警視庁の暗部であり、表沙汰にできない事を極秘裏の内に処理する誰にも知られてはいけない機関で公安にすら殆ど存在を知られていない部署だ。

簡単に言えば超法規の特別公安警察と言った所だろうか。

大きなモニターが正面にありダブルベッドの様な大きな机にパソコンが数台並んでいる簡素な部屋だ。

そしてこのボスが菜々海の母親である空の友人だった美咲早苗みさきさなえで、彼女はあらゆる手段を駆使して僕がここで一般職員として働かされる羽目になった。

彼女は内調つまり内閣情報調査室とも太いパイプで繋がりを持っている。

すらりとしてスタイルに男勝りのスーツ姿でそれが嫌味なほど似合っている。

才色兼備とは彼女に為にある言葉なのかもしれない。

庁内では人当たりのいい地下の番人を装っている。

情報処理能力は僕の数倍以上を行き超ど級のハッカーで情報収集能力も右に出るものは居ないほどで、体術のスキルに關しても秀でたものを華奢な体に似合わず秘めている。

「しかし、いつも急だな」

「あら、急じゃなきゃ仕事なんて私の所になんて来ないでしょ」

「まあ、そうだが」

「それに今回はあなたでないと手に負えないのよ」

「中東のテロ組織でも壊滅させるのか？」

「それより難しいかもしれないわね」

「それじゃ、他をあたるんだな」

「あのね、AAAのあなたにしか出来ないって言ったでしょ。気難しい女の子の護衛よ」

「それこそ、他をあたれ。専門外だ」

「請負屋があなたの本業でしょ」

「はあ〜」

肩を落としてため息をつく。

請負屋と言つか何でも屋が正しいかもしれない。

表では扱えない様な物事を処理するのが僕の本業であり裏の顔だった。

「で、誰を護衛するって」

「彼女よ。もう既に護衛できない状態かもしれないけどね」

「随分と呑気だな」

「私を訪ねて来る手筈なのに現れないのよ」

そう言いながら美咲は一枚の写真を机の上に滑らせた。

「名前はリーナ」

「栗毛色の髪の毛の長い女の子が」

「知っているの？」

「いや、今朝通用門で会った。厳つい男に追いかけていたけどな」

「で、どうしたの？」

「丸の内の近くまで運んだら消えたよ」

美咲が提示した写真に写っているのは切れ長のグリーンの瞳が印象的な今朝出会ったばかりのイタリア語の女の子だった。

詳しい事と言っても先に述べた事が殆どなのだが美咲に事細かく説明させられてしまう。

こんな事をしているより彼女を探す方が先決なのだが今頃は既に…

：

あまり考えたくないイメージが浮かんできた。

髪の毛を掻き上げて腕を下げると固い何か腕に当たり、背広の上着のポケットに何かが入っているのに気付いた。

取り出してみるとそれは指輪だった。

そしてメモ用紙の様な小さな紙が床に落ちた。

「何なの？」

「指輪だ、彼女かもしれない」

「如何したの？」

「いや……」

指輪には大きな角を持った山羊の紋章が彫り込まれていた。

これと似た物を何処かで見たとような気がして言葉を濁してしまった。

「恐らく彼女が慌ててあなたのポケットに投げ込んだのね。メモには携帯の番号が書かれているわ」

「無事なら居場所が判明しそうだな」

「そうね。生きていればね」

あまりにも酷い言い様だ、仮にも護衛してくれと依頼されたんじゃないのか。

そんな事を考えていると美咲がすぐに居場所を調べ始めた。

携帯番号で居場所を調べるなんて事はここに居れば当たり前前で、直ぐに居場所が判明した。

「移動しているわね。行先は日比谷公園かしら」

日比谷公園は目と鼻の先だ、何とか追っ手を撒いてここに来ようと

しているのだろう。

それはおそらく相手の思いつばだ。

最後まで聞かずに資料室を飛び出し美咲に電話する。

「すぐに詳しい情報を」

「判っているわよ」

笑いながらそんな事を平然と言つてのける美咲はかなり腹黒い。

恐らく俺が依頼を断るなんて事をしないと云つのを予め判っていたのだろう。

日比谷公園

メガネを外し黒いジェットヘルメットをかぶると美咲の声がする。

いつもの事だが大まかな情報しか教えられない、守秘義務と言えは聞こえはいいがあえて伏せていると言った方がいいのかもしれない。美咲の口癖は『先入観を持ってはいけない臨機応変に』だった。

裏稼業の俺らの所に回ってくるようなミッションだ、情報を簡単に流せないのも良く判るし言われた事をただ完遂するのが僕の役割だ。今回のミッションは令嬢の護衛で期間は2週間、2週間後に成田にて引き渡し。

そして気難しい令嬢を退屈させ無い事と俺の専門外のミッションが含まれていた。

都内では車を使用しての逃走は困難を極める。

一応、治安大国なんて言われている日本だ。余程の事がない限り昼間から発砲なんて事態にはならない事が予想できる。

地下駐車場から白いカラーリングのベスパGTS 300ieで都内に飛び出した。

日比谷公園に到着すると直ぐにスマートフォンで彼女の所在を確認する。

野外音楽堂の入り口付近で沢山の風船を売っているのが目に入る、何かイベントをしているのかもしれない。

大量の風船を大人買いすると売り子は目を丸くして驚いていたが売り上げが一気に上がり深々と頭を下げていた。

追い詰められたのか彼女の動きは第一花壇と呼ばれている広場で止まっていた。

慌てず急がず広場に向かう、只でさえ大量の風船を持っているので人目を引く。

目の前が開け第一花壇に出ると昼休みは終わっている時間とは言え木陰にはのんびりしているサラリーマンがベンチに腰掛け。

広場では親子連れが遊んでいるのが目に入る、そんな親子連れの子どもが風船を見て駆け寄ってくる。

母親が慌てて制しながら追いかけてきた。

その向こうには2人のダークなスーツ姿の男に腕を掴まれている彼女の姿が見える。

彼女は観念したのか抵抗しようともせずに男の顔を睨みつけている。その彼女の栗毛色の綺麗な長い髪は無残にも切られていた。

彼女が逃げ回っている間に相手の目をかく乱する為に自分自身で切ったのだろう。

相手は2人、仲間がいるとすれば車で待機しているであろう運転手だ。

風船を持つ手を緩めると無数の色とりどりの風船が青空に舞いだす。周りの視線が風船に集中する。

俺は彼女に向い走り出し2人の男の首筋に手刀を軽く打ち込む。

映画などで出てくるあれだ。

しかし、実際にあの通りにやれば失神をするかもしれないが頸椎捻挫などを起こし相手に大けがを負わせる事になる。

そんな怪我を負わせる訳にはいかない、例え相手が犯罪者であつても。

それに俺は彼女を襲う組織について何も聞いていない。

男は瞬時に意識を失い芝生の上に崩れ落ちる。

俺は彼女の手を取って平然とした態度で歩きだし広場を後にする。

ほんの一瞬の出来事で周りに居た人々の視線は空に舞い上がった風船に釘づけにない、視線を広場に戻すと男2人が広場の真ん中でスーツを着たままお昼寝をしていた。

第一花壇から大噴水広場にでると彼女が俺の手を振りほどいて俺の顔を怪訝そうに見て立ち尽くして動こうとはしなかった。

当たり前前の反応だろう、助けてもらったとは言え彼女は俺の素性を知らないのだから。

噴水から大きな水柱が上がる。

ここは有名なスポットでテレビや雑誌では撮影スポットとして知られ度々メディアに登場する。

それなりに人がいて彼女を拉致しようとしていた男達もこれ以上は騒ぎを起こさないだろう。

万が一、騒ぎを起こせばすぐに通報され表の連中がなだれ込んでくるのが目に見える。

そんな事はどうでも良くなり、移動販売しているアイスクリーム屋に足を向けた。

ソフトクリームを2つ購入して1つを彼女に渡し噴水の淵に腰を掛けてソフトクリームを口にする。

緊張し続けるのは体に良くないし判断を鈍らせる。

彼女は不機嫌そうに俺と少しだけ間を開け座ってソフトクリームを食べ始めた。

食べ終わる頃を見計らって声を掛ける。

「Andiamo.」(行こう)

「あなたは誰？」

出会いがイタリア語だったのでイタリア語で声を掛けると綺麗な日本語が帰ってきた。

「日本語が喋れるのか。俺は皇 八雲だ」

「ヤクモ？」

「ミス美咲に君を守るように言われた」

「そう。それじゃ私の名前も知っているの？」

「リーナだろ」

まだ、表情が硬い。

仕方なくクセ毛の前髪をおろし黒縁のメガネをかけると彼女がハツとした表情になった。

「朝の人だったの、ありがとう。私の父は日本が好きで私にも日本

の事を色々教えてくれたの」

「そうだったのか。それじゃ行くかうか」

「ええ」

その時、微かに可愛らしいお腹の虫が鳴く音がした。

腹が減っては、か…… レストラン、定食屋にそば屋。この界隈の食事が出来る所が頭の中を駆け巡っていく。

若い子ならと言う事で公園に程近い大きな の字が目印のファーストフードに来ていた。

どこかのフレンチかイタリアンも考えたが彼女の今の身なりでは嫌がるだろうと思った。

場所柄かサラリーマンが多い。

彼女を連れてカウンターに向かると彼女は物珍しそうにキョロキョロしている。

「食べたい物を注文して」

「え、ええ」

彼女が戸惑っている。

日本語は喋れるが日本語を読むのは難しいのかもしれないと思い、カウンターの上のシートを指さしながら簡単に説明をする。

外国の人間にとって日本語は難解だ。

英語なんて26文字のアルファベットで全てだが、日本語は漢字仮名交じりでそのうえ片仮名まで入り乱れ表現の仕方も多様で日本人である本人でも誤解を生むことが多々あるし、勘違いをして使っている事もある。

彼女が指をさして注文したのはフィッシュバーガーとイタリアンチキンサンド、それにサラダとアイステイアのセットだった。

ドリンクはアイスクォラムラテとアイステイアをどちらにするか悩んでいたが食事と一緒にだと言う事を考慮してのチョイスなのだろう。

俺はベーコンレタスにチーズバーガー、ポテトにアイステイアのチョイスだった。

食事を済ませ、カウンターに向いホットとアイスキャラメルラテを購入して彼女の前にラテをおく。

ポケットからスマートフォンを取り出し美咲に『確保』と簡潔なメールを送信する。

すると直ぐに着信を告げる。

美咲が返信をしてくるような事は非常時以外にあり得ない、スマートフォンには菜々海の文字が浮かんでいた。

『今日から試験勉強で可奈の家に泊まるから』

『追伸、独りでもちゃんにご飯食べなさい』

俺の方から菜々海に頼もうと思っていたので手間が省けたし、要らない言い訳を考えずに済みそう。

彼女の方を見ると美味しそうにキャラメルラテを飲んでいる。

とりあえず彼女の髪の毛を何とかして着替えを買うのが先決だ。

美容室に洋服となると近場の銀座や有楽町ではなく反対方面が良いだろう。

この界限では彼女を探しているに違いない。

ファーストフードを出てベスパが置いてある日比谷公園脇の歩道に向かう。

シート下からヘルメットを取り出し彼女に渡し、タンDEMステップを引き出す。

俺がシートに座ると躊躇いもなく後ろに乗ってきた。

美咲が言っていた気難しい女の子とはイメージがかけ離れている。

何処かの令嬢には違いないのだがとても素直な感じを受ける。

世間一般的な事は疎そうだがそれはハンバーガーを食べている時に気が付いた。

ファーストフードで不思議な顔をして何かを探している。

仕方なく俺はバーガーに被りつく彼女も恐る恐る小さな口を大きく開いてバーガーに噛り付いた。

ファーストフードなんて来た事がないのだろうと言う事が想像できる。

それならば菜々海に散々連れ回された渋谷や原宿&表参道なんか
喜ぶかもしれないと思えばスパを走らせた。

原宿&表参道

原宿の裏路地にある知り合いの店にベスパを止めさせてもらい情報処理課にいる花さんに電話を入れる。

「もしもし、仕事中にすみません」

「あら、珍しいわね。皇君が電話してくるなんて、今度は何に巻き込まれたの？」

「あの、出先で外人に捕まって人気の美容室を教えてください」

「仕方のない人ね。現在位置は？」

「原宿、表参道界限です」

即答で数件の名前と場所を教えてくださいました。

花さんは事務員さんにしか見えない容姿をしているけれど、もの凄い情報通でホームページやブログを開いていてネット上では神と崇める信者がいるほどファッションやそれに付随する事柄に長けている。

理由は判らないが大事な人を連れていくならアリスにしてくださいと言われてしまった。

何でも双子の女性オーナーがやっている小さなお店だが常に予約でいっぱいらしい。

私の名前を出せば一発よと付け加えられた。

そのお店は表参道から脇道に入った場所にあった。

店の前は小さな庭になっていて花や木々が茂っている。

その向こうにガラス張りのお店があり庭のわきを通ってドアを開ける。

「すみません、花さんの紹介で来たのですが今から大丈夫ですか？」

「いらつしゃい……もしかして」

「はあ？」

「八雲さん？」

「ええ、そうですね」

店内にはお客さんが1人だけ椅子に座って外を向きながらカットをされている。

色白のナチュラルメイクをしたセミロングの女の人が俺の名前を言うのと、奥からそっくりな顔をしたショートカットの女の人が顔を出して俺の顔をまじまじと見ていた。

「あの、僕じゃなくて彼女のカットを頼みたいのですが大丈夫ですか？」

「もちろんよ。花ちゃんの紹介で花ちゃんが良く話している八雲さんがいらつしゃったのだから出来ないなんて言えないしね」

どんな話を花さんはしているのだろう、慌てて黒縁のメガネをかけると2人ともあからさまに肩を落として残念そうな顔をした。

するとショートカットの女の人がリーナを椅子に案内して彼女の髪を触っている。

「もう、女の子の髪は命なのだからもうちょっと大事にしないとね。まさかとは思うけれど八雲さんじゃないわよね」

「僕じゃないですよ。ちょっと事情があつてですかね。綺麗にしてあげてください」

「もちろんよ。でも彼女は日本人じゃないわよね」

「イタリア系ですよ。でも日本語は普通に話せますから」

「それにしても綺麗な髪ね」

そう言うのと日本語でやり取りしながら髪型を決めているようだったが、あそこまで大雑把に切ってしまったらショートにするしかないだろう。

後はプロに任せるだけだ、なんて考えて店の奥にあるソファアに腰を掛ける。

セミロングの方がお姉さんの蓮さんでショートカットの方が妹の凜さんらしい。

そしてカットもそれぞれするが蓮さんは主に髪の毛が長いお客さんを凛さんが髪の毛が短いお客さんを担当することが多いと教えてくれた。

先に居たお客さんが帰ると質問攻めにあってしまつう。

「彼女との関係は？」

「ホームステイで僕の家に来ることになったんです」

「それじゃ、恋人じゃないんだ」

「違いますよ、僕なんかじゃ釣り合いが取れないでしょ」

「また、謙遜を」

そんな会話の中から花さんが俺の事をどう話しているのが判つてきた。

何でも不思議な男と言つのが花さんの評価らしい。

仕事は出来るのに惚けたキャラで居るのか、もう少し清潔感のある髪型をしてメガネを外せばかなりいい男になるのになんて事を話しているようだ。

小一時間もすると彼女の髪が仕上がつたようだ。

見るとソフトな感じのショートヘアが良く似合っている。

「綺麗になつたでしょ。彼女のグリーンの瞳も綺麗だけど八雲さんの不思議な色の瞳も見てみたいなあ」

「それも花さんが？」

「まあ、そうね」

予約があるのに嫌な顔をせずカットをしてくれた、そのお礼になんてならないだろうがメガネを外しクセ毛の前髪を手で掻き上げた。

「うわあ、不思議な色ね。琥珀色と言えば良いのかしら」

「純粋な日本人ですけど隔世遺伝らしいです。祖母が僕と同じ瞳をしていたと聞きました。あの、もう良いですか」リーナも蓮さんと凛さんに釣られて俺の顔を覗き込んでいる。

そして3人ともどことなく顔がほんのり赤い、リーナに目をやると真っ赤になっている。

「う、うむ。何だか凹むな」

「自信を持って良いと思うわよ」

「そうね」

蓮さんと凜さんがそんな事を言うが何に自信を持ってと……

アリスを後にしてリーナの洋服などを買うために原宿方面に向かう。

カオスの街・原宿奇抜なファッションが目を引きがどれを見ても菜々海には絶対にして欲しくないスタイルだった。

リーナは興味津々なだろう目を輝かせて走り出そうとした。咄嗟に腕をつかむ。

「ロストしたらどうするんだ」

「あ、申し訳ありません」

「僕に気を使う事は全く無いゴメンかごめんなさいで良いよ」

「はい」

「それじゃ、リーナの服を買いに行こう」

「えっ、うん！」

大人びた表情が一瞬で少女の顔に変わった、ファーストフードもあまり食べたことがない令嬢のリーナはこんな街に来ることも無いのだろう。

はしやぎながらウィンドウを覗き込んでいる。

無論、原宿みたいな街は世界の何処を探しても無いのだろう。

日本特有と言うか原宿特有の雰囲気がある変化の激しさは劇的と言っても過言ではなく情報量の多さも異常なのだから。

人を隠すなら人の中に。

それでも警戒は怠らない、それがミッションだから。

そして相反する事も課せられている。

彼女を退屈させない事、それは彼女を楽しませてやって欲しいと言う事なのだろう。

普段は格式ばった場所が彼女の居場所なのだろうと容易に想像できる。

リーナを見るとカジュアルショップのウィンドウに張り付いて中を

見ている。

ウィンドウの中にはマネキンがブルーのストライプのシンプルなシャツワンピースを着ている。

値段もおそらく令嬢に着せるには気が引けるような値段なのだろう、原宿は若者の街なのだから。

「あれが気になるのか」

「う、はい」

申し訳なさそうに俺の顔を見上げている。

申し訳ないのはこちらだ、経費として計上するのだから。

それでもそんな事はおくびにも出せない。

リーナの手を引いてショップに足を運び店員にウィンドウの中のワンピースを見せてもらう。

「試着してみたら」

そう言いながらフィッティングルームを指さすと嬉しそうに駆け込んでいった。

この店は当たりかも知れない扱っている洋服の素材にもこだわっていて値段も周りから比べれば割高かも知れないがそれは仕方がない事なのだろう。

リーナがフィッティングルームから顔を出した、着替え終わったのだろう。

ゆっくりカーテンを開けて出てくる。

「似合っているよ」

「ヤクモ、グラッチェ」

咄嗟の時にはイタリア語になるようだ。

ワンピースを購入することを告げ値札を外してもらおうとリーナが腕に抱きついてきた。

「1着じゃ足りないだろうから他にも選びなさい」

「はい！」

リーナはワンピースやボトムスを楽しそうに選びながら店員にアドバイスを受けている。

俺は店員にインナーを扱っている店を店長に聞いていた。これだけ素材にこだわっている店だ、そういう店の紹介ならまず間違いがないと言うのが俺の見解だ。数点の買い物をして竹下通りを散策する。

リーナは俺に付かず離れず店を見て回っている。

そして今はサングラスを見ていた。

今朝していたサングラスを持っていないのはどこかで失くしたか落としたのだろうか。

色々なサングラスを掛けては外し、俺に同意を求めるが俺は首を縦には振らなかった。

カジュアルシヨップで紹介してもらったインナーを取り扱っている店に向い店員にアドバイスをお願いする。

何処となくリーナの瞳に寂しさが宿っている様な気がする。

店を出るとリーナはそんな不安を率直に口にした。

「ヤクモは仕事だから優しくしてくれるの?」

「仕事と言えばそうだが僕自身も君といると楽しいよ」

「本当に」

「ああ」

ミッション上、対象物に踏み込んではいけない。

それでももう一つのミッションは踏み込まずに出来ない事でバランスが難しい。

全く持つて後者は俺の専門外で…… 請け負った時点で美咲に嵌められたような気がしてならない。

しばらく歩き大きな名の知れたメガネ専門店に入る。

「リーナ、サングラスを選んでくれるかな」

「どうしてここなの?」

「目は大切だからね。ちゃんとしたサングラスを掛けた方が目には良いんだよ」

リーナが選んだのはフレームがブラウンラメでレンズがブラウングラデーシヨンの大きめのサングラスでサイドに可愛らしいプレートが付いたものだった。

清算をしようとするリーナが声を掛けてきた。

「ヤクモ。私にはあなたに買ってあげられるお金を持っていない。でもこれをあなたにプレゼントしたい」

それはリーナの精一杯の気持ちなのだろう事が汲み取れる。

彼女の手にはネイビーのフレームにブルーミラーのレンズが付いた精悍そうなメンズのサングラスが握られていた。

「ありがとう、リーナ。一緒に清算しよう」

「うん！」

ベスパを預けておいた知り合いに礼を言い自宅に向かう。

数日は菜々海と顔を合わさなくて済む、その間に言い訳を考えないといけない。

そんな事を考えながらベスパの足元には紙袋に入ったリーナの服があり背中にはリーナの温もりと柔らかい何かを感じながら帰宅する羽目になった。

パパなんて大嫌い！

自宅は一階がガレージになっていてその上に2階建ての煉瓦造りの様に見える家が建っていて、玄関前には小さな庭があり屋上もガーデンになっている。

警備上問題がありそうだがセキュリティはしっかりしているし、自宅の裏に建っている建物は警察関係の女子寮だったりするから安全の上ない立地条件に住まわされている。

ガレージを開けるとクロスバイクが既に運ばれていた。

クロスバイクの横にベスパを止めて上に向かう。

菜々海は可奈ちゃんの家泊まると言っていた、外はもう薄暗くなっている既に準備をして可奈ちゃんの家にいるのだろう。

直ぐに風呂のスイッチを入れる。

リーナの荷物はとりあえずリビングに置いて汗を流してさっぱりするのが先決だ。

程なくしてアラームが鳴り風呂に湯が溜まったのを知らせた。

「リーナ、バスタイムだ」

「はい」

半日で彼女もリラックスしてきている。

それは彼女の適応能力が高い事を伺わせた。

リーナにバスタオルを渡し、2階に上がりリーナの部屋を準備しているとしばらくして玄関が開く音がして緊張が走る。

すると下から声がしてきた。

「あなた、誰なの？」

「私はリーナ。あなたは？」

「わ、私は皇菜々海よ。この家の、パパの娘よ」

「パパ？ 娘？ ナナミ？」

急いで階段を駆け下りると玄関には菜々海が、そして廊下にはバスタオルを巻いただけのあられもない格好をしたリーナが立っている。

僕の姿を見て菜々海の瞳から涙が零れ落ちた。

「菜々海、事情をきちんと話すから」

「パパなんて大嫌い！」

ドラマなんかでは娘が誤解をした場面で玄関を飛び出すのだからこれど菜々海の対応は違った。

瞬時に僕に向かって駆け出し上段の蹴りを繰り出す。

何とか片手を上げてガードするけれど菜々海の蹴りは鞭の様にしなり側頭部に衝撃を受ける。

バランスを崩した僕の体に情け容赦なく中段の蹴りが突き刺さり。

何とかこらえて腕を突き出すと待っていましたとばかりに菜々海に腕を掴まれ。

次の瞬間、僕の体は宙に舞い廊下に叩きつけられた。

止めの一発が落ちてくると思うと何か柔らかく良い香りがする物が僕に覆い被さり、僕の意識は一瞬だけ吹き飛んだ。

「痛たたたた」

「パパ、ごめんなさい」

目を開けると廊下の天井が見え側頭部に氷嚢を当てている菜々海の姿があった。

「もう少しだけ冷静にね」

「だって、パパが女の人を私が留守の間に連れ込んだと思って」

「まあ、それに関しては言い訳をさせてね」

「うん、たっぷりとね。でもあの人パパを庇うなんて思ってもみなかった」

「へえ？ リーナが？」

それじゃあの柔らかいものって……

起き上がりリビングに行く到着替えを済ませたリーナが俯いてソファに座っていた。

「私の所為で」

「リーナ、違うよ。僕がちゃんと話さなかったのがいけないんだ。

決してリーナの責任じゃないからね」

「でも」

リーナが今にも泣きそうな顔で僕を見上げる。

僕は口到人差し指を当ててウインクした、それだけでリーナは理解してくれたようだ。

菜々海が僕の裏の顔や裏稼業の事を知らない事を。

ソファーに体を沈める。

僕の前ではリーナがキョトンとした顔をしてテーブルの横には腰に手を当てて菜々海が僕の事を見下ろしていた。

「それじゃ、たっぷりと説明してもらいます」

「菜々海、試験勉強で可奈ちゃんの家じゃないの？」

「もう一発くらい叩き込むと鈍いパパでも判るかなあ」

拳を握りしめた菜々海の顔が引きつっている。

「美咲に頼まれたの。事情があつて彼女をしばらく預かつてほしいつて」

「早苗さんに頼まれたと言う事は判った。でも何で私に教えてくれなかったの？ 私が居ないと思つて彼女を家に連れて来たんでしょ」

「ゴメンね。ホテルにでも思つただけで慣れない国じゃ大変だと思つてね」

「それでも彼女は日本語を話せるんだし」

「依頼人が美咲じゃなければそうしたよ」

「もう、早苗さんの頼みごとじゃ断れないもんね」

「菜々海は行かなくていいの？」

「何処に？」

「可奈ちゃんち」

菜々海が怖い顔をして真つ直ぐに僕の顔を見ている。

どうやら行く気はないらしい、それにこれ以上突っ込めば盛大にヘソを曲げるだろう。

そうなつた菜々海を宥めるのは容易い事じゃないのをよく知っている。

リーナより遥かに菜々海の方が気難しい……ってまさかそういう意味じゃないよね、美咲。

「とりあえず紹介をしよう。今日からしばらく一緒に暮らす事になったリーナだよ」

「私は皇 菜々海。15歳、高校生」

ぶつきら棒に菜々海が答える、美咲に頼まれたとは言え僕が見ず知らずの女の子を家に連れてきたのが余程気に入らないのだろう。

難しい年頃だけれど菜々海がとても優しい女の子だと言う事を僕は知っている。

かなりの焼きもち焼きで僕の周りにいる女性を見る目は特に厳しい。菜々海が良しとするのは美咲と花さんくらいだろうか。

「リーナさんは何歳なの？」

「私は19歳です」

「へえ、そうなんだ。何処から来たの？」

「その……」

リーナが困った顔をして俯いてしまう。

「菜々海、言ったはずだよ。事情があつて預かつたつて」

「ずるい、そんな言い方されたら何も聞けないじゃん。パパは何処の誰かも知らない人を簡単に預かつたりするんだね」

「判つた、それじゃ……」

ため息を付いて僕が言いかけたところでリーナの顔が歪み、立ち上がり家を飛び出してしまった。

「さて、どうするかな」

「えっ、パパ？」

「菜々海ならどうする。言葉だけ通じる異国の地で身分を証明するパスポートもお金も無く、ましてや誰かに襲われたりしたら」

「そんな、探さなきゃ！」

菜々海が慌てて立ち上がり玄関に向かって走り出した。

一息つく間もなく菜々海がリーナの手を引いて戻ってきた。

「玄関先でしゃがみ込んで泣いてた」

「だろうね。右も左もわからない世界じゃ怖くて何処にも行けないからね」

「ゴメンね、リーナさん。酷い事を言って」

リーナは俯いたまま小さく首を振っている。

「それじゃ、リーナはここに居てもいいんだね」

「うん、了承」

「リーナ。僕達が言っている意味は判るよね」

「グラツチエ」

「うわあ、イタリア語だ」

「それじゃ、今日は外で食事をしようか」

「了承！」

「リーナ、酷い事をしてゴメンね」

菜々海に聞こえないようにリーナに耳打ちするとハツとしてリーナが僕の顔を見た。

少しだけ痛み分けかな、強引だったけれど菜々海にも判ってもらえたようだった。

だけど、僕の心に痛みがあるかと言うとそれは別の話だ。

居酒屋たこ丸

今夜は久しぶりにパパと外で食事。

でも、パパが連れてきたリーナが一緒なんだ。

とても澄んだ綺麗なグリーンの瞳で一般ピープルじゃないオーラを醸し出してて。

リーナって言う名前しか教えてもらえない不思議な女の子なんだよ。でも、リーナを見るパパの瞳には優しが見え隠れする。

基本パパは誰にでも優しく一言で言えば人畜無害な『良い人』で早苗さん曰く『パシリ属性』なんだって。

でも、その優しさとは少し違うもう一步踏み込んだ優しさと言えば良いかな大切なものを守ると言うか、パパがリーナと今日初めて会ったなんて思えないくらい愛しさが含まれている気がする。

で、パパが連れてきた場所は……

「じゃいませ〜 3名様ですね。3名様、ご案内！」

行きつけのチエーン居酒屋の『たこ丸』だった……

確かにここは安くて早くて美味しいけどさ、ここだけは無いと思っていたのに。

「あれ？ 菜々海ちゃん。おひさ〜」

「ご無沙汰しています」

「ああ、何を拗ねているのかなあ」

「別に」

馴染みで顔見知りの店員さんが笑顔で声を掛けてくれた。

その店員さんがリーナを見て驚いている。

「うわあ、わあわあ。凄い綺麗な子だね」

「そうかなあ」

「ええ、菜々美ちゃんは可愛い系だけどさ。あ、判った。パパと久しぶりの食事なのに綺麗な女の子が一緒だからだ」

「違うもん。おしゃれなレストランが良いのに。なんで『たこ丸』かなあ」

「うわあ、わあわあわわ。店長！ 菜々海ちゃんが苛める！」

店員さんはオーダーも取らないで半べそになって奥に引っ込んでいった。

パパは隣に座っているリーナにとりあえず飲み物の説明をしているみたい。

「チューハイ？」

「ジャパニーズスピリッツ・ハイボール、レモン、ライム……」

ドライが良いかスイートが良いのかリーナの好みを聞いているパパを見ていると恋人同士に見える。

ちよっとだけモヤモヤする。

実は私のママは私が3歳の頃に空に昇ってしまった。

それまで私にはパパが居るって知らなかった。

ママのお葬式でパパと初めて出会ったけれど、今度はパパが行方不明になって1年くらいしてから再び私の前に現れた。

だから幼い頃はパパの事を良く思っていなかった。

でも、今は違う。パパとは10年ちよっとしか一緒に居ないけれどパパが大好きなんだもん。

それにパパに見せてもらった事があるアルバムにはパパとママの写真があまりない。

あまりないと言うか殆どないと言った方が正しいかもしれない。

その理由を聞いた事があるんだけど事情があつて2か月くらいしか一緒に居られなかったからなつて聞いた事がある。

だからパパから事情があつてと聞くと凄く嫌な気持ちになる。

それは私に言えない事だと思うから。

それでも、パパは私の事をとても大事にしてくれる。

「菜々海、乾杯しよう」

「えっ、うん」

パパはとりあえずの生ビールでリーナはカルピス酎ハイ、私の前に

はウーロン茶がジヨツキでおいてあった。

「それじゃ、お疲れ様」

「お疲れ様」

「お疲れ様？」

リーナが不思議な顔をしている。

それともう一つリーナが物珍しそうに店内を見ている、あれだけ日本語が上手なのに居酒屋が珍しいのかな。

「リーナ、一日の疲れを癒しに来るから、ここではお疲れ様なんだよ」

「パパ、リーナって」

「僕も美咲には何処かの令嬢としか聞いていないけれどね。これだけ日本語が上手で日本が初めてと言う事はよっぽど日本が好きなんだろうね。だからここに連れて来てみたんだけど」

「そうか、外国にも居酒屋みたいな場所はあるけれどお嬢様はそんな場所には行かないもんね」

「でしょ、だから今日は原宿や代官山に行ってみただ」

「うわあ、ずるいよ」

「仕方がないでしょ。リーナは何も持っていないんだから」

「そっか。あつ、リーナ。それは駄目」

箸を上手に使い目の前の小鉢にリーナが興味を示し口に運んでいるが遅かった。

リーナは突き出したこわさを口にして鼻を押さえて涙目になっている。

「お鼻が痛い！」

「あはは、ワサビが入っているからね」

「日本語が上手なんだね」

「ありがとう」

赤くなってリーナが俯いている。

あれ？ 凄く良い子みたい。ちょっと誤解していたかもしれない。パパを取られちゃうと思ったんだけど、なんだろうこの感覚はリー

ナならパパにお似合いだなんて思っちゃった。

そんな感情を隠すようにちよつとハイテンションになっちゃった。定番のトリ唐に刺し盛りでしょ、何故か東京なのに沖縄のチャンプル、ぶりかま・じゃがバター明太につくね。

リーナはどれも珍しそうに食べている。

そして楽しそうにしているリーナをパパが優しい目で見守っている。私は気づかないふりをして料理や飲み物を注文する。

何だか私まで嬉しくなってきた。

でもリーナは限界みたい、眠そうに可愛らしい口で欠伸をしている。帰るころにはリーナはすっかり夢の中だった。

パパの背中で可愛らしい寝息を立てている。

「パパ、リーナって素直で良い子だね」

「あのね、リーナは一応菜々海より年上だからね」

「歳の差を不思議と感じないんだよね、お嬢様だからかな」

「そうかもね」

「パパ聞いても良い？ リーナはいつまで日本に居るの？」

「2週間くらいかな。菜々海、リーナの事をよろしくね」

「うん、でもパパが仕事の時はどうするの？」

「一応、有給を取ってあるからね。それに掛った経費は美咲が清算することになっているし、日本の色々な事を教えて楽しんで欲しいからね」

「ええ、それじゃリーナに付つきりなの？」

「そうなるかな、明日はとりあえずお台場の方に行こうかなあって」

「ずるいよ、菜々美だっけ行きたい」

「しょうがないなあ、それじゃお台場は菜々海の試験休みにでもしようか」

「やった！」

えへへ、嬉しいな。

リーナに日本の事をね、それじゃ私も計画を立てなきゃ。

試験はとりあえず明後日までだしね。

何だかワクワクしてくるなあ。

「あれ？ そう言えばリーナは何処で寝るの？」

「今日はこんな状況だからね。パパのベッドで寝かせるよ、朝起きてリーナがパニックになるといけないでしょ」

「それじゃ」

「パパは床に寝るけど」

「へえ、おんなじ部屋で。まあいいか、パパじゃ間違いないなんて起きないもんね」

「うわあ、酷い言い方だな」

「それじゃ、起こるの？」

「パパは酔い潰れている女の子なんて襲いません。ってコラ！」

「えへへ、逃げろ！」

ちよっとだけ明日から楽しい事が始まりそんな気がする。

都内観光

翌日、目を覚ますとベッドで寝ているはずのリーナが僕の布団に潜り込んで眠っていた。

菜々海に起こされる前で良かったと胸を撫で下ろす。

昨日の夜にあんな事を言ったのに、こんな所を菜々海に見られたらただじゃ済まないのは明白だ。

そっとリーナを抱き上げてベッドに寝かせる。

余程疲れていたのだろう、昨夜のお酒の力もあつてぐっすり寝ているようだ。

手早く着替えを済ませて下に降りると朝食の準備がいつもの様になってきている。

まあ、今日からは1人分多いけれど。

「おはよう」

「おはよう、パパ。リーナは？」

「まだ寝ているよ、疲れたんでしょ」

「そっか。今日はどうするの？」

「はとバスにでも乗って都内観光かな。はとバスは外国の人にも人気があるからね」

「そうなんだ」

「菜々海のテストはいつまでなの？」

「明日だよ。心配？」

「菜々海の事はパパが一番良く知っているからね。心配なんてしないよ」

「もう、朝から恥ずかしい事を言わないで」

「それじゃ、朝ごはんを食べたら送っていくから」

「大丈夫だよ、もしリーナが目を覚まして誰も居なかったら心細いでしょ」

「そっか」

菜々海の機嫌も直っているようだ。

それ以上にリーナを気遣ってくれるのが親としては嬉しく思える。優しい子に育ってくれてありがとう。本人には面と向かって恥ずかしくて言えないから心の中で感謝する。

菜々海が学校に行き食器を片づけていると眠そうにしながらリーナが降りてきた。

「おはよー」

「おはよう、リーナ。朝ご飯が出来ているよ」

「うん、グラッチェ」

寝ぼけているのかリーナの食が進まない、朝が弱いのかもかもしれない。半分ほど食べたところでリーナが固まっている。

「ごめんなさい」

「気にしなくていいよ」

「今日は家でゆっくりしようか？」

リーナは小さな女の子みたいに首を横に振った。

「それじゃ、着替えて出かけよう」

「うん」

とりあえず電話予約をして、タクシーで家から職場の前を通り丸の内南口に向かう。

乗合いの観光バスに乗って出発する。

最初に今更ながら職場の目と鼻の先の国会議事堂を見学する。

そして赤坂のホテルに立ち寄りビュッフェ形式の昼食があった。

ここでもリーナの食は細かった。

まあ、朝食を食べてから左程時間が経っていないし体を動かした訳ではないから仕方がないのかもしれない。

それでも築地場外市場では見た事も無い物を目にして大はしゃぎして、店の人もあまりにはしゃぐリーナを見て気をよくして何処に行

つても試食を進めてくれた。

リーナはその度に質問をして場を和ませた。

東武浅草駅から業平橋まで電車で一駅移動して東京スカイツリーを見上げる。

あまりに近代過ぎてリーナの反応は今一だった。

浅草に戻り浅草寺と仲見世を散策する。

参道は雷門を通り仲見世を抜けて宝蔵門を通り本殿へと続く。

雷門は日本を紹介する時の象徴と言っても過言では無いほど外国人にとって人気のスポットなのだろう。

リーナも700キロもある大きな提灯の下で嬉しそうにポーズをとって写真に納まった。

仲見世には興味が無いのかリーナは僕の腕を引っ張って宝蔵門に進ずる。

リーナの質問の嵐に僕はパンフレットや案内板を見ながら答えた。宝蔵門をくぐりお水舎で手洗いし口を漱ぐ。

リーナは僕を見て同じようにしている。

そして大きな香炉から立ち昇る線香の煙を浴びて身を清める。

その後、本堂に向い本尊に手を合わせた。

確か浅草寺の本尊は観世音菩薩だったはずだ。

リーナに質問攻めにあいながら五重塔などを見ていると時間があっという間に過ぎてしまった。

浅草寺を後にして東京タワーに向かう。

スカイツリーと打って変わってリーナの瞳は好奇心で満ちている。到着したとたんにバスから飛び出して東京タワーを見上げていた。展望台に上がり見渡す限りのコンクリートジャングルを見下ろす。

「ヤクモ、富士山は？」

「霞が掛ってて見えないね。空気が澄んだ秋や冬なら見る事が出来るけどね」

「残念……」

今日はほぼ一日中リーナに腕を引つ張られリーナのペースで都内観光をして回った。

朝10時前に出発して東京駅に着いたのが夜7時前だった。

菜々海に連絡すると食事の準備をして待っているとわれタクシード家に戻った。

夕飯は菜々海の手料理で心なしか豪華に見える。

リーナは嬉しそうにしているが箸は進まなかった。

夕食後にリーナが風呂に入っている時に菜々海が心配そうにしていた。

「パパ、美味しくなかったのかなあ」

「そんな事はないよ。もしかしたらリーナは食が細かい子かも知れないからもう少し様子を見てみよう」

「そうだね、日本に来たばかりなんだもんね」

その晩は客間でリーナに寝てもらう様に言ったがリーナが頑として首を縦に振らなかった。

「それじゃ、菜々美と一緒に」

「嫌！」

「駄々をこねないで」

「嫌だ……」

「パパ、任せた」

「菜々海？ もう、はあ」

菜々海はそそくさと自分の部屋に行ってしまった。

仕方なく昨晚と同じようにリーナがベッドで僕が床に寝る事になってしまった。

東都女子・1

翌朝、目を覚ますと既にリーナの姿は部屋にはなかった。着替えを済ませて下に降りると菜々海とリーナは食事を済ませた後だった。

「菜々海、おはよう。リーナは？」

「着・替・え・中」

何故か菜々海の機嫌が僅かに悪い。

心当たりが全くないので『いただきます』と手を合わせて食事をすることにした。

カフェオーレが入ったマグカップを口にする。

リーナを気遣ってここ数日は洋風の朝食になっている。

寝起きに暖かいカフェオーレのカフェインとミルクが頭を起こしていく。

「菜々海、着替えたよ」

「ぶっ！ げふお、げふお」

思わずカフェオーレを噴出してテーブルの上をカフェオーレの海にする所だった。

風呂場の方から現れたリーナは白い半そでのブラウスに青いチエツクのスカートを穿いて胸元には青いリボンが揺れている。

それは菜々海が通っている東都女子高の制服だった。

「ちよつと、小さいかも」

「うわあ、私と同じくらい的身長だから大丈夫だと思ったのに胸の發育までは考えてなかったっていうか、女の子として負けた感が満載なんですけど」

「恥ずかしいよ」

リーナが胸を抱えるようにしている。

確かにきつそうだってそんな事を感じしている場合じゃない。

「菜々海、どう言う事？」

「パパはリーナの制服姿どう思う？」

「どう思っつて凄く可愛いけどって、そういう問題じゃないでしょ」
「萌えちゃう？」

「なんだかコスプレみたいだけどね」

「うわあ、スケベ」

「あのね」

僕が突っ込もうとすると菜々海が一枚の書類を目の前に突き出した。

『入校許可証』頭の上に？マークが大量生産される。

「えへへ、早苗さんに頼んじゃった」

「ええ！」

そこで事態を飲み込めたが…… 良く見るとリーナと僕の名前まで記載されていて冷や汗が溢れだした。

「ぼ、僕も行くの？」

「当然でしょ、誰が案内するの？ 私達はテスト中なんだから」

全身から力が抜けていく。二度と足を踏み込みたくない場所ナンバーワンだった。

女の子の巣窟とも言うべき場所で菜々海の入学式の時に女の子に取り囲まれて逃げ出すのに一苦労した場所だ。

それ以上にあの人がいると思うと……

「行かなくても良いけれど、その場合は早苗さんに報告しちゃうから」

「え？ 何を？ 僕は報告されるような事はしてないよ」

「それじゃなんで一つの布団で二人が寝ていたの？」

「……………」

それで菜々海の機嫌が悪かったんだ。

でもそれは不可抗力で。でも、言い訳は男らしくない。

そんな事を頭の中で駆け巡らせているとリーナが言い訳をした。

「ごめんなさい、夜中に目が覚めて心細くってつい」

「はあ、リーナが潜り込んでいたんだ。まあしょうがないか」

「でしょ、僕は」

「パパ、今日からベッドと一緒に寝てあげなさい」

「へえ？ な、菜々海は何を言っているの。とんでもない事を言っている自覚はあるの？」

「仕方がないでしょ。リーナだってその方が落ち着いて寝られるだろうし」

「僕が寝むれないよ！」

「却下、返事は？」

「了承って待つてよ」

菜々海に力技で押し切られてしまった、女の子に口では敵わないのをつくづく実感する。

流石にリーナに菜々海のブラウスは合わなくて、去年の忘年会で半ば強引に婦人警官のコスプレをさせられた時のブラウスをリーナに渡して着てみるように言った。

そのブラウスは男の僕には小さく笑い者になったけれど、それが無理矢理着せた張本人の狙いだったのだろう。菜々海に変態扱いされるけれど忘年会の席で僕の姿を見てお腹を抱えて笑っていた人になられたくない。

着替えて来たリーナは嬉しそうに体をくると回転させて僕と菜々海に制服姿をみせた。

「リーナ、一言だけ。あんまりはしゃぐとパンツが見えちゃうからね」

「うん、ちよつとだけなら」

「駄目です！」

スカートの裾を持ち上げている。

この令嬢はおちゃめな面も持ち合わせているらしい。

僕もスーツに着替えて3人で学校に向かう。

リーナが居るのでタクシーを呼び、途中のバス停で待っている可奈ちゃんをピックアップする。

「おはようございます、パパさん」

「おはよう、ゴメンね。遅くなつて」

「とんでもないですよ。パパさんと一緒に登校できるのだし。それにしてもリーナさんって綺麗な人ですね」

リーナの事を昨日のうちに菜々海から聞いているのが可奈ちゃんの口ぶりから分かった。

可奈ちゃんに顔をまじまじと見られリーナが恥ずかしがっている。

「でも、こんな女子高生が居たら私はショックだなあ。ただでさえ菜々海は学校でも人気があつて有名なのにツートップになられたら他の皆が霞んじやうよね」

「もう、可奈は変な事をパパに言うのは止めてよ」

「そうかな、僕も菜々海は空に似て綺麗で可愛らしいと思うけどな」

「パパの馬鹿！」

菜々海の頭から湯気が噴出しそうなくらいに顔が真っ赤になっている。

自転車に乗っていたら危ない所だったかもしれない。

20分ほどで東都女子高の正門前に着いた。

僕は助手席に乗っていたけれど降りるのを止めてこのまま帰りたい気分だが後ろの3人が許してくれそうになかった。

都内でも有名な女子高だけあつて校門に門番が立っている。

生徒達が挨拶をしながら大きな門をくぐり抜けていく。

「それじゃ、パパ後からね。リーナの事をよろしくね」

「了承」

「可奈、行こう」

「うん、それじゃパパさん」

「可奈ちゃん、試験がんばってね」

「やったー。パパさんに応援してもらっちゃった、これで怖いものはないぞ！」

可奈ちゃんが飛び跳ねて嬉しそうに菜々海の腕を掴んで校内に消えていった。

「こほん」

門番の咳ばらいが聞こえる。

「ご苦労様です」

許可証を提示すると門番の顔つきが変わって穏やかになり会釈をして手でどうぞと案内してくれた。

登校する女子高生に塗れて校内に入ると菜々海にしてやられた感じが満々だ。

リーナは制服姿だし僕には相変わらず好奇と冷たい視線が突き刺さる。

「あの子って転校生なの？」

「あ、あの男の人って確か……」

中には菜々海の同級生で僕の事を知っている生徒が嬉しそうに手を振ってくれるけれど、僕には引き攣った愛想笑いをして手を振り返すのが精いっぱいだった。

とりあえず来てしまったのだから、手薬煉を引いて待っているであろうあそこに顔を出さない訳にはいかないだろう。

校内の事務所に寄ってから向かう。

都内でも名の知れた女子高だけあって校内は冷房が効いている。

夏場のクーラーの無い男子校には一歩たりとも踏み込みたくないが対極にある女子高にも近寄り難いものがある。

東都女子の校舎は職員室や保健室に会議室や進路指導室などがある管理棟。

通常の授業をする普通教室棟。

化学室や美術室に講義室などがある特別教室棟に分れている。

事務所がある玄関ホールの手奥には保健室があり、反対の一番奥の部屋が校長室になっていた。

リーナは腕を体の後ろに回して嬉しそうに後をついてきた。

「失礼します」

「どうぞ」

校長室のドアをノックをして声を掛けドアを開ける。

「ご無沙汰しております。神谷校長」

「そろそろだと思い、お待ちしていました」

出迎えてくれたのは40代前半にしか見えない女性で髪を綺麗に引きつめ後ろでひとまとめにしている。

縁がワインレッドのメガネから覗く瞳は優しく朗らかだ。

大きな木製の机の横には真紅の校旗が立てかけられている。

綺麗にアイロン掛けされた白いシャツにグレーのスーツが人となりを表している。

机の前にあるソファアームに座る様に促されて会釈してから座るとリ

ーナも畏まって僕の横に腰掛けた。

「直ぐに、お茶でも用意させるわね」

「お構いなく、無理を言つて訪ねたのはこちらです。それに入校許可証の件有難う御座います」

「はあ、どうして八雲君はそんなに堅苦しいのかしら。それでは隣の御嬢さんが緊張してしまうでしょうに」

「すみません」

困った顔を直ぐに緩めて机から立ち上がり僕とリーナの前に座った。

「美咲さんの頼みだもの、無下に断れないじゃない。それに八雲君の大切な娘の菜々海さんの要望じゃなおさらでしょうに」

「有難い限りです」

神谷校長の後ろの壁には歴代の校長の写真が飾られ。

僕等の後ろにある壁には賞状が沢山飾られている、そしてその下の棚には盾が棚の上にはトロフィーが所狭しと並べられていた。

この高校では文化部系の演劇部や吹奏楽部が特に有名で、体育系ならバスケットやバレーなどが活躍しインターハイの常連になっている。

「でも、何故リーナさんが制服姿なのかしら？ 八雲君の趣味なんて事は断じてないわよね」

「菜々海ですよ。僕をからかうのが趣味みたいな娘ですから」

「あらあら、仲が良いのね。で、リーナさんは八雲君の彼女さんかしら？」

「あの、美咲から聞いている筈ですよ、校長。変な煙が立ちますから火をつけて回らないでくださいね」

「いい事。私は断じて放火魔じゃありません」

「なら構いませんが」

リーナは綺麗に背筋を伸ばし、足を斜めにそろえて座っている。

育ちの良さが見て取れ、こんな場にも慣れているのだろう微笑みながら僕と校長の話に耳を傾けていた。

「それから、あの話は考えて頂けたかしら」

「その話は無かった事になったんじゃないですか？」

「あら、そんな話は聞いたことが無いわ。だって本人の口から聞いた訳じゃないもの」

「では改めてお断りさせて頂きます。それに校長は僕が一応公務員だと言う事をご存知ですよ。一般の会社でもそうですが副業は禁じられていますので」

「あら、副業じゃなく公務員なんて辞めてしまって、本業として来てもらえると嬉しいわ。給金も弾むわよ」

「申し訳ございません」

「つれないのね」

とりあえず頭を下げお断りする。

給料面では満足かもしれないけれど女の子だらけのこの場所で働くなんて考えただけで寒気がする。

まあ、これが共学でも即答で断っている。

理由は何かに縛られるなんてまっぴら御免だから、美咲には縛られている気がするがそれは縁と言うもので仕方がない事だと思っている。

その後も他愛のない話しているとチャイムが鳴りだした。

「あらあら、いけないわ。ついお話が楽しくて。それじゃ八雲君、しっかりリーナさんを案内差し上げてね」

「了承いたしました。それでは失礼します」

校長室を後にすると休み時間になっていて普通教室棟からは生徒の笑い声が聞こえてくる。

廊下に出て友達と試験の話でもしているのだろう。

なるべく生徒と絡むことは避けたいので特別教室棟に向かいたいが、向かう為には普通教室棟を通り抜けなければならない。

因みに普通教室棟は下から1年生・2年生・3年生の順になっていて1階にはもちろん菜々海や可奈ちゃんがいる教室がある。

一旦、時計を確認して渡り廊下に向かう。

「リーナ、手を」

「えっ？」

僕が左手を差し出すとリーナが驚いたような顔をして赤くなっている。

それでも僕は構わず手を突き出したままにしていると恥ずかしそうに僕の小指を掴んだ。

短い休み時間が半分を過ぎたところで歩きだし一点突破を狙う。

渡り廊下の半ばを過ぎたところで目敏い生徒が僕達に気付き声を上げている。

構わずに前だけを見て歩き続け普通教室棟に突入する。

「ああ、菜々美のパパだ！」

「きゃー 初々しい」

「だ、誰？ パパさんの彼女お？」

「ええ！ ライバル登場なの？」

気になる言葉が聞こえて来たけど急いで正面に見える渡り廊下に飛び込む。

数人が後を追おうとしたがチャイムが鳴り悔しげに諦めて教室に吸い込まれていく。

管理棟と普通教室棟は3階建だが特別教室棟だけが4階建てになっ

ている。

三階までは普通教室と繋がっているのとおりあえず上に向かう。誤解を招きたくないので取り敢えず。

「リーナ、ゴメンね。もう離していいよ」

「……………」

「ね、もう大丈夫だから」

僕の声が聞こえていないはずなのに返事はなく、俯いて顔を上げようともしない。

仕方なく小指を掴まれたまま階段を上る。

傍から見ると古い恋愛小説の一場面みたいでくすぐつたい。

階段脇の壁には各階に何があるか表示がきちんとされている。

4階に上がると右手奥には図書室が左手には視聴覚室やL・L・教室があり奥には音楽室があるようだ。

思案する間もなく自然に音楽室の方に歩き始めていた。

音楽室を覗くと当然の様に誰も居ない、校長にきちんと許可をもらっている中で中に入ってみる。

菜々海がリーナを学校に案内したのは日本の学校と言う場所を知ってもらいたいからだろう。

そして制服に着替えさせたのは高校生を疑似体験させてあげたかったに違いない。

そんな事を考えているとリーナは音楽室の一角にあるグランドピアノに目を奪われていた。

「リーナ、弾いてみたら」

「ええ、ベーゼンドルファーのグランドピアノだよ」

「それって凄いの？」

「あのね、世界三大ピアノの一つでベビシユタイン・スタインウェイと並んで有名なピアノなの。私の憧れだもん」

「それじゃ、何か弾いて聴かせてよ。ここは防音がきちんとされているから外には音はもれないし、弾いてみたいでしょ」

「うん」

リーナがピアノの前に座り鍵盤蓋を開け鍵盤を爪弾くと澄んだ音色が響き渡った。

「やっぱり凄いなあ」

「ふふふ、そう」

「ヤクモは何が可笑しいの？」

「いや、リーナと話していると日本のお嬢様と話しているみたいだ
なつて。凄く日本語がうまいしね」

「あのね、私が幼い頃に一人のお待さんに出会ったの。凄く優しく
つて沈み込んでいた私を癒してくれたの。そんなお待さんが大好き
で日本が好きになったの。もう一度、お待さんと日本語でお喋りし
たくつて」

「そうだったんだ。また出会えるといいね」

「うん」

すると聞き覚えのある曲をリーナが弾きはじめた、僕は近くにあつた椅子を持ち出してピアノから少し離れたところに腰を掛けた。

「エリーゼのためにだね。日本ではおなじみの曲だ、確かベートーベンだったかな」

「うん」

「それじゃ、ベートーベンの曲で初期の代表作の3大ピアノソナタ
の中でも私の一番お気に入りをお聴かせしてあげる」
その曲は幻想的で聴き入ってしまった。

リーナの顔つきは真剣そのもので集中しているのが良く判る。
不思議な女の子だ。

令嬢としての風格を持ちながら少女の様な時もあり、そうかと思う
と大人びた行動を試みたりする。

「ヤクモ、聴いていた？」

「もちろん聞いていたよ。ルツェルン湖の月光に揺らぐ小舟の様に
だよ」

「なんだ、知っていたの」

「スイスのルツェン湖は綺麗で本当に幻想的な所だからね、旅先で聞いたから印象に残っているんだよ」

「や、ヤクモはスイスに行った事があるの？」

「スイスと言うか世界中を歩き回っていたからね」

「そうなんだ、この曲はベートーベンが31歳の時に弟子であり恋人だった14歳も年下のジュリエッタに贈られた曲なんだよ。何だか素敵だよ」

「そうだね」

このまま話していたら話がおかしな方に進んで行ってしまう気がする。

リーナも同じ事を思ったのが少しだけにはかんで別の曲を奏ではじめた。

クラシックを聴くなんて言う高尚な趣味を僕は持ち合わせていない。

でも、リーナが弾く曲を聴いていると眠くもならないどころか飽きない。

そしてそれはリーナを見ていて気付いた。

時に激しく時には爽やかな風のように。

軽やかに力強く。

幸せそうにピアノを弾いているリーナを見ているから飽きないのだと。

僕の視線に気づいたリーナの頬がピンク色に染まり恥ずかしそうにしている。

気づいてしまった気持ちを隠すように僕は拍手をして誤魔化した。するとポケットのスマートフォンが振動している。

取り出すと菜々海からの着信だった。

「もしもし」

「パパ、何処に居るの？」

「音楽室だよ」

「それじゃ、美術室に大至急来てね」

「な……」

そこで一方的に切れた。

「ヤクモ、どうしたの？」

「菜々海が美術室に来て。行こう」

「うん」

リーナの演奏とリーナに見蕩れてしまっていてチャイムが鳴った事に気付かなかったようだ。

それくらいリーナの演奏は素晴らしかった。

美術室は一つ下の3階の音楽室と反対側の突き当りにあったはずだ。頭の中で案内板を思い浮かべながら歩き出す。

東都女子・2

美術室のドアを開けるとそこには菜々海と可奈ちゃんが待ち受けていた。

「もう、遅いよ。授業が始まっちゃうじゃん」

「何の用なの？」

「はい、これ」

大判の木炭紙に鉛筆と練消しを渡された。

リーナも不思議そうな顔をしながら可奈ちゃんから受け取っている。嫌な予感がするが逃げ出すことも不可能だし逃げ出す口実が見つからない。

「リーナ、美術の授業です。何でもいいから好きなものをデッサンして提出する事」

「はい」

「ほら、パパも」

「とりあえず、了承。何でもいいから描けばいいんですよ」

「まあね。それと校長先生には会ったの？」

「もちろんだよ、会いに行かないと何をされるか判らないじゃない」

「そうだね。リーナ、ちょっと良い？」

菜々海がリーナに何か耳打ちをしている。

リーナの視線が泳ぎ戸惑い気味に僕から視線を外した。

美術室は独特の匂いがする。

絵の具の匂いと言えば良いのか、それとも木の匂いとも言うべきか。防音設備がきちんとしている音楽室とは対照的に教室の中は昔の教室とも言えはいいのか、木材が多く使われていて落ち着いた空間になっている。

そんな空間に石膏像やイーゼルが置かれている。

何をデッサンしようか考える。出来れば静物で簡単なものが良い。

果物なんて最高なのだけれど今はそんな物は望めない、ならばグラ

スやワインのボトルか。

「ヤクモを描きたい」

「……えっ？」

リーナのあまりにもストレートな物言いに驚いてしまう。

ここはとりあえず流されておくべき所なのだろう。

クラスメイト同士で相手の顔をデッサンしたり粘土で造形したりする、美術の授業で良くあるあれだ。

リーナが描きたいと言うなら仕方がない事で、正面を向くとイーゼルと木炭紙で相手の顔が見えないので90度の角度で座りデッサンを始める。

「ヤクモ、メガネを取ったら見えない？」

「いや、大丈夫だけど」

あまり普段は外さないメガネをリーナの要望で外して髪の毛を掻き上げる。

リーナの表情が緩み首を少し傾げてどうデッサンするかを考えているようだった。

描き始めると直ぐにリーナは集中し始め視線が僕と木炭紙を行き交っている。

僕も鉛筆で木炭紙に線を走らせる。

子どもの頃は好きで良く絵を描いていた。

そんな事を思いだしているといつの間にか僕も集中していたようだ。美術室を静寂が支配した。

因みに僕はリーナをデッサンしている、静物でも構わないと思ったが流れるにこの方が良いと思ったから。

リーナと僕は特別教室棟の屋上に居た。

東都女子高は都内では珍しく緑に囲まれている、それは赤坂離宮が近いからかもしれない。

日差しは強いけど吹き抜ける風が心地良い。

チャイムが鳴ると直ぐに美術室に菜々海が可奈ちゃんの手を引いて、

息を切らしながら飛び込んできてタイムアップになってしまった。
1時間と言う時間の縛りがあったので納得がいくまでには至らない
かもしれないけれどそれなりに描けていたと思う。

菜々海と可奈ちゃんは掃除当番らしく一緒に帰りたいたいから待っていてねと念を押され時間つぶしに屋上に来てみた。

「ヤクモは校長先生とも仲が良いの？」

「仲が良いはちょっと違うかな。美咲と空は校長の教え子だからね」
「ソラ？」

「ああ、空は菜々海の母親の名前だよ。つまり僕の妻だった人」
妻だった人なんて菜々海に聞かれたらもの凄い剣幕で怒られるだろう。

でも、それが僕の正直な所だった。

空と一緒に過ごした時間はほんの僅かで一緒に暮らした時間は皆無
だったのだから。

「そっか、ヤクモの奥さんの名前なんだ」

「菜々海に聞いたかもしれないけれど菜々海が幼い頃に死んでしま
ったからね」

「ごめんなさい」

「リーナが謝る事じゃないよ。知らなかったんだね」

「うん」

「気にしなくていいよ。僕は菜々海が傍に居てくれるから幸せだし」

「ソラってc i e l oの事？」

「そっだよ」

「だから、ヤクモは時々空を見ているの？」

「空と言うより雲かな、僕の名前は八重の雲つまり重なり合う雲と
言う意味があるんだよ。それに僕は自由気ままに流れる雲が好き
なんだ」

リーナには気づかれていたみたいだ。

僕が時々無意識に空を見上げているのを、昔は意識して見上げてい
たけれど今は癖の様になってしまっている。

「ヤクモ、八雲！」

急にリーナが僕の名前を大きな声で叫んだ。

カタカナから漢字に変換された気がする、それより気になるのは何故だかより一層親しみが籠っている様な気がした。

「八雲は絵がうまいんだね」

「そうかな、子どもの頃は絵を描くのが好きだったけど」

「どうして絵描きにならなかったの？」

「絵描きになれるほど上手いかなんて自分自身じゃ判らないけど僕の家は余計な事は一切しちやいけない家だったんだ」

「八雲の家？」

「リーナは僕が裏社会の人間だって知っているよね」

「う、うん」

「実は僕の家は代々武道を伝える家でね。僕も幼い頃から武道を叩き込まれたんだ。武道以外は邪道で武道がすべてだった。今じゃ裏でしか使わないけれどね」

子どもの頃の記憶がよみがえり苦笑いしかできない。

「八雲は優しい、だからそんな顔はしないで」

「ありがとう、この事は菜々海には話してないから内緒にしておほしい。それと僕が裏社会の人間だって言う事もお願いできるかな」

「うん、誰にも言わない。それじゃ指切り」

「指切りか、そんな事もリーナは知っているんだね」

リーナと小指を絡めて指切りをする、頬を撫でる風がくすぐつたい押し殺していた物が顔を出しそうになる。

向いの校舎から菜々海の声が聞こえて慌ててリーナと距離を取った。

菜々海と可奈ちゃんのクラスに行くと他の生徒は殆ど居なかった。

試験が終わり解放されてあつという間に下校したらしい。

リーナは窓際の菜々海の席に座って教室を眺めている。

プロジェクトやモニターまであって最近の学校の設備は凄いなと思

つてしまう。

「パパさん、これからの予定は？」

「別に決めてないけど、皆でご飯でも食べに行こうか」

「やった！」

可奈ちゃんに聞かれ答えると嬉しそうに飛び跳ねている。

何が食べたいか聞こうとするより早く菜々海が口火を切った。

「『陣』に行こう」

「でもあそこは予約が」

「大丈夫だから行くよ、ほらリーナも」

「えっ、うん」

「菜々海、もしかして」

「問答無用、お腹が空いてるの」

『陣』は創作居酒屋で昼はランチ営業をしている昼夜共かなり人気のお店だ。

恐らく菜々海が前もって予約を入れておいたのだろう。

判っているからこそ、そこは突っ込まないでおこう。

菜々海と可奈ちゃんに腕を引っ張られリーナに背中を押されるようにして学校を後にした。

お店は大通りから少し外れた路地であり目立たない場所にある。

それでも連日予約で一杯の日の方が多い。

暖簾をくぐり引き戸を開けると威勢のいい声が聞こえる。

「らっしやい。あ、八雲さん」

「よ、ご無沙汰」

「ああ、八雲さんに菜々海ちゃん。予約有難うね」

真っ黒に日焼けして藍染の作務衣を着た陣と小柄な奈央ちゃんが嬉しそうにしている。

『陣』は大将の名前で今の奥さんと付き合い始めた頃に美味に依頼を受けて問題を解決した事がある。

なるべく問題解決後は僕なんかに係わらない方が良いのに何度とな

く店に招待され付き合いが始まってしまった。

元依頼人は数知れないが何故だか表の『皇 八雲』と何も変わらず付き合い合ってくれる人は少なくない。

まあ時々相談に乗ってもらえると言う事があるからかもしれない。

「うわあ、今日は高校生に囲まれて。この幸せ者」

「菜々海の友達の可奈ちゃんとホームステイしているリーナだよ」

「しかし、八雲さんの周りは綺麗どころばかりだね」

「そうかなあ」

確かに綺麗な人は多いかもしれない。

が、灰汁と言つかクセが強すぎると思うのは僕だけだろうか。

奈央ちゃんと陣に一頻り弄られて案内されたテーブルに座る。

「菜々海、ここは何が美味しいの」

「あのね、おうどんだよ。この時期は冷やしに限るけどね」

菜々海が可奈ちゃんに教えている通りこのランチはうどんがお勧めで、僕なんかは暑い夏でも温かいうどんを食べる事も多い。

リーナがあまり食べない事を考えて菜々海がチョイスしたのだろう。

「今日はどうする」

「冷やしでさっぱり系！ おまかせで」

「あいよ」

菜々海が取り仕切っているとと言う事は予約をした時に話をしてあるのだろう。

カウンターの中では陣がうどんを茹ではじめた。

この店はお客の注文を受けてから麺を湯がきはじめるので時間がかかる。

時間がかかっても食べたいから予約が途切れる事が無いのだろう。

奥さんの奈央ちゃんは忙しそうに他のお客さんの給仕をしていた。

店内は古き日本家屋を模したような黒を基調にした柱や梁があり壁は珪藻土の塗り壁になっていて、それほど広くない店内だがとても落ち着いた雰囲気醸し出している。

「そう言えば、リーナも校長に会ったんだよね」

「うん、若々しくて素敵な女の人だったよ」

「うふふ、やっぱりね」

「どうしたの」

菜々海が笑いだしリーナが不思議な顔をしている。

「リーナ。僕が教えたでしょ。美咲と空は教え子だったって」

「あ、ええ！」

リーナが愕然としている。

確かに40代くらいにしか見えないけれど美咲は空の同級生で36歳、その先生と言う事になるとどう考えても40代前半では計算が合わなくなる。

まあ40代と言っても49までは一応40代だけど。

「東都女子の七不思議の一つなんだよ」

「校長先生って何歳なの？」

「リーナ。誰も知らないから七不思議なんだよ。それに早苗さんが教わっていた時にはもう既に東都の名物ベテラン教師だったって言うってたもん」

「そう言えば東都女子の七不思議には美術室でどうのって言うのがあつたよね、菜々美」

「うわあ。パパ知ってたの？」

「まあね」

「うわあ、知っていて策に嵌まった振りをしてたんだ」

菜々海が美術室で耳打ちしたのはその七不思議の話だろう。

確かに女子高だけあつてそんな七不思議があつても不思議はないが、女子高だけにそんな七不思議がある方が不思議なのかもしれない。

何故って女子高に居る男と言えば教師しかいないのだから。

それこそ禁断の愛だ。

「でも、パパがあんなに絵が上手だったなんて知らなかった」

「ええ、菜々美にも知らないパパさんの事があるんだね。リーナさんは何だか芸術系は得意そうだからね。あんな素敵な絵を描けるんなら今度私も描いてもらおうかな」

「そうだなあ、知らない事の方が多いかも。ママとの事も教えてくれないし」

「でも、それが普通じゃない。私だってパパとママが若かった時の事なんて知らないもん」

「そうなんだ」

顔では微笑んでいるけどちょっとドキツとした。

菜々海も空の事をやはり知りたいのだろうか、そろそろ話すべきことかもしれないけれどまだ時期尚早だと感じている。

そんな事を考えていると奈央ちゃんがおうどんを運んできてくれた。

「お待たせしました」

「わあ、美味しそう」

「本当だ」

「八雲……」

リーナが僕を見て説明を待っている。

見た目はサラダが乗っている冷やしうどんと言えば良いだろうか。アスパラに胡瓜やオニオンスライスにコーンやレタスが盛りされていて、そしてメインは湯向きしてキンキンに冷やした完熟トマトが主役を務めていて可愛らしく大葉の千切りが乗っている。

うどんはさつぱり系と言う事で少し細めの様だ。

付け合せに温玉と自家製の豆腐が付いている。

口で説明するより食べてみた方が早いかもしれない。

トマトは隠し包丁が入れられていて見た目は全く切れていないけれど簡単に割る事が出来る。

出汁にもトマトの甘みが利いていてさつぱりとしている。

「リーナ。トマトの冷製パスタみたいな感じだよ」

僕の言葉にリーナがうどんを初めて口にして綺麗なグリーンの瞳が一段と大きくなった。

「美味しい！」

「良かった」

菜々海も一抹の不安を抱えていたけれど、無用の心配だったようだ。

それに僕には思い当たる節があるけどそれを今は口にしなかった。
お腹も満たされ陣と奈央ちゃんに弄られながら一休みして街に繰り
出す。

アミューズメント

街に出ると菜々海と可奈ちゃんの独壇場だった。

一言で言えば女子高生の道草フルコースと言った所だろうか。

ばつが悪そうにしていたけれど僕が容認すると普段散歩に連れて行ってもらえない犬の首輪が外れた様に遊び回っている。

ウィンドーショッピングをしたりファンシーショップで買い物したり。

プリクラも交代で撮って何枚かは皆で撮った。

「うわぁ、パパとリーナはお似合いだ」

「あのね、親をからかわないの」

昔はゲーセンと呼んでいたアミューズメント施設に足を運ぶ。

店内に入ると音の洪水で呼び名が変わっただけで今も昔も中身は一緒の様だ。

「パパさん、奥に行きましょう」

「ちょっと待って電話みたいだ」

入り口近くには人目を引く UFO キャッチャーなどがありその奥には対戦ゲームやパンチングマシンなどが見える。

先に菜々海や可奈ちゃんに任せてリーナを連れて中に入って待っていてもらう。

僕は携帯を取り出して表に出る。

職場の橘さんの様だ。

別件とは言え情報管理課を離れている事を申し訳なく思うが、花さんはそんな僕にでもきちんと仕事をしているのだからそっちに専念しなさいと言ってくれる。

簡単な用事を済ませアミューズメント施設に入ると運悪くお決まりのイベントが起きている。

まあ、こういう施設だから仕方がない事なのかもしれない。

男の子は3人組で近くの男子校の生徒の様だ。

東都女子の制服を見て声を掛けて来たのだろう。

声を掛けてきた男の子を見て菜々海が鬱陶しそうな顔をしている。

可奈ちゃんは菜々海の横で『またか』と言う感じのため息交じりなのだろう。

リーナは菜々海と可奈ちゃんの後ろに隠れるようにしていた。

親の僕が出ていけば済む事なのだろうけれど僕の出る幕はなさそう
だ、遠巻きに様子をつかがう事にする。

「ねえねえ、僕らと遊ばない」

「待ち合わせしているから」

「誰と？」

「パパだよ、パ・パ」

「パパって本当のパパ？」

リーダー格の男が地雷を踏んだ。

踏んだと言うか踏まされたが正しいかもしれない。

この場面で『父親』と言わずに『パパ』なんて発言すれば軟派な男子高校生ならほとんどが同じように冗談交じりで返すはずだ。

現に菜々海は僕が見ている事にとくに気づいている。

こちらを見ない振りをしているだけで、瞳の動きを見れば容易にわかる。

多分、可奈ちゃんは薄々、リーナは全くその事に気づいてさえいない。
い。

「それじゃ、私にこれで勝ったら一緒に遊んであげる」

「マジで？」

菜々海が指をさしたのは的を思いっきり殴り飛ばすとストレスを発散できておまけにパンチ力を数値にしてくれる例のあれだ。

男の子は余程自信があるのかにやけている。

女の子に勝てない訳がないと踏んでいるようだ。

「そっちから先で良いよ。勝ち逃げするのは嫌だし。それと裏ワザ
なんて使ったら学校中に言い触らしてやるから」

蟻が蟻地獄に落ちるように型に嵌められていく。

男の子はブライドをくすぐられ逃げ道が無くなった事に気づかない。意気揚々とコインを投入して対戦モードを選択している。

グローブをつけて足を肩幅に開き少しだけ半身になっている。パンチングパッドが起き上がり渾身のパンチを打ち付ける。

連れの男の子が盛り上がりつついるのを菜々海は冷ややかに見ている。3発叩き込んでアベレージ250ちよいと言った所だろうか高校生にしてはハイレベルかもしれない。

菜々海がグローブを嵌めて左手を少しだけ前に出して半身の姿勢を取る。

左足を軸に右足が捻られるのを合図に腰が回転して全身で拳を打ち出す。

その動きはまるで風が巻き上がる様になめらかで無駄な動きが一切無い。

パッドが撃ち抜かれ炸裂音がすると周りの視線が一気に集まり、先攻の男の子があり得ないものを見たかのように固まっている。

「まだやる？」

菜々海の最後の一言で戦意はおろかブライドまでごっそり剥ぎ取られてしまったようだ。

「流石、菜々美。向かうところ敵なしだね」

「可奈、当たり前じゃん。パパの一番弟子だよ」

男の子達はすくすくこと引き下がるしかない。

周りから『東女の皇だ』『あんなの初めて見た』なんて声が聞こえてくる。

菜々海の身体能力の高さを目にした事があるはずなのにリーナは目を真ん丸にして驚いている。

小さい頃から菜々海は体を動かすことが好きで空手を習っている。関東大会ではいつも上位に名を連ねているので、知る人ぞ知ると言う感じなのだろう。

「お待たせ。あれ、どうしたの？」

「何でパパは助けしてくれないかなあ」

「ゴメンゴメン。菜々海の事だから大丈夫だって信じているからね。それに本当に危険なら体を張ってだって守るけどね」

「もう、罰としてパパもやってみたら」

「無理だよ。手首なんか痛めたら仕事できなくなるからね」

「本当に私の事を守れるの？」

「前向きに対処いたします」

「馬鹿！」

菜々海が照れと苛立ちを込めて放った残りの2発のパンチは怖いから言わないでおこう。

とりあえず右肩上がりだと言う事で。

「パパさん、それじゃあれをやって」

「どれ？ ガンシューティングか。得意だけど僕のは全然面白くないと思うけどな」

「良いから、ね」

可奈ちゃんが指差したのは模擬銃でゾンビやテロリストを撃つと言う簡単なゲームだ。

確か弾切れになったら銃を下してリロードすればよかったと記憶している。

コインを入れ、銃を持ってスタートする。

なかなか現実味のある音がする。

現れるゾンビをただ撃ち続ける。

そう言えば美咲にアルバイトと称してこの手のゲームの監修を頼まれた事があるのを思い出した。

ステージをクリアしてもただ出てくる相手を倒し続けるだけで見ている方は退屈でやっている僕自身も飽きてきた。

「パパ、つまんない」

「言ったでしょ、面白くないって」

「本当に盛り上がらないね、菜々美」

「パパ、他のにしよう」

「了承」

近くで見ていた男の子に銃を渡すと嬉しそうに僕の代わりに続きをやり始めた。

菜々海に促されて向かった先には『ダンレボ』なんて呼ばれているダンス系のゲーム機だった。

前後左右にある足元のプレートを画面に合わせながらステップする。最初は菜々海が見ててと言いなから始めた。

やり慣れているのかステップがとても上手い。

次に菜々海と可奈ちゃんが2人でプレーする。

感心してしまう。

息がぴつたりでギャラリーから歓声が上がっている。

その後も2人はステージをクリアーして踊り続けた。

「リーナもやってみれば」

「ええ、出来ないよ」

「簡単な曲からやれば大丈夫だよ」

「リーナは音感やリズム感が良いから出来ると思うよ」

「八雲が言うのならやってみようかな」

「それじゃ、レッツトライ！」

菜々海と可奈ちゃんに教えてもらいながらリーナがステップを刻む。あれだけピアノが上手ければリズム感はかなり良い方だと思う。

直ぐに上達していくのが楽しいのかゲームをしたのが初めてなのか嬉しそうにステップを踏んでいる。

「凄いね、リーナって」

「ピアノを聴かせてもらったけれどとても上手だったからね」

「そうなんだ。リーナ、楽しそうだもんね」

可奈ちゃんと話していたリーナが声を掛けてきた。

「八雲、一緒にやろう」

「え、僕は初心者だよ」

「大丈夫、八雲なら」

「ほら、パパはリーナのお願いを無下に断るの？」

「はあくお手柔らかに」

「やったー。パパさんのダンスが見れる」

嬉しそうに可奈ちゃんが飛び跳ねて喜んでる。

選曲と難易度などの事は良く判らないので菜々海と可奈ちゃんに任せろ。

最初は入門曲と言った感じでリーナが初めにやっていたのもこの曲だった。

だんだんレベルが上がっていくと額に汗がにじみだす。

集中し始めると周りが気にならなくなり更に集中するとリーナの動きまで感じられるようになる。

一息つく可奈ちゃんが冷たい飲み物を買ってきてくれた。

「ありがとっ」

「サンキュー」

「でも、パパさんもリーナさんも凄いね。初めてとは思えないよ」

「そうかな、でも楽しいね」

「うん、なんだか集中してくると八雲の動きが感じられて楽しかった」

「ええ、それ本当なの？」

「う、うん」

「リーナ、もしかして一度踊った曲は画面を見なくても踊れる？」

「うん、大丈夫だと思う」

「パパは？」

「まあ、ミスはするだろうけれどなんとなくね」

「それじゃ、最後に一曲だけ踊ってくれろ？」

リーナを見るとリーナも僕の顔を見ていて視線が交錯してなんだか照れくさい。

「了承」「うん」

返事まで被ってしまった。

順番待ちをしていたカップルが踊り終わって菜々海が直ぐにコインを入れて設定している。

リーナを先にながらせて僕があがる。

頭の中でイメージをすると曲が始まった。

難易度が少し高めの最後に踊った曲だった。

ステップを踏み始めると曲だけしか聴こえなくなる。

リーナを見ると僕にシンクロしたみたいにリーナも僕を見ている。

曲は大体一分半くらいだろうか。

最後のステップを踏むと自然と視線がリーナに向いてリーナが嬉しそうに抱きついてきた。

「リーナ？」

「楽しいね、八雲」

「そうだね」

「リーナ、パパ！」

菜々海に呼ばれて振り向くとフラッシュが瞬きリーナが抱きついたままで写真を撮られてしまった。

いつの間にかギャラリーが増えていて驚いてしまう。

リーナの手を取って菜々海と可奈ちゃんに合流する。

「パパさんてやっぱり素敵だな」

「可奈ちゃん、そんなにおだても何も出ないよ」

「だってあんなに絵が上手くてゲームもこなせて何より優しいもん。」

それにレディーファーストが身についているジェントルマンだし」

「買い被りすぎだよ」

菜々海と可奈ちゃんに美術室で出された課題のデッサンは突然現れた校長に奪取されてしまった。

素晴らしいデッサン画だからちゃんと額に入れて装丁して届けるからなんて言われてしまった。

菜々海にはからかわれるし散々だった。

久しぶりに遊んだ気がするしこんなに遊んだのは初めてかもしれない。

菜々海が子ども頃はよく遊びに行ったけど最近は一緒に遊ぶことが減っている。

それは親離れしていると言う事で良い事なのだと思うし僕もそれを望んでいる。

日が傾きはじめ今日の閉めに都庁の展望台に来ていた。

何よりもここは無料なのが嬉しい。

「リーナはお嬢様って感じで凄いな。ピアノが弾けて絵が上手くて、殆ど外出する事が無いから学校に行けて皆と遊べて、今日はすごく楽しかった。ありがとう」

「お礼なんていらぬよ。友達でしょ」

「うん！」

リーナが今までにない笑顔で答えた。

「ああ、富士山が見える！」

可奈ちゃんの一言で西側の窓に釘付けになる。

葛飾北斎の富嶽三十六景の赤富士は朝日で赤く染まる富士の絵だけれどそんな絵を彷彿とさせる夕日に照らされた富士山を見る事が出来た。

もう少しすれば綺麗な都内の夜景も見ることができけれど高校生の菜々海と可奈ちゃんが居るので早々に退散することにする。

その夜は菜々海の命令通りリーナの横で寝る事になってしまった。

背中合わせも不自然で恋人同士の様に向き合う事も出来ずに仰向けになって天井をみて意識しないようにする。

リーナも似たような気持ちなのだろう。

「八雲。今日はグラッチェ」

「僕は何もしてないよ、菜々海に付き合わされただけだからね」

「聞いても良い？ 校長先生の言っていた話って何？」

「ああ、僕を外国語の講師として迎え入れたらって話だよ」

「どうして断ったの？ イタリア語だってあんなに上手に喋れるの

に」

「僕には今の仕事に向いていると思うし、何より女の子が沢山いる場所は苦手なんだよ」

「でも、八雲は優しいし」

「そうかな？ 女の子と付き合った記憶なんて殆どないからね」

「そう。それと菜々海には裏の仕事の事をいつまで黙っておくつもりなの？」

「そうだね。判ってしまうのは時間の問題だと思うけれど出来ればいつまでも知られたくはないかな。もし判ってしまった時にどうするかは菜々海次第だね」

「菜々海は知っても八雲を嫌いにならないと思うけどな」

「ありがとう。今日は疲れたでしょ、お休みしよう」

「うん」

色々な事を考えずに今を大切にしたい、それが答えに結びつくのだと信じていたい。

ミッション・モーニング

パパとリーナと可奈の4人で遊びまわった翌朝。

私はキッチンのテーブルの上にある一枚の紙に頭を悩ませていた。今日から試験休みで気分は上々で目覚めたのにいきなり夢心地を一気に醒ましてくれる。

どうするとこんな事が出来るのだろう。

我が家の冷蔵庫は一番上が両開きの冷蔵室で真ん中が冷凍室、一番下が野菜室になっている。

そして眠気覚ましに冷たい麦茶でもと思い開けようとすると思開きの扉の真ん中に鍵が取り付けられていた。

それも南京錠なんてちゃんな物ではなくステンレス製の鍵で……何故？

仕方なくテーブルを見るとそこには一枚の紙とノートパソコンが置かれていた。

で、読めない。

私は英語ならば読み書きできるけどどう見ても英語じゃなかった。

「もう、パパの馬鹿」

「おはよう、菜々美。どうしたの、そんな怖い顔して」

「パパにヤラレタ」

リーナに紙を見せるとリーナが不思議そうな顔をしながら即答した。

「何？ ドイツ語だ。指令？」

「ええ？ リーナ読めるの？」

「うん、イタリア語と英語それにドイツ語なら分かるよ」

「それだ」

パパにしてやられるのは悔しい。

でもリーナが居ればクリアーできるかもしれない。

まず、リーナに大まかに読んでもらおうと料理のレシピみたいだと教

えてくれた。

朝刊の折り込みチラシの裏に和訳を書いていく。

「野菜室の材料でサラダを仕上げる。苦瓜・島人参・ハンダマ？アダン？ 四角豆……」

「何の事だろうね」

「よしとりあえず野菜室だ」

野菜室から材料を取り出すと見た事のない野菜が沢山入っている。

苦瓜は東京でもメジャーな沖縄野菜の代表格のゴーヤの事だ。

指令所通りに薄くスライスしてさつと湯通しして冷水にさらす。

多分こうする事でゴーヤ独特の苦みを取るんだと思う。

ハンダマやアダンはパソコンで調べると直ぐに判った。

ハンダマは水前寺菜と言う裏が紫の葉野菜で夏の健康野菜らしい。

アダンは白い繊維質の野菜でこの部分は新芽らしい、それに沖縄県でも石垣島で料理に使う習慣があると記載されている。

灰汁を抜かないと使えないとあるけれど既にあく抜きをしてある状態だと判断できる。

四角豆は四隅にフリルが付いている様な不思議な形の豆だった。

指令通りに下ごしらえをしていくアダンと四角豆を湯がき冷水に取り。

ハンダマも軽く湯通しする。

紅イモは皮をむいてカットしてからレンジでチンして冷ます。

リーナも楽しそうに料理を手伝ってくれる。

流石に包丁を触らせるのは怖いので私の手伝いと言う感じになっている。

「料理って楽しいね」

「リーナはやったことが無いの」

「うん、お菓子は作った事があるけど料理はしたことが無いよ」

やっぱりご令嬢は違う。そんな事を思うけれど友達として口には決して出さない。

ドレッシングは沖縄のシークワサーとオリーブオイルを使ったレ

シビになっている。

シークワサーは沖縄特産の柑橘類でこれは私でも知っていた。一時の沖縄ブームや健康ブームに乗ってテレビで何度となく取り上げられていたから。

出来上がったのはチシャ菜などを使った沖縄野菜のサラダだった。

「あれ？ リーナ、他には何か書いてある？」

「ええつと。あった。先入観は禁物ってどういう意味だろう」

「冷蔵庫に鍵をつけられて開けられないんだよね」

「判った！」

「へえ、リーナ？」

リーナが立ち上がり冷蔵庫を難なく開けている。

鍵はブラフだったみたいだ。

私は鍵が付いているだけで開けられないと思いきや開けようとはしなかった。

ヒントがあつたとは言えリーナは感が鋭いのかもしれない。

パパに対する怒りが込み上げてくる。

不思議な事にリーナは冷蔵庫を見つめたまま動かない。

「どうしたの？」

「菜々海、凄いよ！」

リーナに言われて冷蔵庫を覗くとそこには沢山のサンドウィッチが入っていた。

「うわあ、アランチャ・ロッソまである」

「何なのそれ」

「イタリアの赤いオレンジジュースだよ。凄く美味しいよ。飲んで良いのかなあ」

「我が家の冷蔵庫にあるものは全て自由に飲んで食べていい決まりになっているんだよ、これで朝ご飯にしようか」

「うん！」

アランチャ・ロッソは日本で言うブラッドオレンジの事で濃縮還元

のジュースじゃなくて凄くフレッシュで美味しかった。

サンドウィッチはいわゆるフルーツサンドと言われている色々なフルーツとクリームがサンドされている。

パイナップル・マンゴー・キウイフルーツ……

「うわあ、パイイヤにクリームチーズが絶妙だね」

「このバナナはキャラメルクリームみたい」

「これは何かな？ オレンジ色のつぶつぶが入ってる……パッションフルーツだ」

リーナが口にしたのと同じものを食べてみる。

クリームの中にオレンジ色のゼリーみたいなのが入っててそれを食べると口の中にパッションフルーツの味が広がった。

「フレッシュオレンジとクリームも美味しいよ」

オレンジも捨てがたいけれどパイナップルとマンゴーが特に美味しかった。

「おはよう」

「パパ？」

「おはようでしょ、菜々美」

「八雲、おはよー」

「おはよう。リーナ」

パパが眠そうな目を擦りながら起きてきた。

食事をしながらパパに詰め寄るとリーナが夏バテ気味で食欲が無さそうだったから知り合いに頼んでおいたって言っていた。

パパの知り合いってどんな人なんだろう。

そしてパイナップルは沖縄の石垣島産で完熟のパイナップルだと教えてくれた。

マンゴーは高級品だけどこれも石垣島産で規格外の物を使っているからふんだんにマンゴーが使えるって話してくれた。

「まさか、パパが作ったの？」

「僕は頼んだだけだよ。食材は準備するから作ってくれて。アイ

デアは出したけどね」

「八雲は料理できないの？」

「出来るけれど、菜々美の方が上手だし美味しいからね」

「八雲の料理も食べてみたい」

「機会があればね」

「ところでパパ。ミッションをクリアした報酬は何？」

「サンドウィッチじゃご不満かな？」

「まあ、冷蔵庫を開ける事が出来たのはリーナのお手柄だけだよ」

パパが嬉しそうに目を細めながらテーブルの上に何かを置いた。

私とリーナはそれに目を奪われた。

幅が三センチくらいある透明なバングルみたいだけど、透明のプラスチックの中にはシンプルで文字盤が無地の時計が埋め込まれている。

「aquaと言う時計だよ。発売前の新作の時計だけど無理を言うて譲ってもらったんだ」

「アクア？」

「水って言うイタリア語だよ、菜々美」

「本当に水みたいに綺麗だね」

「リーナはクリアーで菜々海はスモークが好みかな？」

「「うん」」

「さあ、それじゃお台場にでも行ってみようか」

「「了承！」」

お台場

リーナとパパとお台場に向かうために新橋からユリカモメに乗っている。

パパの普段着の無頓着さにはほとほと呆れ返る。

家にいる時はTシャツにパジャマのズボンでいる事が大半で、出かける時はスラックスに履き替えるかスーツ姿で出かける。

今日はリーナと私とデートなのにスーツを着ようとしていた。

「パパ、スーツは却下だからね」

「ええ、嫌だよ。スーツが一番落ち着くんだから」

「もう、今日は絶対にダメ！」

強制的に私がコーディネートする。

天色のポロシャツにブラウンのカラージーンズでおじさんぽくならないサマージャケットをチョイスする。

不思議な事にパパは色々な服を持っているのにスーツを落ち着くつて言う理由だけで他の服装をしようとしなない。

まるで目立たないようしているみたい。

だから今日はメガネも黒縁のダサメガネじゃなくて鱈甲のおしゃれなメガネに替えさせた。

私とパパが住んでいる都心にはスーツ姿の人ばかりで……木の葉は森の中って言うやつなのかなあ。

まあ、パパに限ってそんな事は無いか。

リーナの格好は淡藤色のコットンのレースチュニックワンピースでボトムは七分の細身のジーンズ。

私は月白色のリーナとお揃いのチュニックワンピースでボトムはショートジーンズ。

因みにリーナは大人っぽくワンピースをオフショルダーで着こなしている。

あんまりセクシー過ぎるとパパに怒られるのできちんとインナーに

はタンクトップを二人とも着ている。

実は1度で良いからして見たかったんだ。

妹かお姉ちゃんが居たらお揃いの格好を、だから今日は色んな意味で特別なの。

そして二人とも左手首にはパパがプレゼントしてくれた時計をしている。

「ねえ、菜々美。菜々海が小さい時は八雲が食事の準備をしていたんでしょ」

リーナはまだサンドウィッチに拘っているようだ。

「うん、あれ？ そうだ。パパの作ってくれたご飯やお弁当は凄く美味しかった気がする」

「ええ、気がするだけなの？」

「う、うん」

「いつから菜々海が家の事をする様になったの？」

「確か小学校で調理実習があつて家でパパに作ってあげたら凄く美味いって褒めてくれてそれから色々と作り始めたのが切っ掛けかな。それで家の事をやる様になって……パパが何もしなくなつていつて」

「菜々海、どうしたの？」

無性に体の底から怒りが込み上げてくる。

「パパあ？」

「どうしたの？」

「パパは私が家の中の事をしだしたら途端に何もしなくなったよね」「そうかな。家事全般が得意って女の子としてはポイントが高いと思っよ」

「でも」

「それに今では一人で何でもできるでしょ」

「それって……」

パパに言われて怒りが萎んでいく、パパはそんな事まで考えていた

のかな？

私が出ても大丈夫なように？

パパが急に居なくなっても大丈夫なように？

少しだけ胸が苦しくなる。

「菜々海、大丈夫？」

「うん、平気だよ。パパは何が起きても大丈夫なように私を育ててくれたんだよ」

「八雲は凄いね」

「親としては普通でしょ。娘を一人前にして初めて親になれるんだと思うよ」

そんな話をしていると15分もしないうちにお台場海浜公園に到着した。

日本を代表するデート&観光スポットになっていて多分1日じゃ遊びきれないと思う。

今日の空は少し薄曇り。

でも、このくらいがちょうど良いかも。

お日様お光も少しだけ弱くなっていて、何より海の匂いを感じられる。

「とりあえず何処から見てもわるうか」

「何はともあれ、海！」

「菜々海は海が好きだね」

「うん、パパの次に大好き！」

お台場の海は人工ビーチで磯遊びが出来たり水遊びが出来たりするけれど泳ぐ場所じゃないと思う。

だって東京湾の一番奥にある訳だしね。

少し先には自由の女神像が建って、ビーチの波打ち際には家族連れが多く水遊びを楽しんでいる。

ビーチからDECKSに向いショッピングを楽しむ。

色んなショップがあって目移りしてしまう。

リーナと手をつないではしゃぎ回っちゃった。

お台場にはこんな施設がいくつも隣接しているから便利だし飽きない、デートにはもってこいだよね。

そして隣にあるジョイポリスに来ている。

ここはアミューズメントパークになっていてアトラクションやゲームが楽しめる。

で、ここで問題発生…… リーナもローリング系のアトラクションが苦手らしい、実は私も同じで絶叫系のジェットコースターは大好きだけどグルグル回る奴はどうにも好きになれなかった。

ゲームはパパと遊んだばかりだし占いなんかのアトラクションを見て回る。

可奈情報によるとかなり怖いアトラクションがあるらしい。

何でも人形の館みたいなやつが……

パパとリーナの大接近を目論んで2人を連れて行き強引に2人だけで見に行ってもらおう。

しばらくするとパパがリーナに手を引かれるようにして出てきた。

「リーナ、どうだった？」

「面白かったよ」

「へえ？ 面白かった……」

「パパ、大丈夫なの？」

そこでパパが情けなく撃沈してしゃがみ込んでしまった。

「もう、無理。帰ろうよ」

「ええ、来たばかりじゃん」

「はあゝ 死ぬかと思っただよ」

リーナと私で何とかパパをカフェのオープンテラスまで連れて来て小休憩をしている。

こんなパパを初めて見たって言うのが正直な感想かな。

「パパにも怖いものがあるんだね」

「あのね、菜々美。僕だって普通の人の。怖いものもあれば嫌い

なものだつてあるよ」

「八雲つて可愛いね。凄く怖がつているから手をつないであげちゃった」

外国人のリーナには日本特有の人形の怖さが判らないかもしれない。リーナが怖がつてパパに抱きつくところを想像していたけど逆だったみたい。

もし歩きながら進むタイプのお化け屋敷ならパパが泣きながらリーナに抱き着いていたかもしれない。

そんな事を想像すると可笑しくなってきた。

「酷いよ、菜々美」

「それじゃ、他の怖い系のアトラクションにでも行く？」

「心の底から遠慮します」

「パパ、明日は何をして遊ぶの？」

「ええ、まだ今日が始まったばかりなのに明日の予定なの？」

「だって、早めに聞いておかないと女の子は準備に時間がかかるの。ね、リーナ」

「うん」

「そうだな、少し遠出でもしてみようか」

「それなら海に行こう！」

私がそう言つと早苗さんが良いと言つのならの条件付きだった。

速攻で早苗さんに電話をしてみると快諾してもらえた。

それなら泊りがけで行つてきなさいつて言つて宿も車も用意してくれるつて。

「うわあ、決まっちゃったみたい。リーナは構わないの？」

「うん、八雲と菜々海が一緒なら何処へでも行つてみたい」

「そう、それじゃ一緒に行こうね」

「うん！」

まだ、お昼までには時間があるので公園を散策しながらヴィーナズフォートに行くことにした。

ここはお台場でも大人気のデートスポットで中世のヨーロッパの街をイメージした創りになっていて、空も2時間おきにローテーションしながら変わり室内とは思えない開放感がある。

教会広場や噴水広場に行つて写真を撮りまくる。

だつてリーナと過ごせるのはほんの僅かな時間なのだから思い出は濃厚なくらいに沢山あつた方が良いと思うから。

リーナの手を引いて1軒のショップに飛び込んだ。

「うわぁ、可愛い。リーナはどれが良いの？」

「ええ、私のも買うの？」

「当たり前でしょ。海に行くんだもん」

そこは水着ショップだつた。リーナは何も持たずにパパの所に現れたんだから水着なんて持つていないはずだし、私だつてリーナに負けないように去年の水着じゃなくて新しいのをパパに買ってもらうつもりでいた。

「菜々海、水着を着た事が無いからこんな下着みたいな恰好で海になんか行けないよ。人だつていっぱい居るんですよ」

「うん、つて水着を着たことが無いって……」

「だつて私が住んでいたところは2重内陸で山の中だから」

「ええ、リーナつて山育ちなんだ」

「うん、標高が400メートル以上で一番高い所は2600メートルくらいあるよ」

「2600つて」

「富士山の七合目より少し下かな」

「パパ、微妙で分かりづらいけど凄く高い場所だつて感じはする。でもリーナの水着姿は見てみたいよね」

「え、まぁ、見てみたくないと言えば嘘になるかもつてなんでそんな事をパパに言わせるかな」

「えへへ」

リーナを見ると赤くなつていてパパを意識しているのが良く判る。人生は1度きりなんだから大人の事情なんてとつばらちゃえば良い

のにと思っけど、それが出来ないのが大人なんだよね。でも、私はプッシュしかないけどね。

戸惑いながらもリーナは水着を真剣な表情で見ている。去年の水着はタンキニだったけれど今年はまだ少し私も頑張らなくちゃ。

パパは居場所が無く困り顔で私とリーナを見ていた。

2人でどんな水着を買ったのかはパパには内緒だよ。

海に行つて驚かせるんだから。

ヴィーナスフォートの中は凄く楽しい。

何回も来ている私だつてはしゃぎたくなるのだから初めて来たリーナは尚更の事だろう。

そんなリーナをパパは優しい瞳で見守っている。

でも、何で早苗さんはパパにリーナを任せようと思ったのだろう。

そんな事を考えているとリーナが今日何度目かの突撃を開始した。

「うわぁ、日本にこれがあるとは思わなかった」

「リーナ、これって何？」

「真実の口だよ」

そんな事を言われてもパツと来ない。

マンホールの蓋みたいなの石に髭を生やした男の人の顔が彫つてあって、目と口がくり抜かれ穴が開いている。

リーナの話だとイタリアのローマにある有名な石の彫刻で何のために作られたのかは諸説あつて定かじゃないらしいってよく見たら案内板にも同じ様な事が書いてあつた。

「もう、菜々美はしょうがないな。中学の時に文化祭でやった演劇の『ローマの休日』に出てきたでしょ」

「ああ、思い出した。嘘つきが口に手を入れると噛まれるってやつだ。確か海神トリトーンの顔だよ」

パパに言われて思い出した。確かそんな劇をやった覚えがある。

「凄い、菜々美は演劇でローマの休日をやった事があるの」

「う、うん。でも町人Aだったけどね」

忘れていたと言うかそんな物がここにあるなんて思ってもみなかった。

確かローマの休日はアン王女と新聞記者のジョーのロマンスの話だったと思う。

「菜々海、手を入れてみて」

「う、うん。こう？」

手を入れるけれど何も起こらないし起こるはずがないよ、だって説明書には大理石だって書いてある動くはずがない。

「それじゃ私も」

リーナが私の後に手を入れて見せる。

「八雲も」

「え、僕もやるの？ 僕は嘘つきだからね」

パパが手を入れる。

確か映画ではジョーが冗談で手が切れたって見せかけてアンが驚くシーンだった。

そしてパパの顔が歪んだ。

「あれ？ うわぁ」

パパがジャケットの中に手を隠して肉球が付いた猫の手みたいなものが床に転がった。

たぶん、パパが新聞記者のジョーの真似をして笑わそうとしたんだと思う。

それを見て私は噴出しそうになったけれどリーナの反応は違っていた。

体がぐらりと揺れてリーナの体から力が抜けて崩れていく。

一瞬、目を疑ったけれど私とリーナの前に居たはずのパパがリーナの体を後ろから抱きかかえていた。

「はぁ、驚いた。まさかリーナが気を失うなんて思ってもみなかったよ」

「もっ、パパの所為でしょ」

「そんな、冗談のつもりだったのに。菜々海はつれないなあ」
パパが持ち手についているボタンを押すと猫の手がぺこりと倒れた。
何でも猫招きと言うおもちゃらしい。
飽きれてしまおう、どこでこんなものを探してきたんだろう。

それにしても周りの視線が痛いくらいに突き刺さる。
気を失ったリーナを外の空気にも当てれば少しは良いのかもしれないけれど、ここは全天候型の施設だから外で休ませる場所は無く仕方なくカフェに来ているけれど……
リーナはただでさえ目立つのにパパが抱きかかえて椅子に座っている。

それ以上に、パパはメガネを外して心配そうにリーナの顔を覗き込んでいる。

少しでもパパが視線を動かすと周りの人が慌てて視線を逸らす。
パパがリーナの耳元でリーナの名を呼んでいる、どれだけ目立てばいいのだろう。
するとリーナが気づいたみたいだった。

「リーナ、驚かせてごめんね」

「八雲の馬鹿！」

リーナがパパの首に腕を回して抱き着いた。

「リーナ、苦しいよ」

「馬鹿、馬鹿！」

「どうしたら許してもらえるかな？」

「Baciami」

私が判らないイタリア語でリーナがパパに何かを言った。
判らないけどリーナを見れば何と言ったのか理解できる。

リーナがパパをまっ直ぐに見てゆっくりとグリーンの瞳を閉じて顎を上げた。

心臓の鼓動が私の全身に響き、周りからは生唾を飲み込むような音が聞こえそつだ。

「ちゅっ」

可愛らしい音がしてパパがリーナにデコチュウウをした。

今度は私の全身から力が抜け一気に緊張がほぐれると止まっていた時間が動き出すように周りの雑踏が聞こえてくる。

「八雲の意気地なし、意地悪、嫌い！」

「ゴメンね。僕にできるのはここまで」

そう言っただけ抱きかかえたままの格好でパパが優しくリーナを抱擁する。

見ている私の方が恥ずかしくてむず痒い。

それにもどかしさで一杯になる。

リーナの気持ちは女の子同士だから良く判る、でもパパは違っ今はつきりと判った。

一線を引いているそれはリーナが何処かの令嬢だから？

それともリーナが若いから？

早苗さんに預かるように言われたからかな？

恋に年齢も国境も無いし恋に落ちるのに必要なのは時間じゃないと思う。

だけど、何かが確実に変わった。

リーナが一步を踏み出したのだと思う。それはリーナの行動を見れば直ぐに判った。

カフェを出て買い物を楽しむ。

リーナはまるで子犬の様にパパの後を追いかけてパパのジャケットの袖を掴んでいる。

パパは最初のうちは困った様な顔をしていたけど諦めたのかいつもと変わらず平静を装っている。

パパの心は鋼でできているのかな？

一回開けて見てみたい。

でも、血管の代わりに配線なんかがあったら怖いかも……

リーナがパパの腕を引っ張ってアクセサリーショップに入っていく。

私は2人に付かず離れずの距離でアクセサリーを見ている。

「八雲、脅かした罰としてこれを買って」

「仕方がないか、僕の所為だしね」

初めてパパにリーナがおねだりをしているを聞いて何をかうのか
が凄く気になる。

少しずつ距離を縮め聞き耳を立てる。

「菜々海は何をしているの？ 探偵ごっこのもりなの？」

「ふえ、パパ？ べ、別に」

「菜々海も欲しいものがあつたら言つてね」

「うん、それで何をかうの？」

「ストラップだよ、それもペアのが欲しいって」

パパが指差すストラップはゴールドとシルバーの三日月の形をして
いる。

シルバーの方はプラチナ1000で金の方は18金でできているとの
事。

因みにプラチナは1000分率表記で100なら10%のプラチナ
に90%のシルバーだとパパが教えてくれた。

シルバーの三日月に抱かれる様にゴールドの三日月が嵌まりフルム
ーンの形になる。

そして何か文字が刻まれている。

「S e m p r e , l u c e d i v e n t a n t e q u i . i t t
もここに光をつけていう意味なの。2つの月が合わさらないと読めな
いようになっているんだよ」

「うわあ、ロマンチックと言うか甘い！ で、パパはかうの？」

「買わない理由はないでしょ。リーナが欲しいって言っているんだ
から」

「でも、パパは邪魔くさいってストラップなんかつけないじゃん」

「つけます、絶対につけます」

パパが急にそんな事を言うから驚いてリーナを見るとパパの二の腕
を指で摘み上げていた。

これじゃ完全にリーナの尻に敷かれるのが目に見えている。
でも、私は絶対にリーナ以外を認めないからね。

海

翌日、空が白み始める頃に目が覚めた。
まるで遠足に行く子供の様だ。

リーナの気持ち完全に傾いてしまった。
どうやら踏み込み過ぎたらしい。

僕の横で気持ち良さそうに寝息を立てている。

これからどうするか……決まっている。

これ以上踏み込むわけにはいかない。

が、突き放す事はさらに難しいだろう。

軽率に行動を起こせばリーナは我を忘れて行動してしまうに違いない。
い。

いっその事、僕の裏の顔を曝け出した方が楽かもしれない。

「おはよー パパ、リーナ」

「おはよう、菜々美」

「早く行こうよ」

いつもより150%増してハイテンションの菜々海が起こしに来た。

「リーナ、起きて着替えておいで」

「うん」

そう言っただけで起き上がり僕の肩に頭をちょこんと当てる。

下心があつてやっているとは到底思えない。受け止めてあげる事が
出来ずにもどかしい。

いっそ出会わなければ…… そんな事を考えていると空の言葉が蘇
る。

『出会いはね、必然なの。だって必要のない人に出会う必要はない
じゃない。必要な人だからこそ出会うの。良い出会いも、悪い出会
いもそこから学びなさい。そして生かさない、その経験は必ずあ
なたの身になっていくものだから』

今は今のままでそれがベストなんだと思う。

時が来れば必ず終わりがやってくるのだから。

「パパ、早くご飯食べてね」

「はいはい」

「返事は一回！」

「了承！」

朝食を済ませガレージに行くと車が用意って……

「うわぁ、凄いカッコイイ車だね。パパ」

「う、うん」

頭を抱えそうになった。

どういう理由で美咲はこの車をチョイスしたのだろう、彼女は考えも無しに選択するような人間じゃない。

そういう意味では警視庁の中でも断トツに腹黒い、良い意味でも悪い意味でも。

まあ、この車なら日本のオフロードなんて難なく走破するだろう。クルーザーの外見は一言で言えば日本産ハマーと言った所だろうか。ハンヴィーなんかを用意されることを考えればこれで良いとしか言いようがない。

それに外見からは判断できないが特別仕様になっているに違いない。それを考慮しても派手なカラーリングだった。

「綺麗な色だね、八雲」

「そうだね、イエローのツートンって派手だな」

「素敵だと思うけど」

そんな事にお構いなしに菜々海が荷物を詰め込んでいる。

僕のアドバイスは何処に行ったのだろう、それくら多い荷物だった。

「にしても、菜々美の格好って」

「良いでしょ、海に行くんだから」

「そうだけどさ」

「早くいくよ」

菜々海の格好はマルチボーダーのフード付きタンクトップに同じボ

「ダーのキュロットを穿いている。

どうやら下には同じ柄の水着を着ているらしい。

リーナは大きめのＴシャツにショートデニムパンツを穿いている。菜々海と同じように下に水着を着ているのだろう。

僕も人の事は言えない。ポロシャツに下はシンプルなサーフパンツを穿いている。

もちろん下にはフィットネスタイプの水着を穿いている、理由はサーフパンツは何かあった時に泳ぎづらいから。

そしてスマートフォンで隠しファイルには美咲から宿泊先の情報が届いていた。

「御宿か」

「パパ、どのくらいで到着するの？」

「２時間くらいかな」

「それじゃ、出発進行！」

「了承」

後部座席に座る菜々海が声をあげて車を出した。

リーナは嬉しそうな顔をして助手席から外を見ている。

車内には菜々海のリクエストで菜々海が好きなアーティストのCDが流れている。

２時間ほどで到着したホテルは海沿いに建つ綺麗なホテルだった。

「皇様ですね。ツインで3名様のご予約をいただいておりますが…

…」

「はい、構わないですよ」

美咲にしてやられたと言うかまさか知られているなんて事は……

冷や汗が流れるが強引に押し通す。

ここで妻と一緒に結構ですからなんて事を口にすれば火に油を注ぐようなものだ。

部屋はオーシャンビューのアジアンテイストの綺麗な部屋だった。

チェックインの時間までかなりあるが美咲の心ばかりの配慮なのだろう。

直ぐに海に飛び出した。

2キロにわたり白い砂浜が続き、海の家が煩くないほどに立ち並びパラソルの花が咲き乱れている。

パラソルをレンタルして立ててもらい荷物をまとめておく。

荷物と言ってもデジカメと小銭入れにバスタオル程度のものだ。

菜々海とリーナが水着になって日焼け止めを丁寧に塗りあっている。

「パパ、私達の水着はどう？」

「可愛いよ。去年より大人っぽい菜々海のマルチボーダーのビキニも、リーナの目の覚める様ペパーミントグリーンのエスニック柄のビキニもね」

「うわぁ、感動が薄くない？」

「だって、来的时候にはもう着けていたでしょ」

「まあ、そうか」

「パパ、泳ごう」

「ちよつと先に行つてて」

ポケットのスマートフォンが着信を告げている。

液晶には美咲早苗の名前が浮かび上がり、緊急を要する事が直ぐに判る。

盗聴などを配慮してメールで必要最小限の情報しか伝えない美咲が直接電話してくると言う事は事態がひつ迫してきたと言う事を表している。

「美咲、僕だけど」

「八雲、聞きなさい。リーナを狙う輩が動き出したわ。リーナは明後日引き渡しになったから」

「了承」

「あなた、本当に判っているの」

「美咲は何を言っている。2週間が半分になったただけだ。リーナを引き渡しミッションはコンプリートされる」

「こちらも了承。菜々海の事を頼んだわよ」

「もちろんだ」

いつ伝えるか悩むところだが良い話なら少し遅らせて気を持たせるのもありかも知れないが、彼女たちにとっては良い話ではないだろう。

それならば早めに話して精一杯残りの時間を楽しませてあげる方が最良だと判断した。

上着を脱いで菜々海とリーナが待っている波打ち際に向かうと菜々海の声が聞こえてきた。

「離してよ。触らないで」

「一緒に遊ぼうぜ」

「嫌だ！」

制服でなくても目立ってしまふ。

そのくらい2人は際立って見えるのだろう。

実際、リーナは凄く綺麗だし親馬鹿かもしれないが菜々海は可愛いと思う、学校でも人気があると可奈ちゃんが言っていた。

しかし、今回のナンパはかなり強引に見える。

数人の男が菜々海とリーナを取り囲むようにして1人の男が菜々海の腕を掴んでいる。

周りの人はあまりの酷さに見て見ない振りをしていると言うより恐怖を感じているのだろう。

それは手を出さない菜々海が一番感じているのかもしれない。

自分一人なら逃げ出すことは容易でもリーナが居ればそれが難しい事を瞬時に判断している。

この男達がリーナを狙う輩である訳がない。

あまりにもスマートなやり方ではないからだ。

「菜々海、リーナ。待たせて悪かった」

声を掛けながら男達と菜々海の間割り込む。

菜々海が声を上げようとするがそれを一瞥して制すると菜々海は口を噤んで理解を示した。

「僕の連れに何か用ですか？」

「くそ！ 男付かよ。上玉だと思つたのに。冴えない男と仲良くやれよ！」

菜々海の腕を掴んでいた男が僕の肩を小突いた拍子に、よろけて菜々海にぶつかり2人して尻餅をついてしまった。

「だつせ！ こんな男の何処が良いんだ？」

「リーナ！」

リーナの顔が強張り男を睨みつけている、初めて負の感情を露わにしたリーナの腕を思わず掴んだ。

「八雲、どうして止めるの？ 悔しくないの？」

「リーナあのね。パパはあんな男ならコテンパンに出来ると思うよ。でも周りを見て小さな子ども沢山いる、それにリーナだっているんだよ。だから手を出さなかつたんだよ」

僕が口を開く前に菜々海が砂を払いながら立ち上がりリーナに言い聞かせてくれた。

「パパはもう少しシツカリしてね。ちゃんと守るべき時に女の子を守らないと駄目だよ」

そう言いながら僕の腕を引っ張り上げてくれた、これじゃ親子逆転だ。

そして、ここで切り出すのがベストと判断する。

この後で海で遊んで気分が持ち直したのを再び落とすような事はしたくないしするべきではない。

「少し早いけどお昼にしよう」

「ええ、まだ海に入つてないのに」

「ね、菜々美」

「え、判つたよ」

パラソルに戻り何を食べたいか聞く前に菜々海が僕とリーナの腕を引っ張つて海の家を駆け込んだ。

「やっぱり海に来たら海の家しょ！」

「菜々海は強引なんだから」

「えへへ、だってリーナの暮らしている場所には海の家なんてないでしょ。多分、世界中を探しても日本くらいじゃないの」

「まあ、そうだね」

「それじゃ何を食べようかな。リーナにはパパがちゃんと説明してあげてね」

「了承」

菜々海が少しハイテンションになっている。

それは何かを感じ取っているのだろう、菜々海の横に座るリーナも何処となく落ち着きがない。

感が良いのは良い事だけど時と場合によるかもしれないと実感させられた。

リーナに判る様にメニューを一通り説明する。

メニューと言っても海の家で出しているものなんて大概決まっている。

カレー・おでん・トウモロコシ・ラーメン・焼きそば・イカ焼き・トリ唐・フランクフルト・こんな物だろう。

最近ではカフェみたいなお店も増えて来てメニューも色々あるみたいだけど、基本作り置きが出来て日持ちがするものが多くなる。

海の家で生ビールを煽りたい気分だがそうもいかない。

基本依頼を受けている時にはアルコールは摂取しない、依頼内容にもよるけど今は特にノーだ。

そんな事を考えているうちに菜々海とリーナが注文を済ませていた。

「こんなにどうするの？」

「えへへ、とりあえずリーナが食べてみたいって言ったものを注文してみました」

目の前のテーブルにはテーブルが見えないほど料理が並んでいる。

まるで、メニューの端から全部と注文をしたような有様だった。

「パパ、あの電話って早苗さんでしょ。で、私とリーナに話があるんじゃないの？ サツとパツと話しちゃってよ。その方が気が楽で

「しょ」

「そうだね。良く聞いてね。実は理由は詳しくは言えないけれどリーナの帰国が早くなった」

「いつなの？」

「明後日だよ」

「え、まだ半分しか……仕方がないか」

リーナの瞳が揺れている。

どう声を掛けていいか戸惑ってしまう。

「リーナ、とことん遊ぶよ。そんな顔をしないの、パパに笑われちゃうぞ。二度と会えなくなる訳じゃないでしょ。出会いは必然なの、きつとまた会えるよ」

「うん！」

菜々海の言葉に驚いてしまった。

僕は空に言われた言葉を菜々海には教えていない、蛙の子は蛙なのだろうか。

昼ご飯を食べ少しだけ休んだ後は怒涛の様に遊びまくった。

まるで疲れを知らない子どもの様に。

リーナも始終笑顔ではしゃぎ回っている。

こんな生活もあと数日で終わる。

今まで感じたことが無い物が去来し、それを打ち消すように僕も菜々海とリーナの輪の中に飛び込んだ。

花火

ホテルに戻るとフロントで荷物を渡された。

美咲かららしい、そして一枚のメモが挟まれていた。

『ふたまるまるまる
2000 着用し浜に待機』

まるで軍の司令の様だ。

少し早めにホテルで夕食を済ませ美咲からの荷物を開けて見る。

「うわあ、浴衣だ」

「凄く綺麗な着物だね」

「リーナ、浴衣って言うんだよ」

「浴衣？」

「うん、着物の一種だけだね。凄く涼しくてお祭りなんかに着るんだよ」

「私はピンクが良いな。リーナにはこっちのブルー系が似合うと思
うよ」

美咲からの荷物の中身は浴衣だった。

菜々海が選んだのはピンク系の淡い薔薇がちりばめられた浴衣で、
リーナに似合うと言ったのは淡い紫の桜がちりばめられている浴衣
だった。

「パパには無いの？」

「入っているよ、甚平みたいだね」

それは紺縞の甚平だった。

美咲に真綿で首を絞められているような気がしてならない。

「それじゃ、先にパパが着替えて私とリーナの着付けをよろしくね」
「了承」

バスルームで着替えをして出てくると菜々海とリーナも準備が出来
ていた。

浴衣を羽織って着物の下には着物スリッパなるものを着けていた。

菜々海の浴衣から着付けていく。

菜々海の着付けをしているとリーナが不思議そうに見ている。

「八雲は何でも出来るんだね」

「一応ね、僕の実家じゃ着物を着る事が多かったし子どもの頃は着付けを手伝わされたから見よう見まねで覚えたんだよ」

「リーナ、日本ではそう言うのを門前の小僧、習わぬ経を読むって言うんだよ」

「菜々海、どういう意味なの」

「パパ」

「うわあ、何で僕に振るの？ 簡単に言うとな環境が人に与える影響は大きいと言う意味かな。習ってもいないのに毎日見聞きしていると知らない間に身に付いていると言うことだよ。さあ、次はリーナの番だよ」

「う、うん」

少し戸惑いながら浴衣を引き摺るようにして僕の前に来た。

浴衣のセンターをきちんと決めてから着付けに入る。

「ひゃあ〜ん」

「ゴメンね」

くすぐったいのかリーナがドキツとする様な声を上げるけど聞こえない振りをする。

手早く着付け帯を基本の文庫結びで決める。

下駄でビーチを歩くには無理があり美咲もその辺は心得て荷物に入れなかったのだろう。

ビーチサンダルを履いて砂浜へ向かう。

時刻は指定の5分前だった。

「何があるんだろうね」

「楽しみだね」

そんな事を菜々海とリーナが話しているとスマートフォンがメールの着信を告げた。

『楽しいひと時を』

とだけあって8時ちょうどに打ち上げ花火が上がった。

「うわあ、凄い！」

「綺麗な花火。こんな花火初めて！」

突然の打ち上げ花火に後ろの方でも歓声が上がるのが聞こえる。

左程多くはないがかなり手が込んでいる。

スターマインなどが上がり。

錦冠にしきかむろ が尾を引きながら海面に吸い込まれる様にして

花火が終わりを告げた。

得も言われぬ寂しさが漂う。

それは祭りの終わりを告げている様だった。

「そうだ、リーナ。パパとデートしてきた。この先にね、ラクダに

乗った王子様とお姫様の像があるんだよ。説明はパパから聞いてね」

「こら、菜々美」

「先に休んでいるからね」

「八雲……」

菜々海を追いかけようとするリーナに袖を掴まれてしまった。

雲行きが怪しくなってきた。

それは夜空もそして僕も……

砂浜を散歩がてら歩き出す。

風が出てきて時折月明かりが遮られる。

「何でラクダに乗った王子様とお姫様なの？」

「月の沙漠と言う童謡がここをモチーフにして作られたんだよ」

「どんな歌なの？」

リーナのリュクエストに答えてうる覚えの曲を口ずさんだ。

「素敵な歌だね」

「そうだね」

すると前方に人の気配を感じる。

風雲急を告げるとはこんな事を言うのだろうか。その気配は昼間に菜

々海とリーナを取り囲んでいた男達だった。

「獲物を見つけた。そんな冴えない男なんて放っておいて一緒に遊ぼうよ」

「嫌！」

何を探していたのか昼間の時より人数が多く木刀などの獲物を持っている。

リーナが僕の背中に隠れるようにして震えているのが伝わってくる。

「こんな男じゃ守ってもらえないよ」

「八雲、帰ろう」

「八雲？　はん、名前だけは一端だ。小突かれただけで尻餅をつくような男に何が守れるんだ？」

逃げてでも逃げ切れないだろう、覚悟を決めるしかない。

「リーナ、これを持っていて。大丈夫だからね」

「八雲……」

リーナにメガネを渡し男達に対峙する。

花火が終わり辺りに他の人の気配はない。

1人が木刀を振り翳しながら向かってきた、軽く往なし手刀を打ち込むと砂浜に崩れ落ちた。

「やりやがったな！」

まるで型に嵌まった様なセリフだ。

リーナから少しだけ距離が出来た隙について他の男がリーナに向かう。

するとリーナの悲鳴が頭の中を突き抜け、その瞬間に真っ黒な物に呑みこまれた。

「八雲！　駄目！」

何か柔らかい物が体にぶつかり意識が戻ると僕に覆い被さるようにしてリーナが泣き崩れている。

辺りを見渡すと男達の呻き声が聞こえた。

そして僕の手握られた木刀は血で赤く染まっていた。

恐らくリーナが僕に体当たりをして止めてくれたのだろう。そうしなければ僕はこいつ等の息の根を止めていたに違いない。リーナの悲鳴が空と重なり己の弱さに呑みこまれてしまった。僕の本性を目の当たりにしたリーナが僕の事を遠ざけてくれれば本望かもしれない。

『冷徹になり任務を続行せよ』

昔、上官だった男の言葉が蘇る。

一刻も早くこの場を収束させねばならない。

万が一、誰かに騒がれれば任務に支障をきたす。

「リーナ、ホテルへ」

そうリーナに告げ唯一無二の現・上官に連絡をする。

「らしくないわね、貸しよ」

一笑されてしまう。

「初めてよね、こんな事」

初めてではない2度目だ。

皇家に代々課せられている掟は常に非情である事。

天の影を一手に引き受け闇に葬る、それ故に天から授かった皇の姓だと。

例え愛すべき人に何があるうと務めが最優先されると。

僕の父は掟を破り母と共に散ったと。

幼き時より祖父から教えられ育てられてきた。

そして空と出会い全てを否定され空が気づかせてくれた。人を愛する事を。

力は人を守る為にこそ存在しなくてはいけないと。

何も知らなかった僕を初めて受け入れてくれた空が突然姿を消し、家を出ようとした時に父と母を罵るように祖父は僕自身を罵倒した。愚かな父と同じ轍を踏むのかと。

そして空を蔑み卑しめた。

その時に生まれて初めてどす黒い負の感情に呑み込まれた。

気が付いた時には祖父の腕の骨は砕け。
仲間だと思い込んでいた輩は皆、息も絶え絶えだった。
そして僕は二度と帰る事のない場所を飛び出した。

頬に冷たい滴が落ちる。

天を仰ぐと真つ黒な空から雨粒が落ちてくる。

このまま全てを洗い流してほしかった。

すると僕の手を不意に掴んだ何か走り出した。

僕の手を引きながら必死に走っているのはホテルに戻ったと思っ
ていたリーナだった。

慌ててリーナの体を抱きかかえるようにして走り出し、今は使われ
ていない小さな海の家らしき小屋に飛び込んだ。

知らない間に外れまで来てしまっていたらしい。

失態だった。

己を見失い任務すら忘れリーナの存在にすら気づけなかった。

取り返しのつかない事になるところだった。

一切の感情を押し殺そうとするけど出来ない。

動揺が激しい所為か負の感情に呑み込まれた後遺症なのか理由は……
判っているリーナの存在だ。

呼吸を整え押し殺すのではなくこの場は落ち着いて冷静に対応して
切り抜けるべきだ。

「リーナ、すまなかった」

「どうして八雲が謝るの？ あの場は私が居たから逃げる事が出来
なかったのですよ。正しい判断じゃ」

「怖かったですよ。あれが僕の本性だから。ゴメンね」

「謝らないで。怖くなかったかと聞かれれば怖かった。あの男の人
達がね、八雲は怖くないもん」

「リーナには敵わないな」

怖くなかった訳がない。

リーナが止めてくれなければ僕は殺人鬼になっていた。恐らく逃げ

惑う男達を情け容赦なく木刀で滅多打ちにしていたのだから。

「くちゅん」

僕の惑いを打ち消すように可愛らしいくしゃみが聞こえる。

スマートフォンの灯りに照らされ、雨に打たれてリーナの前髪からは水滴が落ちて体を小さく震わせている。

雨に打たれた体に浜風はとても冷たく感じる。

「リーナ、浴衣を脱いで乾かそう」

「えっ、う、うん」

リーナに背を向けると戸惑いながらリーナが浴衣を脱ぎ始めた。

「八雲、脱いだよ」

「それじゃ浴衣を僕の手」

リーナが浴衣と着物スリッパを簡単に畳んだ状態で渡してくれた。

立ち上がり干せそうな場所を探す。

幸いにも最近まで使われていたのか埃もあまり溜まっていない。

織に使っていた竿を見つけ浴衣を軽く絞り綺麗に広げて竿に掛ける。

自分が着ている甚平も軽く絞って広げて乾かす。

通り雨が上がるころには半乾き程度にはなっているだろう。

トタンの屋根に雨が当たる雨音しか聴こえない。

小屋は隙間だらけでひんやりした風が吹き込んでくる。

振り返るとリーナの姿がぼんやりと浮かび上がる。

白い肌に清廉な薄い水色の下着をつけているのが見える。

夜目がきくと言うのも厄介なものだ。皇の家ではいかなる状況にも対処できるように鍛錬が積まれる。

夜目もそのうちの一つで微かな灯りの中で数人の真剣を持った相手と対峙させられる。

万が一、怪我をし命を落としてもそれは技量が足りなかったのだで済まされてしまう。

力あるものだけしか生き残れない究極の世界だった。

「八雲のエツチ。見たでしょ」

「見えないと言えは嘘になるかな。僕の家ではこの程度の灯りで見えなければ生き残る事は出来ないからね」

「本当に八雲の家はそんなお家なの？」

「僕の家は戸隠と言うところに在ってね。伊賀、甲賀なんて知っているかな。時代劇に出てくる忍者の里みたいな所だよ。その中でも裏戸隠は別格で各地から腕利きを集め。そして生き残りをかけて修練させ一握りの精鋭だけが生きる権利を与えられるんだ。覚悟なんて言葉じゃ表せない、常に肉体と精神を極限の状態におき僅かな隙を見せれば脱落してしまう」

「脱落したらどうなるの？」

「運が良ければ死なずに済むかな。一生寝たつきりだけだね」

「そんな……」

「まあ、僕の時代にはそこまで酷くはなかったよ。でもあらゆる鍛錬はさせられたよ、それこそ命がけだね」

僕とリーナは背中を合わせて座っている。

リーナの温もりと鼓動が伝わってくる、僕の温もりと鼓動もリーナは感じているのだろうか。

吹き込む風の音と雨垂れの音が耳に心地いい。

「八雲、空さんの事を聞いても良い？」

「そうだね。まだ雨は止みそうにないしね。空はね僕が普通だと思っていた物を全て壊してくれた人なんだよ」

「壊してくれた？」

「うん、僕は皇家の世界しか知らなかったからね。そして力は愛する者を守る為にあるのだと教えてくれたんだ」

「愛していたの？」

「愛だったのかな、ちょうど菜々海と同じ歳の頃だったからね。愛と言うより憧れが強かったかな。色々な世界の事を知っていて僕に優しく教えてくれたからね」

「八雲、これからどうするの？」

「何も変わらないよ」

「違う、その独りで……」

「さあ、どうなるかは神のみぞ知るかな。僕は信心深いほうじゃないけどな」

「八雲」

リーナが床についている僕の手を手を重ねた。

さっきまで心地よかった雨音がもどかしい。

僕は何も言わず目を細めて天井を見上げた。

「八雲！」

更に強い口調で僕の名を呼んで手を掴んで引つ張る、リーナが僕の背中に視線を向けているのが判る。

仕方なく体を横に向ける、リーナを真正面から見る勇気は無かった。

「私も生まれた時から生きる道は決まっていたの。家の為に生きる覚悟もできているつもりだったの。でも」

「リーナ、それ以上は駄目だよ。許される事じゃない」

リーナの瞳から真珠の様な涙がポロポロと零れ落ちていく。

今の僕にはそれすら拭う事が出来ない。不意に僕の頬にリーナの手が触れる。

「リーナ！ Assolutamente no……」（絶対に駄目……）

声を消され口を柔らかいもので塞がれてしまった。

リーナの覚悟の深さが流れ込んでくる。

翌朝は眩しい光で目が覚めた。

嵐が過ぎ去った後はこんな感じなのかもしれない。

リーナは僕の腕の中で目を覚ました。

「危うく全てを台無しにするところだったよ」

「意地悪」

朝食を食べながら未だ燻っている菜々海に集中砲火を浴びる。

「もう、遅すぎでしょ。心配したんだから」

「ゴメン、雨に降られてね。雨宿りしていたんだよ。菜々海は先に

休むって言うていたから起しちゃいけないと思ってね」

「で、進展はあったの？」

「何の進展？」

「ニブチン、ポテカス！ パパじゃ仕方がないか」

「何が仕方なくて、何が言いたいのかな？」

「それに気づかないこと自体、駄目駄目なの」

そして菜々海が地元の地方紙をみて固まっている。

グループ同士の抗争か昨夜未明御宿の海岸で数人の男性が重傷を被り病院に搬送された。

「うわあ、これってもしかして私とリーナをナンパしてきた連中かな。ざまあみる」

「こら、菜々美」

「いいの！ パパを突き飛ばしたんだから天誅が下ったんだよ」

「そんな事を言っていると美咲に怒られるぞ」

「それはちよつと嫌かもね」

朝からホテルにも警察が来ていた。

他の宿泊客にも事情を聴いている様だった。

僕達の所にも事情を聴きに來たけど僕が桜田門の一般職員だと判ると対応が緩やかだった。

ビーチで遊ぶ気にもなれず早々に帰宅する事にした。

車に乗り込み都内に向けて出発する。

車内を静寂が包み込む。

リーナは物思いにふけているのか窓の外を見ている。

菜々海は……ルームミラーを覗き込むと神妙な顔をしているのか思考を巡らせているようだ。

そしてもう一つ気づくと菜々海が口を開いた。

「パパ、正直に答えてね。昨夜の抗争事件ってパパの仕業でしょ」

「どうして僕だと思うの？ それに未明って書いてあったでしょ。」

僕とリーナは「

「早苗さんが裏で動いた」

相変わらず菜々海は直球だ。そしてもう子どもじゃない事も僕は知っている。

「本当はね、薄々気づいていたんだ。パパが早苗さんと何かをしている事を。でもパパが話さないのならそれでいいと思ってた。でも、パパの所にリーナが来て確信に変わったの。だって可笑しいでしょ。パパは警視庁で仕事をしているけれど警察官でも刑事でもなく一般職員だよ。そんなパパに何処の誰かも判らない令嬢を預けるなんて不自然だもん」

「パパも気づいていたよ。そろそろ話す時期だってね。パパはね、表で取り扱えない様な事柄を専門に処理しているんだよ。それと昨夜の件はパパの唯一の失態だよ。我を失ってリーナに助けられた。危うくパパが美咲に逮捕される所だった」

「そうなんだ。それじゃやっぱりリーナって」

「明日、引き渡しが終わればさよならだよ。でも、その前にシツカリ掴まって」

国道を外れ脇道に入り速度を上げる。

ビンゴの様だ、慌てて後をついてくるところを見ると尾行をするのは不慣れらしい。

ルームミラーで菜々海を見た時に後方に不審な車を見つけた。

それが不審な車両かなんて素人では判らないだろう。

「パパ、どうしたの？」

「リーナを狙う輩が動き出したと言う事かな」

「そんな、どうして」

「身代金目的が大半だけど最近じゃ要求も色々だからね。こう言う理由でリーナの帰国が早くなったんだ」

脇道からさらに山道に入ると車は追いかけて来られなくなった。

諦めた訳ではないが僕達が逃げた事で相手が素人ではない事を確認したのである。

その晩は僕の部屋でリーナと菜々海を休ませ僕は警戒を怠らなかつ

た。

成田

リーナが帰国する朝。

リビングには菜々海とリーナに何故か美咲が居た。

菜々海が僕に協力すると言いだし僕が反対すると美咲に丸め込まれてしまった。

「八雲、ここまで菜々海に話してしまつたら仕方がないでしょ。私も一緒なのだから協力してもらいましょう」

「美咲は本気で言っているの？」

「本気よ。今のあなたはあの時のあなたとは違う、そうでしょ」

「了承した。菜々海は覚悟が出来ているんだね」

「出来てる。私はパパとママの子だもん。それにリーナは大切な友達だから力になりたいの」

「上出来だ。それじゃ美咲と菜々海はクーラーザーで僕はリーナと美咲の車で行動をする。家を出たら一切連絡は不能だ。そして最優先事項はリーナの引き渡し。どんな手を使っても僕が成田まで送り届ける。以上」

ガレージで2台の車に乗り込む。

リーナも菜々海も緊張した面持ちで顔を強張らせている。

「私がリーナを送り届けた方が良いんじゃないの？」

「保険みたいなものだ。足を引つ張るなよ」

「相変わらずクールなのね」

「愚痴なら終わればいくらでも聞いてやる」

「了承、覚悟しておきなさい」

先にクーラーザーで美咲と菜々海が家を出る。

しばらくしてから僕は車のエンジンをかけた。

「八雲、可愛いらしい車だね」

「美咲のフィアット500だよ。色々和美咲仕様にしてあるけどね」

「美咲さん仕様？」

「例えばこれ」

リーナはこんな状況に慣れてしまっている。

彼女の言葉通りなのだろう『家の為に生きる覚悟』というやつか。僕の気持ちも少しだけ楽になった。

カーナビの様な物のスイッチをONにするといきなり機械的な声がする。

「ハロー ヤクモ」

「ハロー アル」

「ミカクニン ダレ」

「アル リーナだよ」

「リーナ ニンシヨウ」

「ハロー リーナ」

「ハロー」

リーナがキョロキョロしながら戸惑い気味に機械の声に応えた。

「八雲、この子は何？」

「美咲が作った人工知能とえば良いのかな。簡単な会話が出来てお喋りするカーナビゲーションみたいな物かな。名前はアルファ・通称アルだよ。ルームミラーの上にカメラがあるでしょ。それで認識しているんだ。だから他の誰かが乗り込んだ場合は警報が鳴りドアがロックして美咲が解除しない限り閉じ込められてしまう仕組みになっているんだ」

僕が説明すると丸い小型カメラが音も無く動いた。

「そうなんだ」

「ヤクモ ドコへ」

「アル 成田空港だ」

「オーケー」

首都高には乗らず下の道で成田へと向かう。直ぐに後を付いてくる車に気付いたが都内ならばこちらに分がある。

大型の地下駐車場などに入り追跡してくる車両を撒いてしまう。そしてアルに監視させる。アルは警視庁のメインコンピューターとリンクしていて関東近郊を全てカバーしてくれる。追尾してくる車が無い事を確認して東関東自動車道に乗り成田に向かう。

成田空港が目前になりアルが警告を発した。

「ヤクモ ロスト」

「了承した」

「八雲、ロストって何？ まさか菜々海たちの身に何か」

「関係ない、最優先事項はリーナの引き渡しだ」

「アル 何をロストしたの？」

「リーナ。落ち着くんだ。美咲はプロだ」

「でも、私の為に危険な目に」

「それは承知の上だ。だから保険なんだ」

「酷い！ 八雲はそれで良いの？ 菜々海の身に何かあったら」

「僕は菜々海に確認したはずだよ。覚悟はあるのかと、そして菜々

海はあると答えた」

「止めて。八雲、止めなさい！」

「リーナは菜々海の覚悟を無駄にするつもりなの」

「それは……」

リーナには自分の身に何が起きようが覚悟はできている。

しかし、菜々美は違う。

そんな事は重々承知している。僕は菜々海の父親なのだから。

そしてリーナの思いや気持ちに僕は強引にねじ伏せた。

「それじゃ、成田で引き渡した後は私の自由にさせてもらう」

「それは構わない。僕のミッション外だ」

リーナの顔が強張り真っ直ぐに前を向いたまま何かを直視していた。

成田国際空港に着くとリーナが車から飛び出すように降りて出発口

ビーに向かおうとする。

慌ててリーナの手を掴むと弾かれてしまった。

「Non mi toccare!」(触らないで!)

仕方なく少し距離を置いて後ろに付いて歩く。

少し歩くと前方にSPらしき男を従えたリーナに良く似ている男がスーツ姿で待ち構えていた。

リーナがその男に走り寄り何かを話している。

すると、男の鋭い視線が僕に向けられた。

そしてリーナが僕に向かって口を開こうとする。

僕はリーナの前で片膝をついてリーナの左手を取りキスをした。

「プリンセス・リーナ。貴女には貴女の使命があるはずです。それは一少女を救う事ではないはずです。貴女を大勢の国民が待っているはずです。数々の非礼お許しください」

「全て知っていたのですね」

リーナが息をのみそして顔を強張らせ奥歯を噛み締めた。

「娘を迎えに行つてまいります」

そう告げて首を垂れる。

「リーナ、戻ります」

「Jawohl!」(ヤヴォル)

足音が遠ざかっていく心の中で別れを告げ立ち上がりスマートフォンを取り出し歩きはじめる。

2人の距離が夢の様に遠ざかっていく。

「アル! Call up!」

「ラジャー ヤクモ」

ばら積み

パパの言葉が胸に突き刺さった。

自分からパパの裏の仕事を手伝うって覚悟を決めたのに、今まで知らなかった世界を垣間見た気がする。

『私はリーナの身代わりで保険みたいなものなんだと』
怖くないと言えば嘘になる。

誰かに襲われるなんて事は今まで一度も経験をしたことが無い。

あるのは言い寄る男を撃退した事があるだけで、それだっで見極めをしなければ怪我をし最悪パパを泣かせる様な事になってしまう。
しばらく車が走ると早苗さんの顔が緊張しているのが判る。

「八雲は上手く撒いたかしらね。こちらは容易く逃がしてもらえそうにないかも」

「パパは格闘系が強いけど専門家じゃないでしょ」

「八雲はね。プロ中のプロよ。彼を敵に回すと言う事は。お話はこのまで飛ばすわよ」

都内を抜けて一般道路で成田に向かう途中で呆気なく捕まってしまった。

早苗さん曰く裏道を使ったのが仇になったって教えてくれた。

車通りの少ない通りでトラックに幅寄せされ行く手を遮られ車が止まると直ぐに取り囲まれトラックの荷台に押し込まれて意識が無くなった。

気が付くとそこは大きな箱の中だった。

床も壁も鉄板張りでお世辞にも寝心地が良いとは言えない。

その上に大きなディーゼルのエンジン音が響いていて安眠を妨害している。

「起きたみたいね」

「早苗さん、ここは何処なの？」

「恐らくばら積み貨物船の中かしら。決して人を運ぶ船じゃないわね」

「ばら積みつてもしかして石炭とか穀物を運ぶ船のこと？」

「菜々海はお利口さんね」

「もう、私は小学生じゃないもん」

早苗さんが頭を撫でてくれる。そう言えばパパ的に言えば拉致されたのに拘束されていない。

まあ、巨大な鉄の箱の底じゃ逃げようが無い。

「しかし、参ったわね。携帯も腕時計も持って行かれちゃったわ。

これじゃ八方塞がりね、まあ時期に八雲が見つけ出すでしょ」

「私の携帯も無いや。でも海の上じゃ携帯なんて通じないでしょ」

「普通の携帯はね」

「そっか、早苗さんも裏稼業なんだ」

「もう、失礼ね。私は裏じゃなくて本業です」

早苗さんの話は俄かには信じられなかった。

公安の中でも特公と呼ばれ内調とも繋がりがああるなんて……あれ？
どうして早苗さんの言葉がすんなり理解できるのだろう。

公安は公安警察、警視庁内では公安部。

その中でも早苗さんは特別公安で内調は内閣情報調査室・通称サイ
□。

言葉が自然に頭に浮かんでくる。

不安が通りパパからもらった腕時計を無意識に触っていた。

「流石、皇の娘さんだけはああるわね」

「皇つてパパの実家の事？」

「そうよ、そしてあなたは空の忘れ形見でもある」

意味が分からず困惑してしまう。

なんとなくパパと早苗さんが危ない事をしている様な気はしていたけれど、打ち明けられたのは昨日の事で私はママの事を殆ど覚えていない。

パパの実家は武道を継承していた家だつて聞いている。

そんなパパに近づきたくて私は武道に興味を持った。

空手を習いたいとパパに言った時にそれじゃ合気道も一緒に習って御覧と言われた。

『柔よく剛を制す、剛よく柔を断つ』

剛だけでも柔だけでも良くないんだ。バランスが必要なんだよって言われた記憶がある。

そして大変だったけれど不思議な事に嫌いにはならなかった。

自分の力と精神力で立ち向かっていく空手。

相手の力を利用して相手を傷つけず制する事が出来る合気道。

相反する様に見えるけれど時と状況によって使い分ければ絶大な力になる。

不思議な事に私はパパが誰かと闘ったり喧嘩したりしている所を見た事が無い。

でもパパは誰にも負けないと思っている。

そんな事を考えていると早苗さんが私の腕を不思議そうに見ている。

「菜々海、その時計はどうしたの？」

「え、パパからプレゼントだよ。リーナとお揃いなんだ、良いでしょ」

すると鉄の箱中に響き渡るくらい早苗さんがお腹を抱えて笑い出した。

それは傍から見るともう助からない事が判って気が狂ってしまったようにも見える。

「ああ、お腹が痛い。腹の底から笑うってこつ言つ事を言うのね」

「早苗さん、なんだか見ている私の方が怖いよ」

「ゴメン、ゴメン。あの馬鹿男にはどう足掻いても敵わないわね」

「もう、判るように説明してよ」

「菜々海はねリーナの保険なんかじゃないわ。私の保険だったの」
判るようにつて言ったのに早苗さんの言っている意味が理解できなかった。

「まあ、ゆつくりしましょう。どうせ逃げ出せないんだから。そう
だ昔話をしてあげる」

「昔話つて、むかしむかしある所につてやつ？」

「本当に菜々海は感じが良いのだから天然なんだか判らない不思議な子
ね。あなたのパパとママの話よ」

「本当に？」

「ええ、これで最後になるかもしれないしね」

「ぶう、何で考えないようにしていた事を何で言うかな」

「大丈夫よ、大船に乗った気でいなさい。パパが絶対に助けに来る
から」

「つて、もう大きな船に乗っているけどね」

「そうかも」

2人で大笑いした。まるでここが自分の家のリビングの様な気さえ
する。

それは多分、絶対にパパが助けしてくれると信じているから。

ちょうど夏休み前だから今頃かしら。10年以上前の話しよ。

私と空はネットワークにつながれたシステムに侵入するクラッキング
勝負をしていたの。

未だお子様だったのね、調子に乗って馬鹿をやってしまった。

手を出してはいけない裏世界のシステムに侵入してしまいその挙句
に命を狙われる羽目になってしまった。

逃げても逃げても執拗な追っ手はその手を緩める事をしない。

当たり前よね絶対に見られてはいけないものを見られてしまい、そ
れを公表されれば身を亡ぼす事になるのだから。

アパートにも居られなくなり転々と居場所を変えたわ。

でも若かった私達には逃げ切る事なんて到底できなかつた。

潜伏先を突き止められて夜逃げでもする様に着の身着のまま逃げ
だした。

そして捕まってしまったの。

「ママがそんな事をしていたなんて信じられない」

「最初是通过している大学のシステムに面白半分で紹介していたのだけど、そのうちにどこまでなら侵入できるか試したくなったのが発端よ。でも空の腕はそんな物じゃ収まらないほど凄かった。生きていればそれこそ日本のビル・ゲイツだったかもね」

「そうだったんだ。捕まっつてどうなったの？」

「そこで八雲と出会ったの。丁度八雲が16の頃ね」

彼等はその場で事を起こさないのは判っていた。

私達がどこまで情報を掴みファイルの有無を確かめるまでは。

両側から敵つい男に抱えられるようにしていると1人の少年が現れた。

所々無造作に跳ねたクセ毛で何より不思議な瞳の色をしていた。

顔はまだあどけなく彼の言葉が信じられなかった。

「姉さん等あまり良い事はしてなさそうだけど、このおっさん達の方が悪人面だ。助けてやるよ」

恐怖心もあったけどそれよりも他人を巻き込みたくなかった。

少年が私達に背を向けたので立ち去るのだと思っつて安心したら、躊躇いも無く男の顔面に後ろ回し蹴りを叩き込んだ。

不意を突かれた男がよろけると少年は男の足を払い男の後頭部を迷いなくアスファルトに叩きつけた。

あつという間と言うのが本当の話、気が付くと男達はアスファルトに無造作に転がって動かなくなっていた。

その晩はどうする事も出来ず少年のアパートに転がり込んで早朝に出ていこうと思った。

まだ夜が明ける前に空と動き出したら気づかれてしまったの。

「早起きだな、どうせ行く宛てもないんだろ。僕はこれから実家に行くんだ、付いてくればいいよ」

「あなたにこれ以上迷惑をかけるわけには」

「死にたいの。勿体ないなあ、2人とも綺麗なのに」

不思議な感覚だった。全てを見透かされているようで、でも目の前にいるのはまだ幼さの残る少年で。

どうせこれ以上逃げ切れないのは判り切っていたから最後にと思っ
て一緒に行くことを決めたの。

新宿から朝1便の高速バスに乗って4時間弱で長野に着いた。

少し早い昼食をとって市内のバスに乗り換えて更に1時間ほど走る。

「ここって、戸隠じゃない」

「そうだよ、僕の生まれ故郷だよ」

戸隠神社の奥社でバスを降りて参道に向い歩き出した。

道の両側には見事な杉並木があつて程なくすると茅葺の屋根が草に覆われた随神門が見えてくる。

門をくぐると空気が変わった気がして思わず空と顔を見合わせてしまった。

「へえ、2人とも感じが良いんだね。ここから先は結界の中になるからな」

「結界ってあなたは戸隠神社の関係者なの？」

「無縁ではないかな」

しばらく杉並木を歩いていると少年が奥社には向かわず獣道に入っていく。

ここから帰る訳にもいかず付いていくしかない。

山道と言うか道らしき道ではない、そんな道を少年は容易く歩いていく。

「ねえ、未だなの。もう限界よ」

「止まっていると熊に食べられちゃうよ」

参道の途中に熊に注意の看板があり少年の言う事が嘘ではないと思え足を動かし始めた。

次第に標高があがっていくのが判る、夏だと言うのに渡る風が涼しくて心地良い。

すると目の前が開けて山肌へばり付く様に建つ家が見えてきた。

その家はお屋敷と言えば良いのか明らかに民家ではなく道場らしき

建物が奥に見える。

敷地に入ると直ぐにお婆さんが出迎えてくれた。

「こんな山の中まで大変だったでしょ。さあ、中でお休みなさい」

「お邪魔します」

「婆、先に風呂が良いな」

「ちゃんと準備してますよ。それじゃお客様が先ね」

「そうだな、浴衣も頼む」

「はいはい」

まるで少年と同じように全てを見透かされている気がするけど不思議な事に怖くは無かった。

大きなお風呂で汗を流して座敷に案内されると彼は水を浴びたと言いながら笑顔で座っていた。

そして大きな円卓には美味しそうな蕎麦が湯気を立てていた。

「地の蕎麦と山菜しかないけどどうぞ」

「いただきます」

蕎麦の風味が際立っていてどこで食べた蕎麦より美味しくて、山菜も味があつて格別だった。

この家がどういう家なのかは彼が教えてくれた。

伊賀・甲賀と言えば判るかな、僕は忍びの末裔で代々御門の影として暗躍していた一族で人里離れたこの場所であらゆる武術や言葉を習得している。

それ故に流派も無く御門から皇と言う姓を承った。

だから、僕の使う技は全て人を殺める為にある、でもあの男の人達は殺してないよ再起できるかは判らないけどね。

そんな事を普通に喋っている彼はまだどことなく幼さが残る16歳だったわ。

「それがパパとママの出会いだったんだね」

「そう、それが全ての始まりだった。とても楽しかったわ、人生の夏休みと言えば良いかしら。山菜を採ったり魚釣りをしたり。そし

て八雲と空は恋に落ちたの。恋と言うよりは憧れかな」
でも、始まりがあれば終わりが必ず来る。私と空は意を決して表に出る事にした。

取引をして保護してもらう事を決め彼の元を離れる日がやってきた。そしてその日、彼と空は私の知らない処で契りを交わしていたの。2か月間も消息を絶った事で相手の攪乱には成功した。でも、直ぐには表立った行動は出来ない、偽名を名乗って時を待っている間に空は妊娠している事に気付いたの。保護プログラムを受ければ全くの別人として暮らさなければならぬ。

そうすれば彼との繋がりも全て消えてしまう。
空は1人悩み1人で菜々海を育てる事を決めた。

2年が経ち平穏な暮らしが続くと思っていた矢先に私達が潜入した裏世界の人物が逮捕され、過去の事が急浮上した。

空は菜々海と彼との思い出を守る為にあなたを私に預けて1人でアメリカに渡り、連邦捜査局にファイルを渡し裏世界の一部分が崩壊した。

そして空は2度と私と菜々海の前に笑顔で姿を見せる事は無かった。

「それじゃ、パパとママの写真が少ないのは」

「そう、撮れなかったから。万が一それが誰かに見つければ八雲や私達が危険にさらされてしまう。そして2か月と言う僅かな時間だったから」

「それで、パパにお葬式の時初めて出会ったんだ」

「空を日本に連れて帰ってきたのはあなたのパパよ」

「えっ……」

彼は空と別れた後で家を飛び出してアメリカに居たの。

理由は恐らく今の自分では何も守れないと思ったのでしょう。

どう言う経緯であんな所に潜り込んだのか知らないけれど彼はアメリカ軍の特殊部隊に入隊して訓練を受け部隊でも知らない人がいないくらいになっていた。

当然と言えば当然かしらあの若さで想像もつかないくらいの厳しい鍛錬をしてあらゆる武術を体に叩き込まれ色々な国の言葉を習得していたのだから、軍としても利用価値があると見出したのでしよう。そんな彼の耳にグラントキャニオンの谷底で日本人女性の遺体が見つかったと上層部から言われたそうよ。

「どうしてなの？」

「パスポートの名前よ『皇』なんて珍しいからね」

「それじゃ、パパとママが別れの時にした契りって」

「そう、入籍していたの。正直驚いたわ、そんな事をしていたなんて。でもその事で2人は再開する事になった」

「再会なんて、ママは死んじゃったんじゃない。パパは……」

部隊を飛び出し彼は空に再会する事になった。

でも、彼の話ではとても安らかな顔をしていたそうよ。

そして部隊を抜けて彼は空と帰国した。

彼は1人で棺を担ぎ誰にも触らせなかったそうよ、どんなに深く愛してどんなに哀しみに沈んでいたか計り知れない。

そして葬儀の時に菜々海と再会して再び打ちひしがれた。

あなたの存在すら知らされず知らずにいた事を、そして何故空があんなに安らかに眠っていた理由を知る事になる。

「まさか、私を守る為に」

「そう、そして八雲にあなたを託すために」

「でも、パパは」

「菜々海なら耐えられるかしら？ 愛する人との間に授かった子どもが居たなんて、ある時突然告げられて」

「無理、気が狂ってしまうかもしれない」

「八雲は雲の様に突風に吹かれて消えてしまった。でも菜々海を守り育てる為に帰ってきた。何故突然帰ってきたのか理由は判らない。私はあらゆる手段を使って八雲を手元に置き彼の能力を利用して裏の事に引きづり込んだ」

「それは違うと思う。パパは決して打算で何かをする人じゃない。

それに仕事は選んでいたんじゃないの？」

「流石ね、菜々美の言うとおり八雲は少ない情報から何かを知り納得が行かない仕事は絶対にしなかった。結果的にそれが私達の信頼を上げる理由にもなった。八雲が断った仕事のほとんどに裏があつて私達を利用しようとする依頼だったから」

初めてパパとママの話聞いて正直ショックだった。

パパとママと一緒に居たのは2か月だけ、そして再会した時にはママは帰らない人になっていた。

私に言えない事情じゃなくて言えない事だったんだね。

ママは言うなれば犯罪者だったって事でしょ。

情報を盗み結果的に悪い人を退治したかもしれないけれど、それにパパが特殊部隊に居たなんて。

あれ？ 今は違うよね。

どうやって私達を助けに来るの？

「安心しなさい。あなたのパパはプロ中のプロだってあいつを敵に回すと言う事は世界を敵に回すのも同じ事なの」

「世界ってパパはただの人だよ」

「そう思うあなたが最強かもね」

すると天井の大きな扉がスライドを始め、壁にあるパイプから海の水が流れ込んできた。

「ここで始末するつもりね」

「海に落とせばいいのに」

「それだと万が一他の船に見つかる可能性がある。ここで水死に見せか海に捨てれば誰も疑わないし確実だからよ」

上を見ると星が輝いて、男の声が聞こえてくる。

「我らの神に捧げる為に生贄になってもらう。この儀式に同意するか、異議なき時は沈黙を持って答えよ」

怖くて何も言えなかった。早苗さんが震える手で後ろから抱きしめてくれる、その手を握りしめた。

「異議あり！ この箱舟は欲望と偽善に満ちている。地下の亡霊を代表して参上した」

「パパ！」

「菜々海、迎えに来たよ」

パパの声が聞こえてきて私達の前にロープが落ちてきたと思うと黒い影がロープを使ってものすごい速さで降りてきた。

目の前には見た事も無いパパが立っている。

オリブグリーンのズボンに編み上げブーツを履いて服と同系色のヘルメットをかぶり、ベストにはポケットが沢山ついていて良く見ると上着はTシャツみたいだ。

そして革のグローブを嵌めている。

「どうしてここがこんなに早く探知された？」

動揺した男の声が聞こえてくる。

「菜々海の腕時計よね、八雲」

「保険だと言ったはずだ」

そこで初めて早苗さんの言葉を理解した。

私の時計とリーナの時計には恐らく発信機みたいなものが埋め込まれているんだと。

早苗さんがプロなのは相手も知っている筈だから早苗さんの持ち物は全て破棄されてしまった。

でも、子どもの私にはそんな事は関係ないと思ったんだ。

だけど、ここからどうやって脱出するのだろうか。

上からは銃で狙われている、でもパパはたった一言で解決してしまった。

「シュート」

パパの声と同時に突然船の壁を突き抜けて何かが突き刺さり大量の海水が流れ込んできた。

もの凄い衝撃だったけれどパパが支えてくれている。

「八雲、あなた菜々海が居るのに何でミサイルなんて撃ち込ませるの？」

「信管も火薬も入っていない模擬弾だ」

すると銃を構えていた男達が慌てて逃げ出した。

そして銃を乱射するような乾いた連続音が聞こえる。

「こいつ等、棺桶と心中する気だ。逃げる！」

驚いていると急に抱きかかえられ視線が上に移動する。

甲板に出ると数隻の軍艦が貨物船を取り囲んでいた。そして閉じ込められていた貨物船は想像以上に大きく、同じような荷室がいくつもあつた。

パパの仲間が抱きかかえて私と早苗さんを助け出してくれたみたい。

「ありがとう」

「サー」

パパがお礼を言うと兵隊さんが畏まって敬礼をしている。

何だか普段のパパにはあり得ない事だから私の方が照れてしまう。

「パパ」

「菜々海、怖い思いをさせてごめんね」

「平気だよ、だってパパが必ず助けてくれるって信じてたもん」

「ありがとう」

そう言つてパパがデコチューしてくれる。

「美咲、菜々美を」

「パパは」

「害虫を退治してくるからね」

そう言つてパパが歩いていく先の荷室の上に飛行機が舞降りてくる。見た事も無い戦闘機だった。

私知っているのはテレビで何度か見た事があるF-14やハリアイで、この飛行機は初めてだった。

「あなた最新鋭のF-35まで持ち出して何を考えているの？」

「動いてもらつて対価だよ。実践に向けた小テストだ。2人も直ぐに移動して」

パパが戦闘機に乗り込むとコクピットの後にあるハッチが大きく開き、後方にあるジェットノ吹き出し口の下にあるハッチも開きター

ピン音がし始める。

すると直ぐに垂直に離陸していく、パパが操縦しているなんて信じられなかった。

そして貨物船から猛スピードで高速艇が離れていく。

高速艇には私と早苗さんを拉致した犯人が乗り逃げ出したのだろう。周りの軍艦は全く動きを見せなかった。

すると戦闘機からまるで連射の花火の様に高速艇に向けて弾が打ち出され高速艇から火が上がった。

「うわあ、沈没しちゃうよ」

「大丈夫よ、エンジンを狙って航行不能にただけよ」

何かの発射音が聞こえて戦闘機を見ると遙か彼方に向かってミサイルが飛んでくのが見え、次の瞬間に大きな爆発音と共に高速艇なんて目じゃない位の火柱が上がった。

「何が爆発したの？」

「恐らく連中の母船でしょ。この船の事を棺桶だと言っていたから証拠隠滅の為に沈める気でいたんでしょ。あの高速艇じゃ陸までたどり着けないからね」

「それじゃ、あの人たちは捕まっちゃうの？」

「放置じゃないかしら。可哀想なんて情けは無用よ。あいつ等はテロリストなんだから。さあ、行きましょ」

「う、うん。でも早苗さんここは日本の近海なんでしょ」

「それも問題無いわよ。もしテロリストが日本に潜入していたなんてニュースになったらどうなると思う？」

「うわ、怖すぎる。パニックになるかも」

「でしょ。だから日本は無関係でありたい。そしてアメリカはテロの殲滅を狙っている。両国の思惑は一致しているわけ」

「だから放置……」

それを裏付ける様に私達を出迎えてくれたのは海上自衛隊の飛行艇だった。

ネイビーブルーの機体でUS 2つて言うんだって早苗さんが教えてくれた。

翼に4基のプロペラをつけた世界最高性能の水陸両用の飛行艇らしい。

パパが乗り込んだ戦闘機はF 35ライトニング？と言う戦闘機で、通常型・艦載型と短距離・垂直離着陸型の3タイプがあるステルス機だって教えてくれた。

飛行艇で東京に戻るまでに早苗さんは色々な事を教えてくれた。

「でも、パパは特殊部隊を辞めたんじゃないの？」

「辞めてはいないわね。辞めさせてくれないが正しいかも。これはトップシークレットになっているけど。空には相方が居た事を軍の上層部は知っていて今は伝説とまで言われた男と組んで仕事をしている。菜々海ならどうする」

「Give and Takeだ」

「そう言う事よ。繋がりを持ち続けていれば情報や力の貸し借りが出来る。その方が双方にとって最良な事なの。今回の事で言えば八雲に力を貸すことでアメリカはテロの一部を殲滅する事が出来た。それを軍の手柄だと公表すれば良いだけの事。日本は黙って手を貸せば何も問題が起らないし自らの手を汚さなくて済む」

「今までもこんな事が遭ったの？」

「あのね、菜々美。こんな事が何度もあつたら私の身が持たないわよ。あなたのパパとつくりが違うのよ」

パパは子どもの頃から2000メートル級の山々を遊び場に走り回っていて、鍛錬によって類稀な能力を発揮できるようになったらしい。

私はパパが誰かと闘っている所なんて一度も見た事が無いからそんな能力は知らない。

だって私の前では私が居ないと何も出来ない人なんだもん。

それとリーナの事は教えてくれなかった。

『私はパパとママの話を教えると言っただけよ。守秘義務があるの』

の一点張りでもうしても聞く事が出来なかった。

自宅にたどり着いたのは夜明け前だった。

何だか凄く家を空けていた気がする、ほんの僅かなのに。

そして今日が終業式当日だと言う事に気づいてしまった。

「少しだけ横になって学校には行きなさい、八雲に借りを作るなんて真つ平御免だから八雲が戻るまで私がここに居るから」

「本当に一緒に居てくれるの」

「当たり前でしょ。拉致られたばかりの女の子を独りになんてしないわよ」

「ありがとう」

そして少しだけ横になって早苗さんの車で可奈を途中で拾って学校まで送ってもらった事になった。

早苗さんの車はパパがリーナを成田まで連れて行った白い車だった。

「可愛いでしょ。ファイアット500よ」

「可愛いけど、早苗さんの事だから仕掛けがしてあるんじゃないの？」

「あら、随分な事を言うのね。どこぞの大泥棒みたいにスーパーチャージャーなんて積んでないわよ」

「意味が分からないよ」

「行きましようか、お姫様」

「うん！」

確かにエンジンは弄っていないけれど車が喋るとは思わなかった。

何でもアルっていうコンピュータらしい。

可奈をピックアップして学校まで送ってもらった。

車の中では何も言わなかった可奈が学校に着いた途端に豹変した。

「菜々海、私に何か言う事は無い？」

「え、そうそう。リーナが急用で帰国しちゃったんだよね」

「ええ！ それ本当なの？」

可奈の言わんとしている事を外してしまっただけみたい。

驚いているけれど直ぐに両手を腰に当てて私を睨みつけた。

「そうじゃなくて何度携帯に連絡しても音沙汰無しってどういう事なのかって事よ」

「あっ……」

そこで私は携帯を破棄されてしまった事を思いだした。

「ゴメン、パパとリーナで海に行つて海で水没させちゃって帰ってきたばかりで今は携帯が無いんだよ」

「なんだ、そうなんだ。私はてっきり菜々海とリーナが拉致されて監禁されてるのかと思っちゃったよ」

可奈が知る筈もないのに驚いてしまう。

「あはは、そんな筈ないじゃない。令嬢のリーナなら判るけど何で私まで」

「ええ、菜々美も結構いけると思うし現に人気があるじゃん。色んな意味で」

色んな意味は余計だ。

とりあえず誤魔化すけど可奈には嘘は付いていない。

海に行っていたのも事実だし、海で携帯をロストしたのも本当だ。

だってあの場所で携帯を破棄するなら海の中しか考えられない。

确实だし絶対に見つかりっこないもの。

それに海から帰ってきたばかりも本当の事だしね。

可奈に本当の事を話しても夢でも見たんじゃないで済まされてしまうと思う。

現に体験した私自身が夢のようだったから。

家に帰って携帯の事を早苗さんに話すとどれでも好きな物を使いなさいって、テーブルの上に色んな携帯が山積みになっていた。

「これってどれでもいいの？」

「もちろん。だって全ての携帯は菜々海が使っていたのと同じ状態にしてあるから」

凄い事を普通に喋っている早苗さんが信じられなかった。

で、携帯を片っ端から見てみるとアドレスから履歴まで全てコピー

されていた。

でも、もう驚かない。

パパや早苗さんの世界では当たり前なのかもしれない。

唯一の救いは菜々海と八雲の携帯だけよと早苗さんが言ってくれた事だった。

早くパパが帰ってこないかなあ。

ママの話を一杯パパに聞いてみたかった。

何処

あつという間に夏休みが終わってしまった。

パパは何事も無かったかの様に毎日仕事に行き家では相変わらずで、リーナの事なんか忘れてしまったかの様だった。

でも、それが本当なのかもしれない。

だってパパはそうやって今まで過ごしてきたのだから。

誰にも言えない事をやり遂げ次のミッションにつく、色々な人と出会い危険な目に遭っても何とか切り抜けてきたのだから。

でも、何も知らなかった私は違う。

リーナと出会えい。

パパの事、そしてママの事を知ってしまった。

パパはこれからも独りで歩き続けるのかな、私に好きな人が出来て結婚してパパと離れても。

そんな事を考えると胸が締め付けられて涙が出てくる。

「菜々海、大丈夫？ リーナさんが帰ってしまったてからずっとそんなでしょ」

「だって、パパが」

「はあ、パパさんには難関かなあ」

「そんな事ないもん。パパは凄く格好良いんだから」

「会いに行けばいいじゃん」

「可奈、実はね事情があつてリーナが何処に住んでいるか知らないの」

「えっ、でも」

「パパは多分……知らないかも」

それは推測にしか過ぎないけれど早苗さんの話ではパパはリーナが何処かの令嬢としか知らされていない。

それに裏の仕事では不用意に対象者に踏み込まずミッションをコン

ブリートさせるだけ。

今回ならリーナを2週間保護して依頼人に空港で引き渡して終わり、結果から言うと1週間だったけど。

感情なんて何処にも無く。

冷徹に完璧にクリアーすれば良い。

ただそれだけ？

本当に？

私はそんなの絶対に嫌だ。

何だか怒りが沸々と湧き上がってくる。

「もうすぐ秋の連休なのにね。何がシルバーウィークよ、まるで年寄りみたいじゃない」

「私、パパに自分の気持ちをぶつけて実力行使に出る」

「菜々海が本気になったらパパさんが可哀想だよ」

「駄目、もう引き下がれないもん」

パパが今日は定時で帰ってくるって朝言っていた。

何からぶちまけようかと頭の中を整理しながら急いで家に向かう。

ドアを開けるとパパの革靴がある、勢いに任せてパパを呼ぶ。

「パパ、何処にいるの！」

「ただいまじゃないの？」

2階からパパの声がして階段を駆け上がってパパの部屋のドアを勢いよく開けた。

「パパ！」

「どうしたのそんな顔をして」

「へえ、何をしているの？」

パパは自分の部屋で出かける準備をしている。

それも1泊や2泊じゃないのは一見して判る、今までもこんな事があった。

パパがしばらく家を空ける時と同じ準備だ。

一瞬で頭が真っ白になった。

「何処に行くの？」

「菜々海も準備して少し寒い地方だからそれなりにね」

「う、うん。判った」

「明日の朝は早いから急いでね」

パパの言葉に押し出されるように私は自分の部屋に向い準備を始める。

何だか勢いを根こそぎ削がれてしまった。

「パパ、電車なの？」

「飛行機だよ」

ため息を付きながらも手を止めない。

2泊以上なら3泊以上の荷物を持たない。

飛行機なら必ずサンダルかスリッパを持つ。

荷物は出来るだけコンパクトに。

旅行する時のパッキングはパパ仕込みだ。

寒い所に行くならやっぱりダウンジャケットだよね。

かさ張る様に思つかもしれないけれど圧縮袋を使えばコンパクトになる。

逆に言えば圧縮袋を上手に使えばかさ張る衣類も持ち出せると言う事、まあ多少その分重くなることは覚悟の上だけど。

でも、何処に行くんだろう。

その日の夕食は冷蔵庫の片づけも兼ねて有り合わせの物で簡単に済ませた。

温泉

「ここって何処？」

それが思わず漏れた第一声だった。

翌日、パパに起こされて着替えを済ませると直ぐにタクシーが迎えに来た。

タクシーに乗ると直ぐに高速に乗って、着いた先は成田空港だった。

「パパ、何処に行くの？」

「温泉だよ」

寝ぼけていた頭がパパの一言で何処かに吹き飛んで真っ白になった。その後でパパに言われるまま軽く食事を済ませ機上の人となった。

「パパ、何時ごろに着くの？」

「15時過ぎだよ」

「なんだ、4時間くらいか」

「時差が8時間あるからね」

「……12時間って」

思わず気を失う寸前になる。

今、目の前にはあり得ない風景が広がっている。

物語に出てくるような西洋建築の建物が並び、まるで中世にタイムスリップしたみたいだった。

「ここって何処？」

「スイスのチューリッヒだよ。ヨーロッパ有数の世界都市だね。今日は移動で疲れたでしょ、ホテルでゆっくりしよう」

夢なら覚めて欲しい。

何処の世界に温泉に行くと行ってスイスなんか連れて来る人がいるのだろうか……

でも、これは現実で夢じゃない。

訳が分からずその日はホテルで休むしかなかった。

翌日はお伽話に出てくるような町に来ていた。

「パパ、ここは？」

「バーデンと言う町だよ」

「これから何処に行くの？」

「10分ほど歩くからね」

何でもここはスイスでも最も綺麗な旧市街の一つなんて呼ばれているんだって。

でも中心街とは逆の方に向かって歩き始める。

パパに連れられて歩いていくと川の両側に童話に出てきそうな可愛い建物が並んでいて、あれは殆どがホテルだって教えてくれた。でも、日本でもこれと同じ風景を見たことがあるような気がする。

持ってきたデジカメで写真を撮りまくるとパパは何だか嬉しそうしていた。

因みにパパは背広姿じゃない。

ジーンズにトレッキングシューズで明るい黄土色のフード付のダウンジャケットを着ている、フードにはファーが付いていた。

私はパパとお揃いの様なフードにファーが付いているワインレットのダウンコートを着て、中にはワンピースにレギンスでパパと色違いのトレッキングシューズを履いている。

程なくすると看板が見えてきた。

パパの後をついていくと聞いた事のない言葉でパパがカウンターにいるスタッフの人と話しているドイツ語みだった。

そして更衣室に連れて行かれてしまった。

「菜々海、これに着替えて」

「へえ？、これって水着？」

「それじゃ着替えたら待っていてね」

意味が分からないまま個別の更衣室でパパから受け取った水着に着替えてロッカーに洋服を突っ込む。

更衣室から出るとパパも水着に着替えて待っていた。

「パパ……」

「行くよ」

「もう、行くよって何処に？」

「あれ？ 菜々海にはちゃんと言ったはずだよ『温泉に行く』って」

「ええ、ここが温泉なの？」

「そうだよ。バーテンってドイツ語で温泉って意味なんだよ」

スイスの温泉は室内プールの様な温泉だった。

隅っこにジャグジーがあるけれど、もしなければただの25メートルプールと変わらない。

お湯も温くて温泉って感じじゃないけれど微かに鉱物ぽい感じがする。

パパに『鬼怒川に似ているね』って言ったら残念そうな顔をしていた。

温泉を出てから外はサクツとしていて中がモチモチの甘いスペインパンを食べながら旧市街を散策してチューリッヒのホテルに戻った。

翌日からはスイスを満喫した。温泉に入ったら細かい事はどうでも良くなっちゃった。

チューリッヒ中央駅から2階建ての列車に乗る。

車内はとてもゆったりと作られていてシートも座り心地が満点だった。

乗り換えをして3時間ほどでサンモリッツという町に着いた。

この町はまるで小さい頃にDVDで見た『ハイジ』の世界だった。

世界中のセレブが集まる高級マウンテンリゾートなんだってパパが教えてくれた。

サンモリッツでも温泉に入る。

ここの温泉もやっぱりプールみたいだったけれど温度が高く気持ちよかった。

やっぱり温泉はこっじゃなきゃね。

でも、不満と言えば水着で入ってシャワーを浴びて出てくることかな。
バーテンでもそうだったけれど温泉を出ると直ぐにスタッフがフカフカのタオルを頭に掛けてくれる。
それだけは何だか嬉しかった。

ハイジの舞台になったマイエンフェルトではペーターの小屋やアルムの山小屋なんかがあってハイジ村にはハイジ記念館まであるんだよ。

流石に日本人観光客が多かったけれどね。

スイスは治安も良くて良い人ばかりで景色は綺麗だし空気は澄んでいるし文句のつけようがなくて最高って感じ。

あまりにも楽しくって気が付くとスイスに来て数日が過ぎていた。

パパは本当に温泉に入りたスイスまで来たみたい。

その日は列車に乗ってマイエンフェルトから10分くらいのサンヴァイスと言う駅の駅前にある小さなホテルに泊まった。

スイスに来て嬉しい事がもう一つ、パパが私を決して子ども扱いはない事。

それは普段からそうなんだけれど日本ではお酒を飲ませてくれた事がない。

でもスイスに来てからは色々なワインを少しだけだけど飲ませてくれる。

ワインも料理もとても美味しい。

ラクレットは半切の大きな円盤型のチーズの表面をとかし茹でたポテトにつけて食べる郷土料理で、ドイツ語圏の為にジャガイモ料理やソーセージを使った料理が多い。

中でも牛肉の塊を乾燥させて作ったピュンドナーフライシュと言う保存食なんだけれどこれが赤ワインに良く合って美味しかった。

それ以外にも湖で取れるペルシュと言う魚料理なんかも絶品でスイスの観光地は体育系の場所が多い所為かいくらでも食べられちゃう

んだよ。

ヴァレンシュタイン公園

翌朝は、そんな楽しい雰囲気はどこかに吹き飛んでしまった様だった。

目を覚ますと朝だと言うのに駅前が騒がしい。

泊まっているホテルの2階の窓から見ると駅前が何か大きな事件でも遭ったかのように騒然としていた。

黒っぽいスーツ姿の男性が何人も何かを探して通りかかる人を捕まえては何かを話している。

そんなスーツ姿より目立つのが馬に乗った綺麗な青いマントを羽織った騎士の格好をした人がいる。

騎士の腰の辺りからサーベルみたいな剣が見える、あれは間違いなく真剣だと思う。

一体何があったのだろうか、そんな事を考えていると後ろからパパの声がした。

「菜々海、おはよう。着替えて出かけるよ」

「うん、パパ……」

振り向いた瞬間に鼓動が飛び跳ねる。

ダークな色合いの三つ揃えのスーツを着て目の覚めるような深いブルーのネクタイを締めていて、胸元にはネクタイと同じ色のチーフが覗いている。

そして何より驚いたのは普段は鬱陶しく見える髪の毛を後ろに流し、吸い込まれそうな琥珀色の瞳で真っ直ぐに私を見ている。

その瞳には諦めともとれる決意の色が見える。

パパが私に差し出したハンガーには高校の制服が掛っていた。

疑問に感じるけれど聞ける雰囲気じゃなく制服に着替えて青いリボンを胸元に結ぶ。

「パパ、着替えたよ」

「判った、コートはこれを着て」

それはシンプルな黒いステンカラーのコートでカシミアか何かだろうが重厚に見えるけれどとても軽く暖かった。

パパはコートを羽織らずに腕にかけている。

そして1階に降りてフロントに荷物を預け花束を受け取っていたフロントに支払いをしているとフロントのおじさんが驚いた顔をしていた。

パパが笑顔で何かを言うとフロントのおじさんが満面の笑顔になって手を振ってくれた。

愛おしそうにパパが青い花の花束を見ている。

「パパ、なんの花なの？」

「薔薇だよ」

パパの言葉に息をのんだ。

だって青い薔薇なんて聞いた事も見た事も無かった。

パパと連れだって表に出ると騒然としていた駅前が一瞬だけ静かになり駅前に居た男の人たちの視線が突き刺さり後ずさりしそうになる。

するとパパが微笑んで左腕を腰に当てると思わずパパの腕にしがみついた。

パパが懐から白い封筒の招待状の様な物を取り出すと1人の男の人が近づいてきて封筒の中を確認している。

直ぐに男の人が周りに合図を送ると馬に乗った騎士達が一目散に駆け出した。

パパと私の前にはクラシックな大きな黒塗りのリムジンが現れ、男の人がドアを開けようとするのを制してパパがドアを開けて私をエスコートしてくれる。

パパが車に乗り込むと静かに走り出した。

しばらく走るとライン川だろうか川を越えたところに標識が立っている。

「パパ、何処に行くの？」

「ん？ ヴァレンシュタイン公国だよ」

「ヴァレンシュタイン公国？ そんな国は聞いた事がないよ」

「小豆島くらいの大きさの小さな国だからね。でも国連加盟の独立国なんだよ」

「そうなんだ」

窓の外は綺麗な景色が流れている。

しばらくすると目の前の山の上に写真でしか見た事がない様なお城が見えてきた。

紅葉している深い森の中から白亜の城が天に向かって建っている。

鋭い円錐形の屋根は青空より濃い青でとても幻想的だった。

お城の裾野にある町はとても賑やかでお祭りだろつか朝だと言うのにオープンカフェでは酒盛りが始まっている。

車は山道をしばらく走り大きな門をくぐると門は閉ざされてしまった。

執事みたいな人に案内されて今は豪華な装飾が施された部屋に居た。何が起きているのか全く理解できない。

そしてスイスに来て不思議に感じていた事をパパに聞いてみた。

「パパ、スイスに来たの初めてじゃないよね」

「うん、まあね」

「曖昧な返事だな、仕事で来たの？」

「仕事じゃないよ、風に吹かれるまま放浪している時にね」

「なんだ、やつぱり来た事があるんだ。やけに詳しいなと思って、

チューリッヒのあんな大きな駅でも迷うことが無かったし」

他にも不思議な事がいくつかあったけれどそれはもういいや。

いつもよりパパの荷物が多かったのは私の制服やコートを持っていった訳だし。

スイスに来てからパパは携帯を一度も私の前で見ていない。

多分、OFFにしているのだと想像がつく。

理由なんて簡単、早苗さんを何故だか避けているからかな。そんな事をしていると部屋に案内してくれた執事さんがドアをノックして現れた。

「お時間です。こちらへどうぞ」

執事さんは驚いた事に英語だった。彼の後についてお城の中を移動する。

しばらくすると華やかな人で溢れ返っている大ホールに案内された。天井からは大きなシャンデリアが何基も釣り下がっていて天窓には色とりどりのステンドグラスがはめ込まれている。

部屋の大部分は綺麗な大理石で造られていて床は寄木細工のようになっていて磨き上げられている。

そして天井からは騎士のマントと同じ色の旗が何本も飾られ、旗の真ん中には金糸の刺繍で大きな角を持った山羊の紋章があり金の房で旗の周りが縁どられている。

部屋の奥まった所には玉座がありその壁にも旗と同じ紋章があった。パパが謁見の間だねって独り言の様に言っていた。すると、ざわついていた人々が急に静かになった。

何かが始まるみたいだ。

「パパ、何が始まるの？」

「ヴァレンシュタイン公国の建国の儀だよ。この国では青は正義の象徴なんだ」

「それで、町中がお祭り騒ぎだったんだ」

そこで新しい疑問が浮かぶ。

何でパパがここに招待されたんだろう。

その疑問は直ぐに判明した。

祝辞を受けているヴァレンシュタイン大公は濃紺に金糸で縁どられた軍服みたい洋服を着て青いネクタイを締めている。

威厳があり近寄りたがいけれど優しそうな瞳をしている。

歳は50代後半か60代くらいに見える。

「リーナの母上は10年前に亡くなられているんだ」
「り、リーナ？」

大公の横には妃ではなくアクアマリンの様な色のシンプルなドレスを着て頭にティアラをつけているリーナの姿が目に見え、驚きのあまりに全身から力が抜けそうになるとパパが支えてくれた。

「リーナはね。皇女つまりプリンセスなんだよ。彼女の名前はリーナ デイ ヴァレンシュタイン。リーナ姫と呼んだ方がいいかな」
「そんな、リーナがお姫様だったなんて」

建国の儀は式次に従い進んでいく。

今は大公がドイツ語で何かを喋っているけれど私には理解できない。パパが私をここに連れてきた理由はリーナに私の無事な姿を見せる為で、多分だけどリーナがパパを招待したんだと思う。

だってパパの口調だとパパはリーナが皇女だって知っている風だった。

でもいつから？ まさか……最初から判っていて……

「遠いな、少し前の方にこう」

「う、うん」

なんだか気後れしてしまう。

周りには着飾った来賓の人ばかりで女の人はフォーマルなドレスに身を包み煌びやかで、男の人はタキシードや国の民族衣装みたいな服を着ている人もいる。

そうかあれがあの人たちの国の正装なんだ、だからパパは私に制服を着せたんだ。

学生の正装は制服だもんね。

それに着慣れないロングドレスなんて様にならないし多分躓いてパパに恥をかかせるだけだもん。

そう思うと何だか背筋が自然に伸びた。

玉座が良く見える所まで近づくと各国の記者だろうか大公やリーナに話をしているのが見える。

「菜々海、手を振ってごらん」

「うん」

こんな場所で手を上げて手を振る訳にもいかず肩の辺りで手を振るとリーナが気づいて嬉しそうに微笑んで手を振り返してくれた。

すると一斉にフラッシュが瞬く。

まるでミッションが終了したことを報告するようにパパを見るとリーナに向かって真っ直ぐに会釈をしている。

直ぐにリーナは笑顔に戻ったけれど私は見逃さなかった。

切なそうに歯を噛み締めた顔を。

そんなリーナの顔を見ただけで痛いほどリーナの気持ちかわかる。

「菜々海、これをリーナに渡して来て」

「えっ」

パパが内ポケットから白いハンカチに包まれた物を取り出し青い薔薇の花束と一緒に差し出した。

ハンカチの中身は直ぐに思い出が沢山詰まっている写真だって気づいた。

「うん、判った」

パパに笑顔で答え、着飾っている人たちの間をすり抜け玉座に近くと近くにいた記者が怪訝そうな顔をするけれどそんな事は構わずにリーナに向い声を掛ける。

「リーナ姫、これをどうぞ」

「ありがとう」

再びフラッシュが瞬く。

何処かの国の女の子がお姫様に花束とプレゼントを渡したと思ったのだろう。

ちよっぴり恥ずかしくって直ぐにパパの傍に戻った。

すると司会役を務めていた側近の人が何かを言っている。

多分、閉会をしようとしているのだろう。

すると私にも判る英語が記者席から聞こえてきた。

「最後にひとつだけ。プリンセス、今まで来訪された国で最も印象

に残った国は何処ですか？」

「何処の国も魅力的で……」

質問に対しての受け答えは当たり前障りの無い様に前もって準備されているんだと思う。

他の質問に対してリーナは笑顔で即答していた。

でも、最後の質問だけは違った。

間が開き周りがざわめき始める。

リーナが視線を落としハンカチの中に目をやると凜とした表情になり満面の笑顔で答えた。

「日本です。私は日本での思い出を一生大切にしていきたいと思いません」

英語の質問に対しリーナが日本語で答えた為にどよめき上がる。

それを打ち消すように私のすぐ横から拍手が聞こえる。

すると大きな謁見の間が拍手に包みこまれた。

側近に促され大公が謁見の間を後にし、リーナも大公に続く。

リーナの瞳に光っていた涙にパパは気づいたのだろうか？

パパを見ると大きく息をついて私をエスコートして出口に向かう。

振り返ると何もかもが終わったかのように玉座は静まり返っている。

パパの顔には全てをやり終え安堵したような顔に見えた。

「パパ、聞き忘れたけれど青がこの国の正義の象徴なら青い薔薇の花言葉って何なの？」

「不可能・あり得ない事かな」

まるでそれはパパとリーナの事を言っている様だった。

ハーン

ミッション終了なんだよね、多分。

まあ、日本に帰るまでがミッションなんだけどもう問題は起こらない。

建国の儀も滞りなく終わり、記者がした最後の質問に対するリーナの答えには驚いたけれど、パパの中では踏ん切りがついているのかもしれない。

今はパパに何も言わないけれど宿に帰れば質問攻めだからね。

そんな事を考えながら石畳の広場に出るとヴァレンシュタインの騎士隊に取り囲まれてしまった。

ヴァレンシュタイン公国に軍隊はなく警察と城を守る精鋭の騎士隊があるって、さっき見つけた薄っぺらのガイドブックに書いてあった。

一般の人はお城の中には入れないけれど一部が観光客向けに公開されているんだと思う。

白いシャツの上に詰襟の様な目の覚めるブルーの燕尾服を着て馬に乗る為にグレーのスリムなパンツに茶色いブーツを履いて腰には剣を帯刀している。

近くにいた来賓の人達は驚きながらも遠巻きに様子をうかがっている。

するとリーナに良く似た男の人が一步前に出た。

栗毛色の長い髪を一つに纏め、瞳の色はリーナと同じグリーンだった。

背格好もリーナとそんなに変わらない、この人の方が少し背が高いかな。

「私は騎士隊・隊長のライナ。貴様をこのまま返す訳にいかない」

「全て終わったんだ、構わないでくれ」

パパはそう言うけれど通してくれそうにない。

少しだけ怖いけれどパパが居るから安心できる、少し怖いのはパパが怪我をしないかが心配なだけ。

「菜々海、後ろに下がっていなさい」

そうパパに言われてパパから少しだけ離れる。

パパが私に気を取られた瞬間にライナが細身の剣を突き出した。

するとパパの頬が僅かに切れて血が滲みだした。

瞬時にパパの周りの空気が変わった。

まるで巨大な冷凍庫を開けた様に一気に冷気が噴出した様だった。

「相手をしてやる！」

初めてこんなパパを見た。

冷静さを欠いていると言うか、まるで自分の思い通りにならない子どもがイライラして癩癩を起しているようだ。

もしかして、自分の気持ちに気づいていて……

パパがいきなり靴と靴下を脱いで放り出し裸足になった。

上着とベストも脱ぎ散らかすように放り投げる。

青いパパのネクタイが空に舞うとそれが合図か何かの様に空気が張り詰める。

パパは半身の構えをしている。

慌ててパパが投げ捨てた洋服や靴をかき集めて後ろに下がろうとして誰かにぶつかってしまった。

「ごめんなさい。つてお姫様！」

「菜々海にそんな呼ばれ方をしたら傷付くよ」

「り、リーナ。ごめん」

私の後ろに立っていたのはティアラを外しただけの青いドレスを着たリーナだった。

「紹介するね。私のパパだよ」

「うわあ。ヴァレンシュタイン大公？」

「おや、彼の娘さんでも緊張するのかな？」

「もう、私は何処にでもいる普通の女子高生です」

リーナの横には式典の格好のままのリーナのパパのヴァレンシユタイン大公が立っていた。

近くで見るとやっぱり凄く優しそう。優しく無い訳がないよね、リーナを見ていれば良く判る。

「でも、止めないよ」

「ライナには良い薬だ」

「に、日本語？」

ヴァレンシユタイン大公が日本語を話しているのに驚いてしまった。

「大丈夫かな、リーナ」

「八雲の事は菜々海が一番よく知っている筈でしょ」

「でもね。売られた喧嘩を買うパパなんて初めてだし喧嘩をするパパなんて見たの初めてだから」

「そっか、八雲も普通の人なんだよ。完璧な人間なんてつまらないもの」

リーナが後ろから優しく抱きしめてくれる。

凄く良い匂いがして柔らかくてとても気分が落ち着く、ママに抱かれた記憶があまりない私にとってこれがママに抱かれている感じのようになって思った。

もし、もしもだよ。

パパとリーナが結婚したら私のママになるんだよね、どう見ても姉妹にしかみえないけど。

でも、それは夢の様な話なんだろうな。

リーナはプリンセスでパパは裏の世界では名が知れているけれど一般ピープルだもんね。

住む世界が……

だからパパは……

青い薔薇を？

私まで落ち込みそうになる。

「我が国の騎士隊も形無しだな。丸腰の男一人に多勢とは貴様らしくても騎士か！」

大公の言葉にライナの顔が引き攣っている。すると大公が執事に声を掛けた。

「アルフォンス、彼に太刀を」

「畏まりました。八雲殿こちらを」

「日本の帝から頂いた太刀『一字』だ。遠慮なく使え」

パパが呆れ顔で執事から刀を受け取り鞘から抜いた。

日本でも見た事の無い様な立派な太刀だった。

大公の言葉を聞きパパは太刀を鞘に納め左手に持ち腰の位置に刀を当て親指で鐙を少しだけ押上げ、腰を沈め右手を柄の部分に添えて騎士達に向き合っている。

1人の騎士がライナの持つているサーベルより装飾が少ないサーベルでパパに向かってきた。

騎士がサーベルを突き出し瞬間にパパの体が揺らいだ様に見えた。

パパの姿を見失い騎士が剣を横に払った。

次の瞬間、騎士は驚いた様な表情をしてから石畳に崩れ落ちた。

「今の何？ まるでパパが消えたみたいだった」

次に向かってきた騎士も同様に石畳に崩れ落ちる。

すると今度は剣を使わずに体術でパパを組み伏せようとする。

騎士の体が宙を舞い石畳に叩きつけられた。

「柔よく剛を制する。合気道だ」

「刀を抜かせる事も出来ないとは力量の差が出たな」

パパは左手で刀を腰に当てたまま一度も抜いていない右手だけで騎士を倒し投げ飛ばしている。

騎士としてのプライドを傷つけられてライナが苦虫を噛み潰した様な顔になっている。

それでもライナはパパに向かった。

「やはり、その腰の日本の刀はお飾りか？」

するとパパがより深く腰を沈めた。

「菜々海、あの構えは何？」

「あれは抜刀術だよ。でもパパの使う術はすべて裏の物だから何処の流派にも属さない云わば人殺しの為の術なの」

パパが目を瞑り大きく息を吸い深呼吸をしている。

リーナが私を抱きしめている手に力が入った。

そしてパパが目を開いた瞬間にパパはリーナではなく広場にある丸い電燈が上に付いている石柱に向い一気に間合いを詰めて抜刀して刀を振り上げた。

刀を振り下ろしパパが鞘に納めると石柱はまるで藁の束を切ったように斜めに切れて崩れ落ちた。

「勝負ありだな」

リーナは我に返り悔しそうな顔をして左手で束ねた髪を鷲掴みにして右手に持つサーベルを頭の後ろに回して髪の毛を切り取ってしまった。

「リーナ、あなた」

リーナを一瞥してリーナは城内に歩いて行ってしまった。

「菜々海、帰るぞ。とんだ茶番だ」

「ええ、パパ待ってよ」

パパは天皇から頂いたと言っ『一文字』を執事に放り投げて裸足のまま歩き出した。

可哀想に執事は必死な形相で刀をキャッチしてほっと胸を撫で下ろしている。

「ミスター八雲。まだリーナを護衛してくれた礼をしていないのだが」

「無用だ、頂く物は頂いた」

すると後ろから犬の吠える声が聞こえる。

黒い大きな影が宙を駆けパパに飛び掛かりパパをなぎ倒した。

「うわあ」

真っ黒な毛の長い大きな犬がパパの肩を前足で抑え込みながらパパの顔を舐めまくっている。

パパは必死になって犬の下あごを持ち上げようとするが犬が首を振ってパパの手を掻い潜りパパの顔を舐めまわした。

「止めるって、ハーン。判ったから」

「えっ、どうして名前を……」

私の後ろでリーナが動揺している。

それを知ってか大公がパパに声を掛けた。

「その格好で町に帰せば皆に私が笑われる。直に日も暮れよう何も構えぬが城でゆっくりしたらどうだ」

「くそ！ 好きにしろ」

パパは観念したみたい。

不機嫌そうに執事に案内されて城内に入っていくパパの後を追いかけた。

ハーンと言う黒い犬は嬉しそうに尻尾を振ってパパの後ろから離れなかった。

青と雲

その夜は結局、お城に止まる事になったの。
本当にお城の中なんてお伽話の世界みたいだった。

案内された部屋の中は豪華絢爛とまではいかないけれどそれなりに
装飾が施されていてベッドにはお姫様が寝るみたいな天蓋までついでいた。

それでも落ち着いた造りになっていて立派な暖炉なんかがあって一言で言えば素敵って感じかな。

可奈に見せたら『ロマンチック』なんて言っただけの瞳になっちゃうんだろうな。

不思議な事に駅前のホテルに預けたはずの荷物が部屋に運び込まれていて、パパはお風呂に入って直ぐに城下の町にワインを飲みに行っちゃったんだ。

世話係の人がワインなら直ぐに準備するって言ったのに、こんな所に居たら息が詰まるって。

本当にパパは名前の通り雲みたいに自由人なんだから。

一人でベッドに寝転んでゴロゴロしているとドアをノックする音が聞こえた。

「誰？」

「私。リーナだよ。入っても良い？」

「リーナ？ どうぞ」

ドアが開いて現れたリーナはライムグリーンのチュニックワンピースにジーンズという、東京に居た時とあまり変わらない格好をしていた。
「リーナどうしたの？」

「ハーンを探していたの。見つからなくて」

「あのワンちゃんなら多分パパと一緒にだよ。部屋の前でずっと座っていたもん。凄くお利口さんのワンちゃんだね」

「うん。確かにハーンは1度会った事がある人の顔は忘れないけれど、あんなに嬉しそうに誰かにじゃれているのを初めて見たの。ハーンは決して私とパパ以外にはあんな事をする子じゃないの」

「そうだ。リーナに聞いていい？ どうしてリーナはそんなに日本語が上手なの？ それに日本の事が大好きみたいだし。やっぱり大公の影響なの？」

「違うよ。パパは私達に何かを教えるような事は決してしないもの。自主性を尊重して自分達から動かないと身に付かないって言うのがパパの教育本心で考えなの」

「それじゃ自分から」

「うん。きっかけはハーンとの出会いも一緒だったの。あれはママが亡くなってしばらくしてからかな」

リーナの顔が好きだった人に出会った時の様に仄かに赤く頬を染めながら話してくれた。

大好きだったママが死んでしまつて凄く悲しくて、お気に入りのお城下が見渡せるお花畑に行き時々独りで泣いていたの。

そんな時にあの人に出会つたの。不思議な感じのする人だった。

その男の人は日本の映画で見た事があるようなお侍さんの様な恰好をしていたの。

「Guten Tagかな？ それともBonjourかな」

「Buongiorno！」（こんにちは）

「Ciao！」（やあ）

ママの祖国のイタリア語で話すとイタリア語で答えてくれた。

「綺麗な場所だね。隣良いかな？」

「う、うん」

初対面なのに不思議に怖くなかつたの。

いつもの私なら皇女として初対面の人には常に警戒心を抱くのに、そんな物すら感じさせないくらいにその人は自然に隣に座つた。

次の日、そこに行くと男の人は私より先にそこに座って流れる雲を見ていた。

そして男の人の横には黒い子犬が居たの。

それから男の人が気になりだして毎日そこに行ったわ。

するといつも同じ姿勢で風に吹かれながら空を見上げ雲を見ていた。

「でね、不思議に思っただけ聞いて、何をしているのって」

そうしたら世界中を旅して空を見上げ雲を見ているんだって。

その人は世界中の色んなお話を聞かせてくれた、でも別れは突然やってきました。

「さよならだよ」

「SA・YO・NA・RA?」

「そう僕の国の言葉でArrivederLa!と言う言葉だよ」

「あなたの国は何処なの?」

「日が昇る東の端にある小さな島国さ」

「ワンちゃんも一緒に帰っちゃおうの?」

「そうだな、こいつは知らない間に僕に懐いてしまったからね。君がこの子を守ってくれるかな」

「うん！ 私が守る。この子のお名前はなんて言うの?」

「ハーンだよ」

「ハーン、これからよろしくね」

男の人から黒い子犬を渡されると子犬は私の顔を舐めてくれた。

「どうして帰っちゃおうの?」

「君と一緒に居て思い出したんだ。僕にも守るべき人がいるって、

僕じゃなきゃダメなんだって。ありがとう、小さなお姫様」

「お名前を教えて、あなたのお名前を」

「僕は名なんて無い、ただの雲だよ」

「また会える?」

「生きていればきつとね。それじゃ僕の国・日本のおまじないを覚えてあげる」

「あの男の人はそう言いながら私に指切りを覚えてくれて、私のおでこにキスをして微笑んでくれた。だけどどうして私の事をお姫様だつて知っていたんだらう」

「それで男の人はどうしたの？」

「あの時の光景は今でも焼き付いている。遠くを見つめ愛おしそうな瞳をして爽やかな風の様子にお花畑の斜面を駆け下りて去って行ったんだよ。その男の人とハーンのおかげで私は立ち直れたの」

その時、再び誰かが私達の部屋をノックする音がした。

「はい」

「八雲君はいるかな？」

ドアを開けるとラフな格好をしたリーナのパパが立っている。

「大公……」

「八雲君の娘さんの菜々海さんだね。リーナから話は聞いているよ、リーナの事には感謝している」

「感謝なんてそんなリーナは私の友達です。当たり前的事をしただけですから。それにリーナに会えて良かったし」「菜々海」

「おや、リーナもいるのかな」

「パパ、どうしたの？」

リーナの声を聞いて大公が部屋の中を覗き込んだ。

「大公。よろしければ中に」

「それじゃ少しだけお邪魔するよ。それと大公なんて気を遣わなくて構わないからね」

「えっ、でも」

大公が部屋に入ってくるとリーナが直ぐに椅子を準備して大公は腰を掛けた。

「そうだよ、菜々海。私のパパだよ」

「うん、それじゃ……大公パパで」

大公の名前はジークフリート デイ ヴァレンシュタインって言うんだけどジークフリートさんなんて言いづらいんだもん。

「パパは城下でワインを飲んでいると思う」

「そうか、教えてくれてありがとう」

大公パパが優しい瞳で軽く頭を下げてくれた。そして思い切って聞いてみることにした。

「大公パパ、聞いても良いですか？ リーナが日本に興味を持ったのはお花畑で日本人の男の人に出会ったのが切っ掛けだったけれど大公パパはどうしてなの」

「お待さんの話をリーナから聞いたんだね。私が日本に興味を持つ切っ掛けになったのはアメリカで1人の男に出会ったからだよ」
大公パパがゆっくりと回想する様に話し始めた。
その顔はリーナと同じようにとても嬉しそうだった。

あれは妻のエリアとの最後の家族旅行にアメリカへ行った時だった。確かカルフォルニアの辺りだったと思う。

砂漠の真ん中を何処までも真っ直ぐなハイウエーを車で走っていたのだよ。

ヴァレンシュタインとは違い何処までも見渡せて広大でね、すれ違いう車さえいない。

そんな砂漠の真ん中で賊に襲われ車を取り囲まれてしまったのだ。車は防弾仕様になってはいたが車内には幼いリーナがエリアに抱かれながら怯えている。

極秘の旅行中故に賊に対する対抗手段と言えば拳銃のみでね、助けを呼ぼうにも砂漠の真ん中だ。

賊の一人が後部座席にいる私に向かって自動小銃を向けながら何かを喚き散らしている。

テロリストではなくただの物取りだと判って思案をしても答えは出てこない。

すると自動小銃を私に向けていた男の体が何かに弾かれる様に崩れ落ちたのだ。

驚いて窓から恐る恐る覗き込むと男は両足から血を流して体を震わせていた。

車を取り囲んでいた賊は騒然としある者は当たりを警戒し、ある者は私達の乗る車に向けて引金に指を当てた。

次の瞬間、車に銃を向けて引金に指を当てた男が吹き飛びハイウエーに転がった。

後ろからの気配に驚いて後ろの窓から見ると1台の軍用車が接近している。

それを見て私は驚いたよ、猛スピードの軍用車のルーフから1人の男がライフルを構えていた。

軍用車は私達の車のすぐ後ろに止まりライフルを構えていた男が飛び降りてきた。

その後はあつという間だった。

数人の賊の体が宙を舞い焼けたアスファルトに叩きつけられた。

軍用車を見ると5人の屈強そうな軍人が歓声を上げてまるで大リーグの試合でも観戦しているかのようなようだった。

賊は撃たれた仲間を放置して慌てて車に飛び乗り逃げ出した。

すると軍人の1人が車から対物狙撃銃を持ち出して賊を退けた男に渡したんだ。

男は銃を受けとり、膝をついて構えカウントを始める。

「1、2、3、4……8、9、シュート！」

すると遙か前方で砂煙が舞い上がる。

1カウント・100メートルで1キロ先の走り去る車に難なく銃弾を撃ち込んだのだ。

軍人達はまるで自分の事のように喜んでハイタッチを交わしていたよ。礼を言おうと家族共々車から降りると男はしゃくり上げているリーナの頭を撫でてくれて涙を指でふき取ってくれたよ。

『もう、大丈夫だよ』と言いながらね。

不思議な男だった、掴み所がなく飄々としていてね。

礼を言つて名前を聞くと英語で聞いたにも拘らず東洋の言葉で笑いながら答えた。

「俺は雲だ」

するとリーダーらしき男がそれを聞いてこう言った。

「貴様が雲なら俺はさしずめ雲を運ぶ風だな」

私が改めて礼をしたいのでとリーダーらしき男に所属を聞くと笑いながら答えた。

「13小隊のファントムだ。後始末は州警察に連絡しておく。良い旅を」

そう言うのと男達は皆笑顔でそれぞれの言葉で別れを言って手を振って軍用車に乗り込んで走り去って行った。

まるで心地よく吹き抜ける風のように気持ちの良い連中だった。

「帰国後にアメリカの軍に問い合わせをするとそんな小隊は存在しないと言われたよ」

「えっ、それで大公パパはどうしたの？」

「仕方なく私が身分を明かすとこれはトップシークレットだと前置きをして特殊部隊中の特殊部隊で存在しない事になっていると、それ故に個々の情報についても何も教えられないがその男は隊の中でもトップクラスの日本人だと教えてくれた。それから日本と言う国に私が興味を持ち命の恩人が生まれた国が大好きになったのは」

「パパ、私にはそんな記憶が」

「リーナは幼かったし、帰国後しばらくしてアリアの様態が急変したからね、憶えていないのも無理はないのだよ。すまない、アルフオンスが探しているようだ私はこれで失礼するよ」

そう言いながら大公パパは携帯を取り出しながら部屋を後にした。

私はリーナと大公パパの話聞いて今まで穴だらけだったパズルのピースがコトンと填まった気がしてリーナに真っ直ぐ向きなおした。

「リーナ聞いてくれる。大公パパやリーナ達をアメリカで助けたのはパパだと思っの」

「ええ！」

「だってそう仮定すると全ての事が説明付んだもん。私と早苗さんが拉致されてしまった時に早苗さんにパパの過去やママとの事を全

て教えてもらったの。パパとママは出会ってから2か月だけで事情があつて別れてしまったの。その直後にパパはアメリカに渡つてどんな手を使ったのかは判らないけれど特殊部隊に入隊している。そして特殊部隊でもトップクラスの数少ない隊員だつたつて」

「でも、私が出会つた男の人も八雲なの？」

「実はね。私がパパと出会つたのは私が3歳の頃にママが死んだと聞かされたお葬式の時だつたの。私もパパが居るなんて知らなかつたし、パパは私が生まれた事すら知らされていなかった。そしてママの葬儀が終わるとパパは突然行方不明になつてしまった。すごくシヨックだつた、パパは私の事が嫌いなんだつて子ども心に凄く傷ついた」

「菜々海がそんな辛い経験をしていたんだね。でも八雲は何処に？」

「でもパパは帰ってくれた。優しい女の子と出会つて私の事を思い出して」

「でも、お互い大変だつたんじゃないの？」

「うん、凄くね。私はパパに嫌われていると思ひ込んでいたしね。ギクシャクしていたけれどある日、夜中に目が覚めておトイレに行こうとしたらパパの部屋からすすり泣く声が聞こえてきたの。部屋を覗くと真つ暗な部屋でパパが泣いていたの、ボロボロになつたママの写真を握りしめながら。その時に気付いたの、パパも辛く苦しかつたんだつて」

「でも……」

リーナはまだ納得がいかないみたいだつた。

深呼吸をして心を落ち着かせてもう一度だけ頭の中で整理してリーナに話し始めた。

「時系列にそつてもう一度だけ言うよ」

「うん」

リーナも真つ直ぐに私の目を見て答えてくれた。

「ママと早苗さんは本当はね、凄腕のハッカーで手に入れてはいけない情報を手手してしまつて逃げている時にパパに出会つて匿っ

てもらった」

「そしてパパとママは2か月だけの短い間だったけれど恋におち愛し合った」

「ママと早苗さんは取引をして保護プログラムで保護をしてもらおうべくパパの元を離れたって言うのが建前で本当はパパに迷惑を掛けたくなかったんだと思う。それでも別れがたいパパとママは誰にも告げずに永遠の別れになるかもしれないのに2人の唯一の証として婚姻届を提出していた」

「パパはその後アメリカに渡り特殊部隊に入り、リーナ達家族を偶然助け。パパはリーナと出会った」

「ママが死んでしまつて私はパパに出会い、パパはその後行方不明になつた」

「パパは世界中を放浪していたんだと思う。そんな時にリーナと再会し私の事を思いハーンをリーナに預けて帰国したの」

「どう、これが一番自然で辻褄が合い全ての事を説明できるでしょ」
「未だに信じられないよ。だって」

リーナが困惑している。それは仕方がない事なのかもしれない。

「そうこの話は仮説の域を出ないよね。大公パパもリーナも出会つた男の人の名前を聞いていないし。パパに確かめた訳じゃない。でもこう仮説を立てると全ての事に説明ができる。リーナがヴァレンシュタインでパパと出会つた時にお姫様だつて言つて事、そしてハーンの名前を知つていてハーンがパパを憶えていた事もね」

「でもどうして」

「パパがリーナをお姫様だと？ それは紋章じゃないかなあ、パパがリーナと東京で遭遇した時に指輪を見て何かに気付いたみたいだつたつて早苗さんが言っていたから」

「それでも信じられない。何度も八雲と出会い助けられていたなんて」

「それとハーンの名前だけ」

「えっ？ ハーンの名前？」

「そう、多分。パトリック・ラファディオ・ハーンから取ったんだと思う。日本ではラファディオ・ハーンとして知られている」

「誰なの？」

「西洋と東洋の両方に生きてと言われる人でお伽話やの怪談を書いた人。日本名は小泉八雲だよ」

「え……」

「それに私のママの名前は『空』その男の人が見ていたのも空だったよね」

「うふふ、なんだか不思議な事ばかり。だって私のママの名前のアリアはイタリア語で空気や空って言う意味なの」

笑い顔とも泣き顔とも取れるリーナの瞳から光るものが落ちた。

私はリーナの事が大好き、親友だと思っっているからこそ言いたい事を言い合いたい。

リーナが落ち着くのを待つて一息ついて口を開いた。

「リーナはパパの事をどう思っているの？」

「好きよ。八雲も菜々海も」

「ああ、じれつたいなあ。娘の私がこんな事を言うのは変だけど単刀直入に言うね。パパと一緒にいたくなの？」

「えっ、そ、そんな事を急に言われても困るよ。確かに八雲は素敵な男性だと思う。でも……私は……」

モジモジして赤くなっただかと思っただりリーナは直ぐに悲しげな顔をして俯いてしまった。

そうだよ、リーナは一国のお姫様だもんね。

今までも皇女としての立場を弁えて色々な事を我慢し切り捨てて生きて来たのだと思う。

でも、皇女のリーナとしてではなく親友のリーナに私は伝えたい。

「リーナ、最後に聞いて。何処かの皇子様と結婚してもパパの事を忘れないでね」

「そんなの嫌！ 私のママはイタリアの普通の女の子だった。パパがイタリアを訪問中に出会って恋をしたの。私は誰かに決められた

結婚なんか絶対にしない。私は私が選んだ人として結婚したくない。それに……」

リーナが大きく深呼吸をして私の目をまっ直ぐに見た。

「私は八雲が好き。大好き、できる事ならいつも傍に居たい。でも、八雲の気持ちが判らない。優しくしてくれたのはミッシェンだったからなんじゃないかって」

「やっとリーナの本当を言ってくれたね。パパはリーナの事が好きなんだと思う。でも立場上そんな事は許されない。だからあんなにイライラしていたんだと思う。でもね、パパは自分から動く事は決してしないと思う。直球で強引に押しかけるくらいの事をしないとパパは首を縦に振らないよ」

「ありがとう。でもこれだけは判って私は皇女なの」

「光と影か……まるでお日様とお月様みたいだね。照らし照らされているのに決して相まみえないのかなあ。光と影が一つになった時には凄い宝物が手に入る様な気がするけれど」

それからお互いに抱き合っただけ泣いた。

凄く簡単な事なのにとつともなく困難な事で不可能に近いくらい高校生の私には荷が重かった。

お花畑

翌日は荘厳な空気に包まれていた。

お城の礼拝堂で騎士叙任式が執り行われている。

現在では形式的なものにしか過ぎないけれど今でも騎士隊が活躍しているヴァレンシュタインではとても名誉あることだと執事の人が教えてくれた。

式はドイツの刀礼にのっとり行われている。

祭壇には紋章が飾られミサが執り行われた。

祭壇から一段下がったところで、クセ毛の髪の毛を綺麗に後ろに流し騎士隊と同じ格好をして綺麗な青いマントを羽織ったパパが膝立ちをして頭を下げている。

そして祭壇の前には金糸や金のリボンで装飾された純白のドレスを着て髪にティアラをつけたリーナが剣を持ちパパの肩に宛てがいドイツ語で何かを言っている。

多分、主君に対し生涯忠誠を誓うかなんて事を言っているんだと思う。

あまりにも神聖で重々しく空気が張り詰めていてこんなに緊張したのは生まれて初めてだった。

リーナがパパに剣ではなく指輪みたいなものが通されているチェーンを首に掛けた。

「あなたの最初の願いを伺いましょう」

驚いた事にリーナは突然日本語で話し始めた。周りにいる参列者に動揺が走るけれど大公パパが黙認している為に異議を唱える者は一人もいなかった。

「プリンセス・リーナ。姫君と知りながら不躰な言い方をお許しください。リーナは光の中をリーナ自身が信じる道を歩いて欲しい。

決して一時の感情で道を誤る事の無い様にそれが私の願いです。忠

誠を誓った以上、何かあれば地球の裏側からでも飛んで参りお力になりましょう」

パパの言葉はリーナに対して『さよなら』を告げる言葉だった。

光の中を……パパには全て見透かされていそうでもとて敵わないと実感した瞬間だった。

それと同時に大人ぶって全てを割り切ろうとするパパに対し怒りが込み上げてくる。

リーナが何故こんな重要な式で周りには判らない日本語でパパに問う事をしたのか理由が判らない訳じゃないと思う。

それでもパパは自分の気持ちを握りつぶした。

でも、それは仕方がない事なのかもしれない。

パパは今まで裏の世界で生き続けてきて、それはパパ自身が身を持って判っている事だと思うから。

光と影が決して交わらない事を……もし交われれば影が光を穢してしまふから。

諦めきれずにパパの気持ちを聞いてチャンスのを蓋をこじ開けようと思ひ私とパパが泊まらせてもらっている部屋に急いだ。

「パパ！」

「どうしたのそんな顔をして」

「へえ、何をしているの？」

パパはトランクに鍵を掛けている所だった。

「何をしているって日本に帰るんだよ。まさか何でなんて聞かないよね、予定が少しずれたけど、学校でしょ」

「あっ！」

「うわあ、忘れていたの？」

「だ、だって。色々な事があって……」

蓋を開けようとしたら思いっきり蓋を叩き締められた気分だった。

それにリーナや大公パパにお別れの挨拶もしてない。

「早く、行くよ。こんな所でオチオチしていたら知らない間に婿養

子にされそうだからね」
そんな事を言いながら急ぎ足で城を後にする。

閉ざされた城門まで来るとパパの顔を見た番人が慌てて城門を開けた。

すると、1台の赤い車が止まっていて女の人がお城の守衛ともめていた。

「だから、何度言ったら判るの？ ヤクモ・スメラギの友人だと言っているでしょ」

「あれ？ 早苗さん？」

大声を張り上げていたのは早苗さんだった。

私の顔を見た瞬間に早苗さんは怒りの矛先をパパに向けて爆発させた。

「八雲！ あんたね！ いい加減にしなさい。1週間近く音沙汰なしてどういう事なの？ 携帯は電源を切ったまま。上（情報処理課）に問い合わせたら温泉旅行で休暇届が出ているっていうし。やつとの事で居場所を調べればスイスに居るなんて」

「何を美咲は怒っているの？ 温泉に入りたスイスまで来たらいけないの？ 休暇届だつてきちんと決められた手続きを踏んで提出して受理されたんだし。温泉気持ちよかったよね、菜々海」

「うん！」

「ほら、それよりちょうど良いからサンヴァイスの駅かチューリッヒの空港まで送つてよ。今からならまだ飛行機に余裕で間に合うし。そうすれば菜々海に学校を休ませることも無いから」

「あのね。私は来たばかりなのよ」

「それじゃ、良いや。ゆつくり観光でもして来れば。東都女子に連絡を入れて学校を休ませるから」

「もう、何であんたは都合が悪くなると菜々海を盾にするの？ 私が菜々海の事が絡むと断れないのを良い事に」

「別に、今回の件をこれでチャラにするけど」

「……さあ、菜々海。車に乗って学校に間に合うように空港に送り届けるからね。でも少しだけ寄り道をするわよ。私だって綺麗な景色を拝んでみたいもの」

パパの一言で早苗さんの態度が180度変わった。

今回の件ってなんだろう、詮索する間もなくパパに車に押し込まれてしまった。

早苗さんが連れてきた先は城下が一望できる草原だった。

「もう少し早い時期に来れば綺麗なお花畑なんでしょうね」

「もしかして、ここって」

ここはリーナが話してくれたお侍さんとお出合った場所だと思っ。

パパを見るとまた空を見ている。未だママを忘れられないでいるのかなあ。

「知っている、菜々美。青い薔薇の花言葉は昔までは『不可能』なんて言われていたけれど今は違うのよ」

「ええ！」

「『神の祝福』や『奇跡』が新しい本当の花言葉なの」

「パパあ」

私がパパを問い詰めようとするときいきなりパパが私をお姫様抱っこして斜面を駆けだした。

それはまるで爽やかな風になった様だった。

それから再び機上の人になった。

飛行機では来た時と同じように根こそぎ勢いを削がれ爆睡してしまった。

気が付くと間もなく成田に着く時間でお昼ごろに飛行機に乗ったのに時差の関係から日本時間で言う翌日の早朝になっていて。

帰宅すると爆睡していたから大丈夫だよと言われ、着替えさせられて学校に行かされ無理矢理現実の世界に引き戻されてしまった。

リーナに再会させる為に温泉旅行なんて無茶苦茶なこじつけで、イスとヴァレンシュタイン公園に連れて行かれて2か月が何事も無く過ぎたと言うか過ぎてしまった。

パパは何も変わらずに毎日を過ごしているように見える。

あんなにリーナの前では大見得切ったのに、本当の事を聞きたいけれどそれは何故だか躊躇った。

パパはアメリカでリーナが幼い頃にリーナとリーナの家族を偶然通りかかり助けたの？

どうして世界を放浪していた時にヴァレンシュタイン公園を訪れたの？

そしてそこで本当にパパはリーナと再会したのだろうか。

もしかしたらリーナのママが亡くなったのを知ってリーナを慰める為に訪れたのかもしれない。

それは私の推測でしかない。

真実と本当の気持ちは今もパパの中だけにある。

時間だけが何も変わらず過ぎていく。

今年の東京は寒くなるのが早いとニュースで言っていた。

12月になると連日寒さが身に沁みるようになり。

気の早い雪が都心の高層ビル群のコンクリートジャングルに舞っていた。

「ホワイトクリスマスだね。皇君」

「花さんでもロマンチックな事を言っんですね」

「あら、随分な言い方じゃない？」

僕は液晶から目を離さずにキーボードを叩いている。

花さんがキーボードを叩く指を止めて僕の方を見ている。

「今日はクリスマス・イヴなんです。こんな情報処理課にも均し

く訪れるんですね」

「本当に酷い事を言っている自覚はあるの？」

「広報の佐伯さんは午後出っけ言っていたからちょっとデートは厳しいですもんね」

「な、何を言っているのよ」

顔を真っ赤にして花さんが照れている。

伊達にパシリにされて総務部を走り回っている訳でなくそれなりに色々な事が耳に入ってくる。

花さんと佐伯さんの事もそんなうちの一つ。

警視庁の総務にも普通の企業と同じように女子職員が多く噂好きなのも変わらない。

人畜無害だと思われている僕には話しやすいのか絶えず最新情報が聞けて、時には裏でそれが重要な鍵になっていたりするから役得と言えば役得かもしれない。

「皇君にはロマンスは無いの？」

「縁遠いですね。菜々海がケーキとご馳走を用意して待っていてくれますから」

「美咲さんなんてどう？」

「あのですね。空の親友と付き合えと？ それに空の親友じゃなくても御免です。あんな腹黒い人なんて」

「皇君程じゃないと思うわよ」

「それにしても年の瀬が迫ってくると下は騒がしくなりますね」

「そうね、雪も降っていることだしね」

あまり突っ込まれるのが嫌で話題を逸らした。

それにしても今日は何だか下が大変な事になっている様な気がしたが、時々年の瀬にはある事なので気にせずにパソコンに集中した。

しばらくすると廊下をヒールで走る音が聞こえてくる。

普段はあり得ない事なので末席つまりドアのすぐ近くに座っている僕と花さんは不思議に思い顔を見合わせた。

「何の騒ぎですかね」

「そうね。でもこの雪の舞い散る中をヒールってある意味ツワモノよね」

「僕はただのお馬鹿さんにしか思えませんよ」

するとヒールの音が大きくなり情報処理課のドアが勢いよく開き美咲が飛び込んできて、ドアをもの凄い勢いで閉めてドアに寄りかかり肩で息をしていた。

「皇君。お馬鹿さんは美咲女史みたいよ」

「あの。美咲さん。何の用ですか？」

「八雲、あれを何とかしなさい！」

「あれですか？」

「そうよ、あれよ。四本足の毛むくじゃらで私を見ると尻尾を振ってくる獣よ」

「そんな獣がこんな場所に居るとは思えませんけれど」

「それが現れたのよ。お蔭で上が大変な事になっていて何事かと思つて覗いたら追いかけて」

美咲さんが怯えているのを初めて見た。何が美咲さんを追い詰めているのだろう。

その時、ドアの外で大きな影が動きドアを爪の様な物で引つ掻く音がすると流石に花さんの表情も一変した。

「す、皇君。あれは何なの？」

「僕に聞かれても」

「モズク頭の八雲。業務命令だ。あれを処理してこい！」

騒ぎに堪り兼ねた課長が自分のデスクに隠れるようにして怒鳴り飛ばした。

「嫌ですよ。僕の専門外です。怪我でもしたらどうするんですか」

「直帰しろ！」

渋々立ち上がりドアに向かう。

クンクンと鼻を鳴らすような音がする。

用心しながらドアノブを捻ると何かが体当たりをしてドアが開き黒

い大きな影が飛び込んできた。

「うわぁ！」

机の上に押し倒され顔をベロベロと舐められてしまった。

「八雲！ そ、外に放り出せ！」

「無理です！」

「何とかするまで帰ってくるな！」

「了承。ハーン GO！」

ドサクサに紛れてハーンに指示を出すとハーンが走り出した。

黒い大きな影はニューファンドランド犬のハーンだった。

ハーンが東京にいると言う事から導き出される答えはただ一つで。

ここにハーンが居ると言う事は非常に危険な状態なのかもしれない。

直ぐにハーンを追いかけて下に降りるとそこは冬の嵐が吹き荒れたような惨劇になっていた。

唯一の救いは怪我人が見当たらないと言う事だが当分の間戻らない方がいいかもしれないと思った。

ハーンを追い出すように追いかける僕の事を皆が見ている視線が痛い。

それでも最優先事項は別の所にある。

正面玄関を飛び出すと目の前に高麗門の外桜田門が見える。

ハーンは右に向かい走っていく。

この先200メートルには日比谷公園が……

案の定、ハーンは日比谷公園に飛び込んでいく。

後を追う様に日比谷公園に駆け込み草地広場をショートカットすると大噴水が見えてくる。

大噴水の手前でハーンが止まって振り返り僕の姿を確認している。

噴水の周りに人影は殆ど無い。

雪が舞い散る寒空に噴水なんて絵面は綺麗だが寒さが数倍になるだけだ。

そんな噴水の縁に座り込んでいる女の子の姿が目に入り、それと同

時に女の子をナンパしようとしている2人の若い男の姿が見え締まりのない男の声が聞こえてくる。

クリスマス・イヴにナンパなんて無粋極まりない。

ハーンの目を見て指示を出す。

「GO！」

リーナに向かってハーンが勢いよく走り出し手前の男に飛び掛かると男がよろけて水しぶきを上げて噴水の中に転げた。

それを見て驚いて立ち上がったリーナを守る様に、もう1人の男を追いかけて回し前足で噴水の中に押し倒した。

雪が降る中をハーンによって寒中水泳させられる羽目に遭った男はガタガタと震えながら水も滴る良い男になって逃げだした。

見ている方が身震いする。

ゆっくりとリーナに向かって踏み出すと僕に気付いたリーナが慌てて立ち去ろうとした。

「ハーン！」

僕が声を掛けるとハーンは忠実にリーナのクラシカルな茶色いケープコートの裾を甘噛みしてリーナを引き留めクンクンと寂しそうに鳴いている。

「リー……」

声を掛けようとするとリーナの瞳から大粒の涙が溢れだす、ここで取り乱す訳にはいかない大きく息を吸った。

「1人で危ないじゃないですか」

「ハーンと一緒に来たのにハーンが急に居なくなっ……」

「どうしてここに？」

「……じゃない」

「ん？」

「八雲が助けてくれた所だからじゃない！ 八雲に会いたくて。でも会うのが怖くて。それでも八雲の気持ちを知りたくてパパに無理を言っ……」

「僕の願いは聞き入れてくれないんだね」

リーナはしゃくり上げ小さく震えながら首を振った。

「でも、そう言う」

「違う！ 違う！ 私は自分が信じる道を歩いていきたい。光の中をあなたと一緒に歩いていきたいの。一時の気の迷いじゃない！ 来る日も来る日も何度も何度も考えた、でも答えなんて出ないよ！

だって八雲の気持ちが見えないんだもん！」

ノックアウト、完全に打ちのめされてしまった。

僕の目の前には普通の女の子が立って泣いている。

1人の女の子が自分のどうしようもない気持ちを真っ直ぐに爆発させている。

こんな皇女様は世界中探しても何処にもいないだろう。

皇女なんて関係ないのかもしれない。

彼女にしてみればそれはただの肩書にしか過ぎない。

主任や係長なんて肩書じゃないかもしれないがそんな事は一足飛びにどうでもいいことだ。

押し殺していた自分の気持ちを素直に声に出そう。

光と影なんて関係ない。

彼女と同じなら変わらない1人の人間として。

「リーナ、大好きだよ。愛している」

僕が口に出した瞬間に時が止まった。

リーナの表情が固まり。

大噴水の吹き上げる水は宙で静止し音すらしない。

その代わりにリーナの瞳から再び涙が溢れだす。

スーツを掴んでいるリーナの手に力が入り。

リーナの号哭と共に全ての音が戻ってきた。

今の僕にできる事はリーナの冷え切った体を優しく抱きしめる事だけだった。

「ゴメンね、辛い思いをさせてしまって」

首を微かに横に振りリーナが顔を上げてゆっくりと目を閉じた。

あの時の一時の気の迷いなどではなく今は確かなものがあつた。静かに唇を重ねるとリーナが首に手を回す。優しく抱きしめた腕に力が籠った。

「くちゅん」

風呂場から可愛らしくしゃみが聞こえてくる。

抱きしめたリーナの体は冷え切っていた。

家に連れて帰ると菜々海は買い物にでも行っているのだろう家にはいなかった。

それもその筈で今はまだお昼前で、キッチンには仕込み中の鍋がコン口の上でありクリスマスの料理を作っている途中なのだろう。直ぐに風呂のスイッチを入れ。

リーナの護衛役のハーンはリビングのソファで気持ち良さそうに大きな欠伸をしている。

しばらくするとリーナが出てきた。

湯上りで頬がピンク色になっている。

僕のトレーナーの上だけを着ている、この家は床暖房が完備されていて冬でも何処に居ても寒くない。

何処となくリーナに落ち着きがない、戸惑いが見え隠れしている。

あの時の僕には何も守れず守る力さえ持ち合わせていなかった。

でも、今は違う。『偶然は必然で連鎖を繰り返す、人生なんてそんなもの』空が言っていた言葉を思い出した。

ありがとう、そして、さようなら。

僕は心の中に仕舞い込んだ。

「何も心配はいらないよ。僕の傍に居てね」

「うん」

リーナの少し伸びた前髪を指で払い額に軽く唇を落とした。

すると、ガシャッとスーパールの買い物袋が落ちる音がして玄関を見ると菜々海が立ち尽くしていた。

全身から怒りに満ちたオーラが噴出して、拳に力が入りフルフルと

震えている。

「菜々海、お帰り」

「パパ、パパの馬鹿！」

瞬時に僕に向い駆け出し上段の蹴りを繰り出す。

何とか片手を上げてガードするけれど菜々海の蹴りは鞭の様にしなり側頭部に衝撃を受ける。

バランスを崩した僕の体に情け容赦なく中段の蹴りが突き刺さり。

何とかこらえて腕を突き出すと待っていましたとばかりに菜々海に腕を掴まれ。

次の瞬間、僕の体は宙に舞い廊下に叩きつけられた。

止めの一発が落ちてくると思うと何か柔らかく良い香りがする物が僕に覆い被さった。

「菜々海、ダメ！」

「ふえ、リ、リーナ？」

菜々海の体から力が抜けて廊下にしゃがみ込んだ。

「痛たたたた」

「パパ、ゴメン」

「もう少しだけ冷静にね。菜々海の悪い癖だよ、頭より体が動いちやうのは」

「だって、パパが知らない女の人にキ、キスをしているから」

「それに関してはちゃんと説明するからね」

僕達は今リビングに居る。

リーナは僕の横で近いんじゃないと言うくらいに寄り添うように座り、僕とリーナの前では菜々海が申し訳なさそうに俯いている。

ハーンはラグの上に寝転んでくつろいでいた。

「どうしてリーナがここに居るの」

「それは……」

「私がパパに無理を言ってここまで来たの。だって騎士が主君の傍に居てくれないんだもん、だから主君の私が騎士の傍にいる事にし

たの。そうすればいつだって守ってもらえるでしょ」

「でも、リーナは」

「それじゃ、菜々美はどうなの？ 八雲の裏の事を知っているんでしょ。普通の女子高生は光の世界なんじゃないの？」

「だけど、リーナは皇女で皇女と言えば継承者の事でしょ」

「パパにはつきり確認した訳じゃないけれど私は第2位継承者だから」

「ええ、それじゃ誰がヴァレンシュタインを継ぐの」

「恐らく称号と元首を継ぐのはライナ デイ ヴァレンシュタインだよ。今は騎士隊長だけだね」

「「ええ！」」

菜々海が驚いて声を上げるけどそれ以上に驚いていたのはリーナだった。

「八雲。ど、どうしてそれを」

「意味が分からないよ」

「ライナはリーナの双子の弟なんだよね。双子に良くある話だよ。

優秀な姉に対して劣等感の塊の様な弟。だから大公はライナを試すような事をしてきたんだ、リーナを継承者にしてね」

「何でパパがそんな事を知っていたの？」

「ライナはリーナの影武者として公の場所に出ていたよね」

「は、はい」

「大公がしてきた事が尽く裏目に出してしまった。リーナの立場をわかる様にと影武者にしたけれどそれはライナのプライドを著しく傷つけた。大公に認めてもらう為に騎士の道を選んだ」

「ライナは幼い頃から体を動かすのが好きで、逆に私は本を読んだりするのが好きだった。母が亡くなってからライナは粗暴になっ
てしまいい父も困り果てていたの」

「そんな事があったんだ」

「うん、でも八雲と菜々海が帰ってしまってからライナが変わったの。必死になって世界情勢や経済に色々な国の言葉を勉強し始めた

の

「凄い事じゃんって、まさか……パパが何かしたんじゃない」

菜々海の視線が突き刺さり、リーナも冷ややかな目で僕を見ている。立ち上がるうとするところリーナが僕の腕に抱きつくようにして僕の動きを止めた。

「さあ、パパ。お話してもらいましょうか」

「あはは」

乾いた笑い声がリビングにこだまする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5164u/>

雲と青と休日

2012年1月1日23時49分発行